

ア行

アイコン

icon (icon) [áikan] 「アイコン」

もともとは肖像という意味であり、宗教的に聖画像のことを指す。しかしパソコンが普及した現在では、画面上でファイル (file) やコマンド (command) などを分かりやすい絵に置き換えたものを言う。発音は頭にアクセントがあり「アイコン」となる。

アイス

ice (ice) [áis] 「アイス」

氷である。日本語の発音でほぼ問題がない。頭にアクセントを置き「アイス」となる。この派生語もやまのように日本語となっている。アイスコーヒー (ice coffee) , アイスクリーム (ice cream) , アイスクューブ: 角氷 (ice cube) , アイスホッケー (ice hockey) , アイススケート (ice skate) など数えればきりがない。ただし、アイスクャンディーという英語はない。米国では popsicle [pápsikl] 「パプシクル」と言うが、これは商標名である。

アイテム

item (i-tem) [áitəm] 「アイテム」

項目や品目のことである。日本語でもアイテムという。アクセントは頭にあり、-tem はあいまい母音であるので、発音は「アイテム」となる。

アイドル

idol (i-dol) [áidl] 「アイドル」

偶像あるいは崇拜される人物という意味である。発音は「アイドル」と日本語に近い。

アイビー

ivy (i-vy) [áivi] 「アイヴィ」

植物の「つた」である。ただし、日本ではアイビーリーグ (Ivy League) が有名である。これは、米国東部の有名な 8 大学である。ハーバード (Harvard) やプリンストン (Princeton) などの大学がこのリーグに属している。これら大学のキャンパス内の建物につたが生い茂っていることから、こう呼ばれるようになった。

アイランド

island (is-land) [áilənd] 「アイルンド」

島のことである。日本の本州はメインアイランド (main island)、九州は九州アイランド (Kyushu island) と言う。アクセントは頭にあり、-land はあいまい母音であるので、発音は「アイルンド」となる。

アイル

aisle (aisle) [áil] 「アイル」

教室、劇場、客車、教会、飛行機などの通路のことを言う。いままでは、飛行機の座席予約のときに、窓側 (window) か通路側 (aisle) かという時に、通路側をアイルという。発音は、日本語に近く「アイル」である。

アイル

isle (isle) [áil] 「アイル」

小島のことである。日本でも天王洲アイルという地名がある。発音は、前出の aisle とまったく同じで「アイル」となる。

アイロン

iron (i-ron) [áíəŋ] 「ア_イウン」

日本では、洋服のしわをなおすアイロンと定着しているが、もともとは鉄という意味である。アイロンは鉄のかたまりを熱して洋服のしわをとったことに由来する。冒頭にアクセントがあり、-ron はあいまい母音である。よって「ア_イウン」となる。

アウト

out (out) [áut] 「ア_ウト」

野球のアウトであるが、もともとの英語は外という意味である。アウトサイド (outside) は外側という意味である。転じて、アウトサイダー (outsider) は部外者と言う意味となる。発音は「ア_ウト」となる。

野球で使うアウトカウントやアウトコースは和製英語である。英語では「アウトカウントはいくつか」は How many outs are there? と言う。アウトコースは outside である。

アウトレット

outlet (out-let) [áútlət] 「ア_ウトルト」

ガスや液体の出口のことである。米国では、電気のコンセントをこう言う。販売代理店という意味もあるが、日本では最近ブランド品の半端ものを安く販売する店をアウトレットと呼んでいる。-let はあいまい母音であり、アクセントは頭にあるので、発音はと「ア_ウトルト」なる。

アクアラング

Aqualung (Aq-ua-lung) [ækwəlŋ] 「ア_クウラング」

潜水用の水中呼吸器のことであるが、日本語でもアクアラングと言う。商標名である。Aqua は水という意味であり、lung は肺

である。水の中の肺という意味でつけた商標と思われる。頭にアクセントがあり、-ua-があいまい母音であるのは、発音は「アクウラング」となる。

アクエリウム

aquarium (a-quar-i-um) [ækwəriəm]

水族館である。養魚用の水槽のこともこう言う。発音は、頭があいまい母音であるのでアクではなく「ウクエリウム」となる。

アクシデント

accident (ac-ci-dent) [æksədənt] 「アクスドゥント」

事故などの思いがけないできごとを言う。発音は-ci-があいまい母音であり、頭にアクセントがあつてac-はcatのaと同じ発音となる。よつて「アクスドゥント」となる。

アクション

action (ac-tion) [ækʃən] 「アクション」

活動、行動、動作、演技のことをいう。演技スタートを「アクション！」というが、英語でもAction!は同じ意味で使われる。発音は「アクション」となる。

アクセス

access (ac-cess) [ækses] 「アクセス」

接近、出入り許可などという意味である。最近では、インターネットのサイトへ接続することをアクセスと言う。アクセスポイント(access point)はメールなどネットワークの中継基地である。アクセスタイム(access time)は情報などを入手するのにかかる時間である。これらは英語と同じ意味で使われる。発音は、頭にアクセントがあり「アクセス」となる。

アクセサリー

accessory (ac-ces-so-ry) [æksésəri] 「アクセスリ」

付属品や日本語のアクセサリーという意味であるが、この場合は複数形で使う。通常は形容詞で、「付属の」あるいは「副次の」という意味である。発音は「アクセスリ」となる。

アクセント

accent (ac-cent) [æksənt] 「アクセント」

アクセントのアクセントは頭にあり、ac-の母音は cat と同じ[æ]である。また-cent はあいまい母音である。よって「アクセント」となる。日本人は最後の t を発音しない方が無難である。

アゼリア

azalea (a-zal-ea) [əzéilia] 「ウゼイリャ」

つつじのことである。最近では、日本でもアゼリアという呼び方をよくするようになった。アゼリア通りなどという路の名前をよく見かける。発音は、あいまい母音が頭と後ろにあり「ウゼイリャ」となる。

アーティスト

artist (art-ist) [á:rtist] 「アーティスト」

芸術家。発音は頭にアクセントを置いて「アーティスト」となる。この語のもととなったアート (art: 芸術) も日本語となっている。こちらの発音は[á:rt] 「アート」となる。

アドバイス

advice (ad-vice) [ədvíis] 「ウヱヴァイス」

忠告や助言という意味である。日本語でもアドバイスと言う。英語の発音は日本語とかなり違う。頭はあいまい母音であり、アクセントは-vice にあるので「ウヱヴァイス」となる。ちなみに、顧

問のことを **advisor** [ədvaɪzər] 「ウ_トヴァイズ_ツ」 という。

アトピー

atopy (at-o-py) [ætəpi] 「ア_トピー」

先天的な過敏症。アレルギー体質の一種である。日本ではアトピー性皮膚炎 (**atopic dermatitis**) [dər:mətáti:s] が問題となっている。dermatitis は皮膚炎という意味である。発音は「ア_トピー」となる。

アトラクション

attraction (at-trac-tion) [ətrækʃən] 「ウ_トラァクシュン」

日本語では、客を惹きつけるための出し物のことを言う。英語のもともとの意味は「魅力」という意味である。tourist attraction は観光名所という意味になる。

物理では「引力」という意味である。the attraction of gravity は重力のことである。-tion の法則にしたがってアクセントは-tion の前の音節にあり、発音は「ウ_トラァクシュン」となる。

アドレス

address (ad-dress) [ədrés] 「ウ_ドレス」

住所という意味である。最近では、電子メールのアドレス (e-mail address) の方が一般的である。アクセントは-dress にあり、頭の ad-はあいまい母音である。よって「ウ_ドレス」となる。

アナウンサー

announcer (an-noun-cer) [ənáunsər] 「ウ_ナウンス_ツ」

日本語では「ウ」にアクセントがあるが、英語では-noun-にアクセントがある。しかも、最初の音と、最後の-cer は「あいまい母音」であるから、弱く「ウ」と発音する。つまり、「ウ_ナウンス_ツ」となる。ちなみに、この動詞形の announce の発音も同様であり

「**ナ**ウンス」、発音記号は[ə'náʊns]となる。

アナコンダ

anaconda (an-a-con-da) [æ'nəkánda] 「**アヌカ**ンドッ」

映画のタイトルにもなった、ブラジルアマゾン流域に生息する大蛇である。アクセントは-con-にあり、発音は「**アヌカ**ンドッ」となる。

アナリスト

analyst (an-a-lyst) [æ'nəlist] 「**ア**ヌリスト」

もともとは分析する人という意味であるが、現在では経済アナリストの意味合いで使われることが多い。政治経済の情勢を解説するひとをこう呼んでいる。日本にも数多くいるが、分析があたった試しがない。発音は、頭にアクセントがあり「**ア**ヌリスト」となる。

アナログ

analogue (an-a-logue) [æ'nəlo:g] 「**ア**ヌローグ」

計量型機器のこと。デジタルが数字で表示する機器であるが、針式の時計はアナログである。アナログ人間とは、古いタイプの人間という意味である。英語では「類似品」という意味で使われる。発音は、アクセントが頭にあり「**ア**ヌローグ」となる。

アニマル

animal (an-i-mal) [æ'nəmə] 「**ア**ヌムル」

これも日本語として定着している。それだけに日本語式発音で苦労させられる単語であり、まず通じない。アクセントは頭にあって、発音は cat の a と同じになる。さらに、-i-と-mal はあいまい母音である。よって「**ア**ヌムル」となる。最後の”l”は発音しなくとも良いくらい小さい。

アニメ（和）

動画のことであるが、アニメーションという英語を日本式に勝手に略したものである。

アニメーション

animation (an-i-ma-tion) [æniméiʃən] 「アニメイション」

日本では、アニメ映画あるいは動画という意味でしか使われないが、英語では、活気あるいは活気づけという意味で使われる。発音は「アニメイション」となる。

アネモネ

anemone (a-nem-o-ne) [ənémoni] 「ウネムニ」

カラフルな花の名前である。色合いが似ていることからイソギンチャクをこう呼ぶ。ただし、正式には海をつけて a sea anemone と呼ぶ。発音は、頭の a-と-o-があいまい母音であるので「ウネムニ」となる。

アバウト（和）

日本語では「いいかげんな」こと、あるいは「おおざっぱ」なことをアバウトと言うが、これは about を語源にした和製英語である。

アパート

apart (a-part) [əpá:rt] 「ウパート」

英語では「バラバラになる」あるいは「離れて」という副詞である。発音は「ウパート」となる。しかし、日本語では apartment building (house) の略として使われる。こちらの発音は apartment [əpá:rtmənt] 「ウパートムント」である。department store をデパートと呼ぶのに似ている。

アパレル

apparel (ap-par-rel) [əpærəl] 「ウパ^ァレルウ」

衣料、衣服という意味である。日本でもアパレル産業という。英語では apparel industry である。頭があいまい母音であり、アクセントは par-にある。よって発音は「ウパ^ァレルウ」となる。

アピール

appeal (ap-peal) [əpi:l] 「ウピ^{ール}」

「懇願する」という動詞である。「訴え」という名詞にもなる。日本語では名詞として使われる。頭があいまい母音であり、発音は「ウピ^{ール}」となる。

アブストラクト

abstract (ab-stract) [æbstrækt] 「ア^ブストラクト」

抽象的などという意味である。アクセントが頭にあることに注意する。発音は「ア^ブストラクト」となる。

アフターケア

aftercare (af-ter-care) [æftərkeər] 「ア^フト^ッケウ」

手術後や病気回復後の健康管理を英語ではアフターケアと言う。あるいは刑期終了後の更生指導のこともこう言う。

日本語では、アフターサービスの意味で使われることがあるが、これは和製英語である。アクセントは頭にあり、発音は「ア^フト^ッケウ」となる。

アフターサービス(和)

英語の after と service を勝手に合成した和製英語である。商品を購入した後のサービスであれば、after-sales service となる。

アフリカ

Africa (Af-ri-ca) [æfrikə] 「アフリク」

これは誰でも知っているが、日本語式発音では意外と通じない。まず、アクセントは頭にあつて、発音は cat の a と同じ[æ]になる。さらに、最後の-ca はあいまい母音である。よつて「アフリク」となる。

アベレージ

average (av-er-age) [ævərɪdʒ] 「アヴリジ」

平均という意味である。「平均する」という動詞にもなる。少し古い世代なら、ボーリングの平均スコアをアベレージと言うのを覚えているであろう。アクセントは冒頭にあり、-er-はあいまい母音である。よつて発音は「アヴリジ」となる。

アポ(和)

日本ではアポ無し取材と言つて、約束という意味で使う。ただし、これはアポイントメントを日本流に略したもので、英語ではない。

アポイントメント

appointment (ap-point-ment) [əpɔɪntmənt] 「ウポイントムント」

アポのもとになった英語で、日本では約束という意味で主として使われる。英語でも同様の意味があるが、任命や指名という意味でもよく使われる。頭があいまい母音で-point-にアクセントがあるので、発音は「ウポイントムント」となる。

アマチュア

amateur (am-a-teur) [æmətər] 「アムトゥ」

素人のことである。日本語ではアマと略して呼ぶこともあるが、これは和製英語である。発音はあいまい母音に注意して「アムトゥ」

となる。

アメニティ

amenity (a-men-i-ty) [ə'mi:nəti] 「ウミーンティ」

生活を快適にするもの。日本でもアメニティ空間（amenity space）などという。頭はあいまい母音である。-ityの規則にしたがって、アクセントは、その前の音節の-men-に置かれる。よって「ウミーンティ」となる。

アメリカ

America (A-mer-i-ca) [ə'merəkə] 「ウメルク」

ご存じアメリカ。でも、この発音がなかなか難しい。ここで A-mer-i-ca と下線を引いたように、3つも「あいまい母音」を含んでいる。アクセントは-mer-にあり、発音は「ウメルク」となる。

アメリカン

American (a-mer-i-can) [ə'merəkən] 「ウメルクン」

形容詞では「アメリカの」という意味である。メリケン粉とは小麦粉のことであるが、昔はアメリカから輸入していたのでアメリカン粉という意味でこう呼んだ。日本人には「メリケン」と聞こえたのである。実際に最初の音はあいまい母音であるので、はやく話すとほとんど聞き取れない。あいまい母音が3個あるのに注意すると、発音は「ウメルクン」となる。

アメリカンビューティ（American beauty）は、米国産の深紅色をした大輪のバラである。

アメリカンコーヒー（和）

薄口のコーヒーをアメリカンコーヒーと言うが、これは和製英語であり、海外では通じない。日本では、さらに略してアメリカンと言っても同じ意味になる。

アーモンド

almond (al-mond) [á:mənd] 「アームンド」

バラのなかまの木であるが、日本ではその木の実が有名。洋菓子やチョコレート (chocolate) に使われる。アクセントが頭にあり、-mond はあいまい母音である。よって「アームンド」となる。

アルコール

alcohol (al-co-hol) [ælkəhɔ:l] 「アルクホー」

この英語をはじめて耳にすると、まったく別物に聞こえる。アクセントは頭 al- にあり cat と同じ発音[æ]である。つぎに-co- はあいまい母音である。よって「アルクホー」となる。

アルバイト (独)(和)

ドイツ語の arbeit (仕事) に語源をもつ和製語で、日本語では臨時雇い仕事のことである。英語では a side job あるいは a part-time job と言う。

アルファベット

alphabet (al-pha-bet) [ælfəbet] 「アルフベット」

アクセントは頭にあって、発音は cat の a と同じになる。さらに、-pha- はあいまい母音である。よって「アルフベット」となる。

ちなみに、この単語のもととなったアルファ (alpha) も同様の発音で「アルフ」となる。うしろの -bet はベータに由来する。つまり $\alpha \beta$ (alpha beta) の合成語である。

アルプス

Alps (Alps) [ælpz] 「アルプス」

ヨーロッパで有名な山脈。Alp は高峰という意味で、その複数形に the をつけると (the Alps) アルプス山脈となる。アクセント

を頭にもってきて、後はいっきに発音する。「アルプス」となる。

アルペン（独）

Alpine (Al-pine) [ælpain] 「アルパイン」

アルプスのという形容詞である。日本人が使うアルペンは、Alpen で、ドイツ語である。日本でもアルペンルートと言う。これは日本アルプスの登山道のことである。また、アルペン競技は回転、大回転、滑降スキーである。発音は「アルパイン」となる。

アレルギー（独）

allergy (al-ler-gy) [ælrɔdʒi] 「アルルジイ」

異常敏感症のことであるが、日本語ではアレルギーが一般である。ただし、アレルギーはドイツ語読みであり、英語では通じない。英語では「アルルジイ」となる。

アンケート（仏）

多数のひとに同じ質問をする調査方法あるいは、その調査用紙のことである。ただし英語ではなくフランス語で、スペルはenquete となる。

日本人が「アンケート」と言って通じない場面に何度か出くわした。英語では questionnaire (ques-ti-on-naire) [kwɛstʃənɛər] 「クエスチュネウウ」 となる。

アングラ（和）

日本語独特の表現で、勝手に英語を略したもの。もとの英語はアンダーグラウンドである。地下という意味であるが、日本語のアングラは非合法や前衛という意味で使われる。アングラ政府は非合法の地下組織となる。アングラミュージックは前衛音楽である。

アンクル

uncle (un-cle) [ʌŋkl] 「アンクウ」

おじという意味である。年上の男性を親しみをこめて、こう呼ぶことがある。発音は「アンクウ」となる。

ストー婦人の有名な小説"Uncle Tom's cabin" 「アンクルトムの小屋」は、米国の奴隷解放に大きな影響を及ぼした。Uncle Sam は米国合衆国政府の別称である。

アンコール(仏)

encore (en-core) [ɑŋkɔ:r] 「アンコー」

再演希望のことであるが、アンコールの方が日本語としてなじみがある。ただし、日本語式に「アン・コール」と発音しても通じない。頭にアクセントを置いて、いっきに「アンコー」と発音する。

アンダーグラウンド

underground (un-der-ground) [ʌndəgrəʊnd] 「アンドゥグラウンド」

地下という意味である。英国では地下鉄をこう呼ぶこともある。正式は underground railroad である。アメリカでは地下鉄は subway である。

アンダーソン

Anderson (An-der-son) [ændərsən] 「アンドゥスン」

日本でもなじみのある苗字である。ただし、日本式にアンダーソンと発音しても通じない。アクセントを頭に置き、-der-があいまい母音であることに注意する。発音は「アンドゥスン」となる。頭を「ア」と表記しているが、発音は cat の a の音となる。

アンデルセン

デンマークの有名な童話作家である。アンダーソンと起源は同

じであるが、スペルは **Andersen** と最後が **-sen** になっている。英語の発音は [ændərsn] 「アンドゥスン」となって、**Anderson** とほぼ同じである。アンデルセンでは通じない。ちなみに、デンマーク語では [ænasən] 「アヌスン」と発音する。おそらく、アンデルセンはドイツ語式発音と思われる。

アンチ

anti (anti) [ænti] 「アンティ」

反対あるいは反対論者という意味である。これを、接頭語につけて「反〇〇」という意味でよく使う。日本語でも「アンチ巨人」などと言う。これは巨人が負けると喜ぶ野球ファンのことである。アンチヒーロー (antihero) は、ヒーローとしては相応しくない主人公のことを言う。発音は「アンティ」となる。

ただし、[æntai] 「アンタイ」と発音することも多い。

アンチテーゼ (独)

議論において、ある命題に対する否定的命題のことを言う。もともとは、弁証法において、ある特定の肯定的命題に対立する否定的命題のことである。ただし英語ではなくドイツ語であり、スペルは **Antithese** となる。

アンチモン

antimony (an-ti-mo-ny) [æntəmōni] 「アントムニ」

金属元素のひとつで、元素記号は **Sb** である。発音は「アントムニ」となる。

アンティーク

antique (an-tique) [ænti:k] 「アンティーク」

骨董品である。日本でも骨董屋のことをアンティーク・ショップ (antique shop) と呼んでいる。発音は「アンティーク」となる。

アンテナ

antenna (an-ten-na) [ænténə] 「アンテナ」

これは日本語に近い。アクセントは-te-にある。最初の a は cat と同じ発音で、最後の-nna はあいまい母音である。よって「アンテナ」となる。

アンパイア

umpire (um-pire) [Ámpaiə] 「アムパイア」

野球やテニスなどのスポーツの審判員のことである。日本語でも野球の審判員のことをアンパイアと呼ぶ。頭にアクセントがあり、最後はあいまい母音である。よって「アムパイア」となる。

アンバサダー

ambassador (am-bas-sa-dor) [æmbǽsədə] 「アムバァスドゥ」

大使という意味である。最近は不祥事続きで評判がよくない。日本の顔として相応しくない下品なひとが多いという噂もある。発音は「アムバァスドゥ」となる。

アンプ

amp (amp) [æmp] 「アムプ」

増幅器のことである。日本語でもアンプと呼ぶが、正式にはアンプリファイアである。発音は「アムプ」となる。

アンプリファイア

amplifier (am-pli-fi-er) [æmpləfàiə] 「アムプルファイア」

アンプの正式英語である。英語の発音は「アムプルファイア」となる。

アンブレラ

umbrella (um-brel-la) [ʌmbreɪlə] 「ウンブレ^ル」

もちろん傘のことである。ただし、発音の位置が日本語とはまったく違う。英語では**-brel-**の位置にある。また最後の**-la** はあいまい母音である。よって「ウンブレ^ル」となる。

アンペア

ampere (am-pere) [æmpeəɹ] 「アムペ^ア」

電流の単位である。頭にアクセントがあり「アムペ^ア」となる。話言葉では、省略形の amp[æmp] がよく使われる。アンプとまったく同じかたちとなる。

アンモニア

ammonia (am-mo-ni-a) [əməʊniə] 「ウモウニ^ア」

においの強い窒素と水素からできている気体。日本語でもアンモニアで通る。アンモニア臭がするなどと言う。ただし、英語の発音はまったく異なる。アクセントが**-mo-**にあり、頭と後ろがあいまい母音である。よって「ウモウニ^ア」となる。

イージーオーダー (和)

easy と order を合成した和製英語である。オーダーメイドも和製英語である。

イスラエル

Israel (Is-ra-el) [ɪzreɪəl] 「イズレイ^ッル」

アラブとの紛争の耐えない国である。頭にアクセントがあり、**-el** はあいまい母音である。またスではなくズと濁る。よって発音は「イズレイ^ッル」となる。

イスラム

Islam (Is-lam) [ɪzləm] 「イズル^ム」

イスラム教のことである。アクセントは頭にあり、-lam はあいまい母音となる。よって発音は「イズルム」となる。

イタリア

Italy (It-a-ly) [ɪtəli] 「イトゥリ」

アクセントは頭にあり、-ta-はあいまい母音である。よって「イトゥリ」となる。

イタリアン

italian (i-tal-ian) [ɪtəljən] 「イタァリウン」

イタリアンレストラン (Italian restaurant) は日本でもすっかり定着した。英語のいやらしいところは、形容詞形になるとアクセントの位置が変わってしまうことである。この場合のアクセントは-ta-の位置にあり、発音もあいまい母音から cat の a に変わる。しかも最後の-an はあいまい母音となる。よって「イタァリウン」となる。

イニシアチブ

initiative (ini-tia-tive) [ɪnɪʃətɪv] 「イニッシュティヴ」

先導、主導という意味である。日本語でもイニシアティブをとるというが、英語でも take the initiative と言う。発音は「イニッシュティヴ」となる。

イニシャル

initial (i-ni-tial) [ɪnɪʃəl] 「イニシュル」

日本語では、名前の頭文字のことを言うが、この意味の英語は通常は複数形 (initials) をとる。initial は形容詞で「最初の」という意味でよく使われる。アクセントは-ni- にあり「イニシュル」となる。

イメージ

image (im-age) [ɪmɪdʒ] 「イミジ」

日本語では、心象や印象という意味で（心に浮かぶ）イメージを使うが、英語では姿や外形の意味である。おそらく、この動詞の imagine [ɪmædʒɪn] が「想像する」という意味であるので、そのイメージから日本語はこのような意味で使っているのであろう。ただし、英語の発音はまったく異なる。頭にアクセントがあり「イミジ」となる。

インスタント

instant (in-stant) [ɪnstənt] 「インスタント」

日本語ではインスタント食品（即席食品）のように、簡単にすぐに行えるという意味で使われる。英語でも同様の意味で使われるが、もともとは「瞬間」「即時」という意味である。アクセントは頭にあり、「インスタント」となる。

インストール

install (in-stall) [ɪnstɔ:l] 「インストール」

据え付けるという意味であるが、日本ではコンピュータにソフトを追加する操作を言う。発音は、日本語に近く「インストール」となる。逆に、コンピュータに設定したソフトを削除することをアンインストール (un-install) と呼ぶが、このような英語はかつてなかった。コンピュータの普及とともに、インストールに否定の接頭語のアン(un-)を付けたものが世界的に使われるようになったと思われる。

インターナショナル

international (in-ter-na-tion-al) [ɪntənæʃənəl] 「インターナショナル」

まさにいまは国際社会である。しかし、「国際的な」というこの語を日本式に「インターナショナル」と発音すると、とたんに

国際的ではなくなる。あいまい母音がたくさん入っていることと、アクセントは-na-にあることに注意する。よって「イントゥナ^{シユヌ}」となる。最後の1は弱く発音する。

インターネット

internet (in-ter-net) [ɪntənet] 「イントゥネツ」

情報社会の根幹となっているネットワーク (network) である。この単語も日本語式発音では、まったく通じない。アクセントは頭にあり、-ter-はあいまい母音である。よって「イントゥネツ」となる。あるいは「イン^ナネツ」でもよい。

インタビュー

interview (in-ter-view) [ɪntəvju:] 「イントゥヴュー」

これも、すでに日本語として定着した。「面接」や「会見」と和訳してもピンとこないひとも多いであろう。アクセントの位置は頭にあり、-ter- はあいまい母音である。よって「イントゥヴュー」となる。「イ^ナヴュー」と日本人は発音した方が原音に近い。

インテリア

interior (in-te-ri-or) [ɪntɪəriə] 「インテ^ィウ^{リウ}」

「内部の」という形容詞であり、「内部」「室内」という名詞にもなる。日本語では、「室内装飾」という意味で使われる。日本語でも英語でも室内装飾家をインテリアデザイナー (interior designer) などと呼ぶ。また、日本語では転じて「室内調度品」をインテリアというが英語に、この意味はない。室内装飾は英語では interior decoration となる。よって、インテリアデザイナーを英語では interior decorator と呼ぶが、この呼び名が一般的である。発音は日本語とは異なり、「インテ^ィウ^{リウ}」となる。

インドネシア

Indonesia (in-do-ne-sia) [ɪndəˈniːʒə] 「インドゥニーヅ」

これも日本式発音がまったく通じない例である。まずアクセントは -ne- にあり、「ニー」と長く伸ばすのがこつである。さらに -do- はあいまい母音である。最後の -a もあいまい母音となる。よって「インドゥニーヅ」となる。

イントネーション

intonation (in-to-na-tion) [ɪntəˈneɪʃən] 「イントゥネイション」

発音の抑揚のことである。英語の発音では、特にこれが重要である。日本語でもイントネーションという。-tion の法則にしたがって -na- にアクセントが置かれる。-to- はあいまい母音であるので、発音は「イントゥネイション」となる。

インフォメーション

information (in-for-ma-tion) [ɪnfəˈmeɪʃən] 「インフメイション」

アクセントの位置は日本語と同じ -ma- にある。ただし、-for- はあいまい母音である。よって「インフメイション」となる。あいまい母音であるから「フォ」と強く発音しないのがコツである。

インフルエンザ

influenza (in-flu-en-za) [ɪnfluˈɛnzə] 「インフルエンズ」

流行性感冒のことである。日本ではインフルエンザというが、英語では略したかたちの flu [fluː] が一般的である。発音は「インフルエンズ」となる。

インフレーション(インフレ)

inflation (in-fla-tion) [ɪnfləɪʃən] 「インフレイション」

物価の暴騰のことを言う。略してインフレというが、英語では略さない。膨張という意味でも使われる。宇宙が膨張しているという考えをインフレーション理論という。-tion の規則にしたが

って、-fla-にアクセントが置かれる。よって「インフレイション」となる。

ウイルス

virus (vi-rus) [váirəs] 「ヴァイラス」

流行性感冒の原因となる小さな病原体である。日本語ではビールスとも呼ぶ。英語の発音はまったく異なり、「ヴァイラス」となる。最初の発音が”v”であるので、葉で下唇をかむようにして発音する。最近では、コンピューターウイルス (computer virus) が猛威を奮っており、被害にあったひとも多いであろう。

ウインドウ

window (win-dow) [wíndou] 「ウインドウ」

窓という意味である。日本でもショーウインドウ (show window) と言う。これは英語でも同様の意味で使われる。ウインドウショッピング (window shopping) も日英両方で使われる。最近ではパソコンのソフトとして Windows が商標名となっている。もともと window は表示画面に複数の情報を表示する機能であり、Macintosh [mækintəʃ] の開発ソフトであった。それを Windows がまねただけであるが、独占対複数参入の差で、Windows が圧倒的有利を誇っている。発音は日本語に近く「ウインドウ」となる。

ウラン (独)

uranium (u-ran-i-um) [juréiniəm] 「ユレイニウム」

鉄腕アトム (Astro-boy) の妹の名前である。もちろん、原子力発電の原料となる元素名 (U) が正式である。

ただし、ウランという発音はドイツ語でそれが日本語となった。英語では-ran-にアクセントがあり、発音も「レイ」となる。最後の-um はあいまい母音である。よって「ユレイニウム」となる。

ウォーター

water (wa-ter) [wátər] 「ワト_ッ」

水であるが、日本の発音では通じにくい。アクセントが頭にあり、-ter はあいまい母音であるので「ワト_ッ」となる。英語ではアクセントのある位置を日本語よりも長めに発音するので「ワート_ッ」というつもりで発音した方がよい。

ウルトラマン

ultraman (ul-tra-man) [Áltrəmæn] 「アルトル_ッメン」

日本が誇る特撮映画である。アメリカでも放映されていたが、その題名が日本とあまりにも違っているのが驚いたことを覚えている。アクセントが頭にあり、-tra-はあいまい母音である。よって「アルトル_ッメン」となる。

エアロビクス

aerobics (aer-o-bics) [eróubiks] 「エロウビクス」

有酸素運動のことであり、本来は心肺機能を高める運動理論のことであった。しかし、いまでは健康促進やダイエットのための運動のことを言う。発音は「エロウビクス」となる。

エネルギー

energy (en-er-gy) [énədʒi:] 「エヌジー」

日本語につられて「エネルギー」と発音してもまったく通じない。多くの知的会話のキーワードのひとつであり、この単語が通じないと会話自体が成立しなくなる。まずアクセントは頭にあり、-ner- はあいまい母音である。よって「エヌジー」となる。

No goodの略でNGをよくテレビで使うが、エネルギーよりは、発音はこちらの方に近い。日本式にNGと呼んで、頭を強く発音すれば、ほぼ正しいenergyとなる。

エチケット

étiquette (et-i-quette) [é'tikøt] 「エティック」

アクセントの位置は頭にある。ただし、-quette は「あいまい母音」であり、condition を kundision と書いた方法にならえば、etikut となる。つまり「エティック」となる。

エキストラ

extra (ex-tra) [ékstrø] 「エクストル」

通行人などの端役を演じる臨時雇いの出演者のことを言う。もともとは extra という英語である。発音は「エクストル」となる。

エキスパート

expert (ex-pert) [é'kspø:t] 「エクスパーツ」

このアクセントも要注意である。日本語では「パ」にアクセントがあるが、英語では頭にある。-pert は「あいまい母音」である。また、エキスという発音を日本語ではよく使うがこれも違う。正しくは「エクスパーツ」となる。

エキスポ

expo (ex-po) [é'kspou] 「エクスポウ」

これは、exposition (ex-po-si-tion) の略で英語でも expo と略す。意味は博覧会で、日本でもエキスポで定着している。ただし、英語では頭にアクセントがきて「エクスポウ」となる。

一方、原語の exposition ではアクセントの位置が-si-にくる。また、-po-はあいまい母音となる。よって「エクスプレジション」となる。発音記号では[é'kspøzi'ʃøn]となる。

エキゾチック

exotic (ex-ot-ic) [igzátik] 「イグザティク」

「外来の」という意味の形容詞である。日本では「異国情緒あ

ふれる」という意味で使われる。exotic dancer は日本でいうストリップパーという意味になるので使用を注意した方が良い。発音は、-ic の法則に従って、その前の音節にアクセントがあり「イグザ^ザティク」となる。

エクササイズ

exercise (ex-er-cise) [éksəsàiz] 「エクスサイズ」

運動、けいこという意味である。教科書の練習問題という意味でも使われる。発音は「エクスサイズ」となる。

エクストラ

extra (extra) [ékstrə]

前出エキストラと同じ英語である。ただし、この発音の日本語では、「余分な」あるいは「追加の」という意味で使われる。

エクスプレス

express (ex-press) [iksprés] 「イクスプレス」

日本では、「急行列車」という意味で使われる。成田エクスプレスという列車名にもなっている。ただし、英語では、この意味の他にも「表現する」という動詞としてもよく使われる。発音は後ろにアクセントがあり「イクスプレス」となる。

エクゼクティブ

executive (ex-ec-u-tive) [igzékjutiv] 「イグゼ^ゼキュティヴ」

日本では、企業の役員という意味で使われる。飛行機のビジネスクラスはエクゼクティブクラスと言う。会社の最高経営責任者を CEO と呼ぶことがあるが、これは chief executive officer の頭文字をとったものである。発音は「イグゼ^ゼキュティヴ」となる。

エコー

echo (ech-o) [ékou] 「エコウ」

こだまという意味であるが、カラオケが流行ってからは、「エコーを効かす」というように、反響を使った特殊音響効果のことを指すようになった。発音は「エコウ」となる。

エコノミー

economy (e-con-o-my) [ikánəmi] 「イカヌミ」

経済あるいは経済学という意味である。飛行機のエコノミークラスは二流客席である。英語でも *economy class* と言う。経済的という意味である。長時間同じ姿勢で座っているため、血栓が血管につまる症状をエコノミー症候群と呼んでいる。発音は、日本語とずいぶん異なる。-co-にアクセントがあり、つぎがあいまい母音であるので、発音は「イカヌミ」となる。

エコノミックアニマル

economic animal (e-co-nom-ic an-i-mal) [ikənámik ænəməl]

「イクナミック アヌムル」

日本経済が世界を席卷しているときに、日本人を蔑視してこう呼んだ。経済のことしか頭にない動物という意味である。いまとなつては懐かしい。発音は「イクナミック アヌムル」となる。

エコロジー

ecology (e-col-o-gy) [i:kálədʒi] 「イーカルジィ」

生態環境のことであるが、転じて「環境にやさしい」という意味で使われる。日本でも注目されている。発音は-col-にアクセントがあり、「イーカルジィ」となる。

日本では、さらにこの語を縮めて「エコ」という接頭語をつけて、環境にやさしい商品をエコグッズ、また買い物したら一部が環境団体の寄付になるエコカードなどが使われるが、いずれも和製英語である。

ただし、英語でも eco- という接頭語がつくと環境のという意味になる。ecopolitics は環境政治学となる。eco-conscious は環境を意識したという意味になる。この場合の発音は[ekou] 「エコウ」となる。

エスカレーター

escalator (es-ca-la-tor) [éskələitər] 「エスケレイトㇰ」

すでに日本語である。というよりも、その日本語訳が分からない。ただし、英語ではアクセントが頭にあることに注意する。さらにあいまい母音がふたつある。発音は「エスケレイトㇰ」となる。

エスカレート

escalate (es-ca-late) [éskələit] 「エスケレイ(ツ)」

エスカレーターのもとになった単語であるが、日本語でも「感情が高ぶる」あるいは「加熱する」というような意味合い「エスカレートする」というように表現する。発音は「エスケレイ(ツ)」となる。

エステ(和)

エステティックを日本語式に略したものであるが、日本語では美容学として通っている。あるいは、全身美容をエステとも言う。ただし和製外来語である。

エステティック(仏)

美学と言う意味のフランス語である。フランス語のスペルは *esthétique* となる。日本語では全身美容の店にこの名がつけられている。エステティックサロンなどと呼んでいるが、英語ではない。この意味の英語は *aesthetic* (aes-thet-ic) [esθétik] 「エスセティック」となる。[i:sθétik] 「イースセティック」とも発音する。

エスニック

ethnic (eth-nic) [éθnik] 「エスニック」

「民族の」あるいは「少数民族の」という意味である。日本では、東南アジアを中心としたスパイスの効いた料理をエスニック料理と呼んでいる。米国でも an ethnic restaurant (エスニック料理店) がある。日本と同じように、スパイスの効いたタイ料理、インドネシア料理、アフリカ料理などが食べられるレストランである。発音は「エスニック」となる。

エメラルド

emerald (em-er-ald) [émərəld] 「エムルウ (ド)」

日本語では平板にすべての音を平等に発音するが、英語では頭にアクセントがある。また-me-も-ra-もどちらもあいまい母音である。よって「エムルウ (ド)」となる。最後の d は発音しない方がよい。

エリート

elite (e-lite) [elít] 「エリート」

選ばれたひとという意味で、もともとはフランス語である。日本語でもエリート教育 (elite training) などと言う。ただし、英語では the elite として集合名詞的に使う。He is an elite. とは言わずに、He is one of the elite. と言う。発音は「エリート」となる。パワーエリート (power elite) は権力を握る (新しい) 支配者のことである。

エレベーター

elevator (el-e-va-tor) [éləvèitər] 「エルベイトゥ」

これも日本語である。あえて訳せば昇降機であろうが、エレベーターのことを昇降機と呼ぶ日本人はほとんどいないであろう。アクセントは頭にあり、あいまい母音がふたつ入っている。発音は「エルベイトゥ」となる。

エンゲージリング (和)

これも和製英語である。「婚約する」という意味のエンゲージ (engage) と「指輪」のリング (ring) を合成したものである。婚約の名詞は engagement であり、婚約指輪は an engagement ring と言う。

エンジニア

engineer (en-gi-neer) [ɛndʒɪniə] 「エンジニウ」

技師や工学者のことを言う。-neer のように ee となる場合には、アクセントがこの位置に来る。よって「エンジニウ」となる。

エンジニアリング

engineering (en-gi-neer-ing) [ɛndʒɪniəriŋ] 「エンジニウリング」

工学のことを言う。Faculty of Engineering は大学の工学部である。工学博士は Doctor of Engineering と言う。発音は「エンジニウリング」となる。

エンジン

engine (en-gine) [ɛndʒɪn] 「エンジョ」

発動機という意味であるが、日本でもエンジンで通る。あまりにもエンジンが日本に浸透したため、和製英語もある。例えばエンジンブレーキやエンジンキーなどは和製英語である。発音は「エンジョ」となる。

エンスト (和)

エンジン (engine) とストップ (stop) を合成して、しかもそれを日本式に略した完全な和製英語。英語では engine stall という。

エンターテインメント

entertainment (en-ter-tain-ment) [entə'teɪnmənt] 「エントウテイムント」

催し物、娯楽という意味であり、英語の意味もほぼ日本語と同様である。発音は「エントウテイムント」となる。

エンタープライズ

enterprise (en-ter-prise) [ɛntə'praɪz] 「エントppライズ」

日本では企業という意味で使われるが、英語には冒険や進取の精神という意味がある。a man of enterprise は進取の気鋭に富んだ人という意味となる。米国の軍艦の名前にもなっている。発音は、頭にアクセントがあり「エントppライズ」となる。

エンデバー

endeavor (en-deav-or) [ɪndé'vər] 「インデウウ」

「努力」あるいは「努力する」という意味であるが、日本ではスペースシャトル (space shuttle) のエンデバー号が有名である。発音は「インデウウ」となる。

オーケストラ

orchestra (or-ches-tra) [ɔ:kəstrə] 「オークストル」

管弦楽団のことであるが、日本語でもオーケストラと言う。アクセントは頭にあり、-ches- も -tra もあいまい母音である。よって発音は「オークストル」となる。カラオケは空オーケストラという和製の合成語であるが、最近では外国でも通じるようになっている。ただし、その発音は Karaoke [kə'rəó:ki] であり、「カルオーキ」となる。

オーシャン

ocean (ocean) [óʊʃən] 「オウシュン」

海のことである。海洋のことも指し、the Pacific Ocean は太平洋、

the Atlantic Ocean は大西洋である。発音は、頭にアクセントがあり「**オウシユン**」となる。

オーストラリア

Australia (Aus-tral-ia) [ɔ:streɪljə] 「**オースト_っレイリウ**」

国名である。オーストラリア Australia では、アクセントが-ra-にあるので「**オースト_っレイリウ**」となる。r 音だから、ウという口のかたちで**レ_ィ**と強く発音する。

オーストリア

Austria (Aus-tri-a) [ɔ:striə] 「**オースト_っリウ**」

これも国名であるが、日本語ではよくオーストラリアと混同してします。しかし、こちらではアクセントが頭にあるので、「**オースト_っリウ**」となる。アクセントの位置が明確に異なるので、英語では、これら国名を混同することはない。

オセアニア

Oceania (Oce-an-ia) [əʊsɪˈæniə] 「**オウシア_{ニウ}**」

オーストラリア大陸と、その周辺の島の総称である。大洋州とも言う。発音は「**オウシア_{ニウ}**」となる。

オーソライズ

authorize (au-thor-ize) [ɔ:θəraɪz] 「**オースライズ**」

公認する、認定するという意味の動詞であるが、日本語でも「**オーソライズする**」と使う。アクセントは頭にあり -thor- はあいまい母音である。よって「**オースライズ**」となる。

オーソリティ

authority (au-thor-i-ty) [əθɔ:rəti]

権威あるいは権威者という意味である。an authority on

mathematics は数学の権威という意味になる。頭はあいまい母音で、アクセントは *-ity* の規則に従って、その前の音節 *-thor-* にある。発音は「ウソールティ」となる。authorities と複数になると当局という意味になる。

オゾン

ozone (ozone) [ˈoʊzəʊn] 「オウゾウン」

酸素原子 3 つからなる分子 (O₃) である。地球の上空にオゾン層があり、紫外線を吸収することが知られている。最近、フロンガスの英語でオゾン層が破壊され、人類の皮膚がんの増加が懸念されている。発音は「オウゾウン」となる。

オーダーメイド (和)

「注文製の」という意味で使われるが、order と made を組み合わせた和製英語である。ただししくは custom-made と言う。

オーディオ

audio (audio) [ˈɔːdiou] 「オーディオウ」

音という意味であるが、「音の」という意味の接頭語として使われることが多い。日本でもオーディオ機器などという。発音は「オーディオウ」となる。audio-visual は聴覚と視覚が一緒になって視聴覚という意味となる。

オーディション

audition (au-di-tion) [ɔːdɪʃən] 「オーディション」

俳優や歌手の審査テストのことである。英語でも同じ意味になる。発音は *-tion* の法則にしたがって、*-di-* にアクセントがあり、「オーディション」となる。

オートバイ (和)

2 輪自動車のことであるが、完全な和製英語である。オート、つまり自動のという意味の接頭語 (auto-) と自転車 (バイシクル: bicycle) を勝手に合成して、しかもそれを略したものである。英語では motorcycle という。

オートマ (和)

自動車でギアが自動に変換する機構のことを言うが、オートマティック・トランスミッション (automatic transmission) を日本語式に略した和製英語である。

オートマチック

automatic (au-to-mat-ic) [ɔ:təmætik] 「オートマ^ッマ^ァティック」

自動 (式) のという意味である。自動変換ギアのついた自動車のことをこう呼ぶことがあるが、英語でも automatic と呼ぶ。アクセントは -ic の規則に従って、その前の音節の -mat- にある。よって発音は「オートマ^ッマ^ァティック」となる。

オートメーション

automation (au-to-ma-tion) [ɔ:təmeiʃən] 「オートメ^ッメ^ィション」

機械による自動化されたことを言う。日本語でも「オートメーション化する」などという。発音は「オートメ^ッメ^ィション」となる。

オートレース (和)

2 輪や 4 輪自動車のレースを言うが、これも完全な和製英語である。自動車レースは motor racing という。

オナー (オーナー)

honor (hon-or) [ɔ:nər] 「ア^ヌウ」

名誉という意味である。ゴルフで前のホールで一番スコアの良かったひとが、最初にティーショットを打つことをオーナーになる

と言う。頭にアクセントがあり、あいまい母音があるので、発音は「**アヌウ**」となる。

オーナー

owner (own-er) [ˈoʊnər] 「**オウヌウ**」

所有者という意味である。車のオーナーなどと言う。この語のもとになった own という動詞は「所有する」という意味である。オーナーシップ (ownership) は所有権という意味である。発音のコツは「オー」と伸ばさず、「オウ」とはっきり発音する。アクセントは頭にあり「**オウヌウ**」となる。

オハイオ

Ohio (Ohio) [oʊˈhaɪoʊ] 「**オウハイオウ**」

米国の中西部 (Midwest) の州の名前。日本語の「あはよう」に発音が似ているというので、この州の名が使われる。発音は「**オウハイオウ**」となる。少し違和感はあるが、確かに「おはよう」と聞こえる。

オパール

opal (opal) [ˈoʊpəl] 「**オウプル**」

乳白色で半透明な宝石である。日本語の発音ではまず通じない。頭にアクセントを置いて「**オウプル**」となる。

オピニオン

opinion (o-pin-ion) [əˈpɪnjən] 「**ウピニョゥン**」

意見や見解という意味である。日本でも、世論指導者のことをオピニオンリーダーと言うが、これは和製英語である。英語では opinion maker となる。頭があいまい母音であり、-pin-にアクセントがあり、最後もあいまい母音である。よって、発音は「**ウピニョゥン**」となる。

オフィシャル

official (of-fi-cial) [ə'fi:ʃəl] 「ウフィシャル」

公式のという意味である。サッカーワールドカップのオフィシャルグッズと言え、公認された商品のことである。発音は、頭があいまい母音であり、-fi-にアクセントがあるので「ウフィシャル」となる。

オフィス

office (of-fice) [ɔ'fis] 「オフィス」

事務所、会社、職場のことである。a post office は郵便局のことである。企業の本社を the main office あるいは the head office と言う。発音は日本語に似ているが、頭にアクセントを置いて「オフィス」となる。

オフィスレディ (和)

会社で働く女性を office lady (頭文字ととってOL)というが完全な和製英語である。Lady (淑女) は会社で働かないそうである。会社で働くひとは男女とも an office worker と言う。女性の場合には a female office worker あるいは a woman office worker という。

オプション

option (op-tion) [ə'pʃən] 「アプション」

選択あるいは選択権という意味である。創業者や役員が自社株を一定値段で買い取りできる権利をストックオプション (stock option) という。インサイダー取引 (insider trading) で話題になったことがある。発音は「アプション」となる。

オプチミスト

optimist (op-ti-mist) [ə'ptɒmɪst] 「アプトゥミスト」

楽道家あるいは楽観論者という意味である。危機意識がないのは困るが、組織には必ず必要な人材である。頭にアクセントがあり、-ti-はあいまい母音であるので「**ア**トミスト」となる。

オペ(和)

手術のことを略してこう呼ぶが、もともとの英語はオペレーションである。オペは日本式略語である。

オペラ

opera (op-**era**) [ápərə] 「**ア**プル」

歌劇のことであるが、オペラで通る。オペラ劇場、オペラ歌手などと普通に使う。ただし、発音には注意を要する。アクセントは頭にあり「**ア**」と発音する。後はあいまい母音であるので、発音は「**ア**プル」となる。

オペレーション

operation (ope-**ra-tion**) [ápəreɪʃən] 「**ア**プレイション」

オペで紹介したように手術という意味があるが、日本語でオペレーションというと、市場の操作のことを言う。例えば、通貨を買う操作を買いオペレーションなどと言う。アクセントは-tionの規則にしたがって、その前の音節の-ra-にある。頭目の第二アクセントがあり、「**ア**」と発音する。よって「**ア**プレイション」となる。

オペレーター

operator (op-**er-a-tor**) [ápəreitə] 「**ア**プレイト」

電話交換手のことであるが、機械を操作するひとのこともこう呼ぶ。発音は、頭にアクセントがあり「**ア**」と発音する。よって「**ア**プレイト」となる。

オリエンタル

oriental (ori-en-tal) [ɔ:riəntl] 「オーリエントル」

orient の形容詞型であり、「東洋の」あるいは「東洋人」という意味になる。オリエンタル美人などという。オリエンタルには日本人も含まれる。発音は「オーリエントル」となる。

オリエンテーション

orientation (ori-en-ta-tion) [ɔ:riəntéiʃən] 「オーリウンティション」

新入生や新社会人の教育指導のことである。もともとは orient つまり東の方を向くというのが語源である。-tion の規則にしたがって、アクセントはその前の-ta-にある。-en-はあいまい母音であるので、発音は「オーリウンティション」となる。

オリエンテーリング

orienting (ori-en-teer-ing) [ɔ:riəntiəriŋ] 「オーリウンティウリング」

地図と磁石を片手に、目的にできるだけ早く到着することを競う競技である。もともとは orient つまり東の方を向くというのが語源である。-ee の規則にしたがって、アクセントは-teer-にある。よって発音は「オーリウンティウリング」となる。

オリエント

orient (ori-ent) [ɔ:riənt] 「オーリウント」

東洋のことであるが、この意味で使う場合にはローマからみた東の地方であり、中近東までであり、アジアの中国、日本はは入らない。アクセントは頭にあり、-ent はあいまい母音である。よって、「オーリウント」となる。

オリジナル

original (o-rig-i-nal) [ə'ri:dʒənl] 「ウリジナル」

日本では独創的なというほめ言葉として使う。英語でも同じ意味でも使うが、「最初の」あるいは「初期の」という意味となる。

頭があいまい母音であり、アクセントは-rig-に置かれる。よって、発音は「ウリジ_ツヌル」となる。

この名詞形のオリジナリティ (originality) も日本語ではよく使われる。独創性という意味で、「日本人にはオリジナリティがない」などと言う。ただし、英語の発音はまったく違うので注意する必要がある。発音記号では[əˈrɪdʒənæləti]となり、アクセントは-ity の規則にしたがって、-nal-にあり、頭があいまい母音である。よって発音は「ウリジ_ツナルティ」となる。

オリンピック

Olympic (Olym-pic) [əˈlɪmpɪk] 「ウリンピック」

4年に1回行われる世界規模のスポーツの祭典である。ただし、このままでは、「オリンピック競技の」という形容詞である。The OlympicsあるいはThe Olympic Gamesでオリンピック競技となる。頭があいまい母音であり、-icの法則にしたがって、その前の音節にアクセントがあるので、「ウリンピック」となる。

オレンジ

orange (or-ange) [ˈɔːrændʒ] 「オ-レンジ」

みかんのことである。ただし、日本のみかんは tangerine [tændʒəriːn] と言う。アクセントは頭にあり、-ange はあいまい母音である。よって、「オ-レンジ」となる。

オールドミス(和)

日本では、独身の高齢女性を揶揄してこう呼ぶが、old と Miss を組み合わせた和製英語。あえて英語で言えば、an old maid となるが、このような別称自体が死語となりつつある。それだけ、キャリア (ただし career で、発音はカリウ) をつむ女性が世の中に進出しているということである。

オンブスマン

ombudsman (om-buds-man) [ámbùdzmøn] 「アムブズマン」

行政監査官のことであるが、日本では民間のオンブスマンが情報公開法を受けて大活躍している。特定郵便局長が年間 1000 億円もの領収書の要らない金を使っていたのを明らかにしたのは仙台のオンブスマンである。発音は「アムブズマン」となる。

カ行

ガイダンス

guidance (guid-ance) [gáidns] 「ガイドンス」

手引書という意味である。発音は-ance に母音がはいっていないので、カタカナ表記は難しい。頭にアクセントを置いて、あえて表記すれば「ガイドンス」となる。

カウンター

counter (coun-ter) [káuntər] 「カウントゥ」

銀行の窓口や、商店の売り台のことである。ただし、カウンターには「逆」「反対」「逆襲」という意味があり、ボクシングで逆襲することをカウンターパンチ (counterpunch) という。いろいろな単語の頭につけて「逆の」という意味を付与する。例えば、時計まわりを clockwise と言うが、反時計回りは counterclockwise と言う。発音は、頭にアクセントがあり、「カウントゥ」となる。

カクテル

cocktail (cock-tail) [kákteil] 「カクテイル」

いろいろな洋酒や果汁を混ぜた飲み物である。カクテルを飲むお洒落な容器をカクテルグラス (cocktail glass) という。ただし、主食の前に食べる前菜もカクテルという。シュリンプカクテル (shrimp cocktail) は有名である。これは、カクテルグラスに入れて供されることから、前菜の意味になったと言われている。発音は、頭にアクセントを置き、「テル」ではなく「テイル」と発音する。よって「カクテイル」となる。

カクテル光線というのは、いろいろな色を混ぜて、雰囲気を出した照明のことを言うが、和製英語である。

カクテルパーティー (cocktail party) は、カクテルに軽食を出す立食形式のパーティーで、日米共通である。このパーティーに着ていくドレスをカクテルドレス (cocktail dress) と言う。

カシオペア

Cassiopeia (Cas-si-o-pe-ia) [kæsiəpi:ə] 「キャシウピーウ」

星座の名前で有名である。もともとはギリシャ神話の登場人物である。この名前を冠した列車もある。発音は日本語とは大きくことなり「キャシウピーウ」となる。

ガス

gas (gas) [gæs] 「ギャス」

日本では、ガスというと燃料用の気体を思い浮かべる。電気とガスといえばエネルギーの基幹産業である。しかし、英語では gas は単に気体という意味になる。物質の三態は、固体 (solid)、液体 (liquid)、気体 (gas) である。また、英語ではガソリン (gasoline) の意味で多用される。発音は「ギャス」となる。

カスタム

custom (cus-tom) [kʌstəm] 「カストム」

習慣と言う意味であるが、複数形で関税や通関という意味にもなる。注文してつくることをカスタムメイド (custom made) と日本語でも英語でも言う。オーダーメイドは和製英語である。発音は「カストム」となる。

カステラ (ポルトガル語)

小麦粉と卵を原料に、蒸し焼きしたケーキである。日本ではカステラで通るが、英語では a sponge cake となる。

カセット

cassette (cas-sette) [kæsét] [クセツト]

カセットテープのカセットである。これも日本式発音ではアクセントの位置が違うので通じない。まず、冒頭の ca-はあいまい母音であり、アクセントは-setteにある。よって、[クセツト]となる。kuset である。最後のトは発音しなくても良いくらいである。

ガソリン

gasoline (gas-o-line) [gæsəli:n] 「ギヤスリーン」

自動車の燃料。アクセントが頭にあり、「ギヤス」という発音になる。-o-はあいまい母音である。よって「ギヤスリーン」となる。日常会話では、略して gas と呼ぶと gasoline のことである。

ガソリンスタンド(和)

日本では給油所のことをガソリンスタンドと呼ぶが、これは和製英語である。英語では a gas station あるいは a service station と言う。

カタログ

catalog (cat-a-log) [kætəlo:g] 「キャトッログ」

日本語で「目録」と言っても意味が分からない若いひが多いのではないか。英語ではアクセントが冒頭にあり、cat と同じ発音である。-a-はあいまい母音であり、「キャトッログ」となる。英国式では catalogue と書く。

カード

card (card) [kɑ:rd] 「カード」

〇〇券、〇〇状、〇〇証などという意味に使われる。英語では、トランプという意味もある。日本では、クレジットカード(a credit

card) や銀行カード (a bank card) の略として使われる。英語では、カードだけでは、こういう意味はない。また、名刺のことを a business card と言う。発音は日本語と同じで「カード」となる。ただし、最後の「ド」の音は、母音の「ウ」音を入れないように注意する。

ガード

guard (guard) [gɑ:rd] 「ガード」

警護や保護という意味である。警護する、あるいは保護するという意味の動詞にもなる。発音は「ガード」となる。

ガードマン(和)

警備員のことであるが、ガード (guard) とマン (man) を勝手に合成した和製英語である。

ガードレール

guardrail (guard-rail) [gɑ:rdreil] 「ガード(ウ)レイル」

手すりのことである。ただし、日本では道路の脇にある歩行者を保護する柵のことを言う。発音は「ガード(ウ)レイル」となる。

カードローン(和)

クレジットカードで小口融資が受けられる制度であるが、これもカード (card) とローン (loan) を合成した完全な和製英語である。

カナダ

Canada (Can-a-da) [kænədə] 「キャヌドゥ」

国名である。ただし日本式発音では通じにくい。Can-a-da とあいまい母音 (下線部) がふたつもある。カタカナ表記では、「キャヌドゥ」となる。

カナディアン

Canadian (Ca-na-di-an) [kənɛɪdiən] 「クネイディウン」

Canada の形容詞形の Canadian の発音も難しい。「キャナディアン」と発音したくなるが、最初の **Ca-** と **-an** は「あいまい母音」である。よって、発音は「クネイディウン」となる。

カーナビ(和)

これも、日本独特の略語。英語はカー・ナビゲーション (car navigation) である。

カヌー

canoe (ca-noe) [kənú:] 「クヌー」

櫂でこぐ小舟のことであるが、カヌーで通る。オリンピック競技にもなっている。ca- はあいまい母音であり、アクセントが -noe にあることに注意する。発音はと「クヌー」なる。

カフェテリア

cafeteria (caf-e-te-ri-a) [kæfətɪəriə] 「キャフテイウリウ」

最近では日本でもよく見られるセルフサービス (self-service) の食堂である。外国の学校食堂はこのタイプが多い。最初の caf- の発音は cat と同じであり、アクセントは -te- にある。最後の -a はあいまい母音である。よって、「キャフテイウリウ」となる。caf-e- の後で一拍置くつもりで発音するのがコツである。

カプセル

capsule (cap-sule) [kæpsl] 「キャプス(ル)」

小さな容器のことである。例えば「薬のカプセル」と言う。ただし、発音は「キャプス(ル)」となる。最後の「ル」は発音しないつもりで十分である。日本誕生のカプセルホテル (capsule hotel)

があるが、英語では通じない。

ガラス

glass (glass) [glæs] 「グラス」

外来語にもかかわらず、硝子という漢字まである。それだけ日本語に溶け込んでいるという証拠であろう。ガラスファイバーは高速通信網には必要な素材である。ただし、ガラスという発音では通じない。「グラス」となる。

カリウム (独)

potassium (po-tas-si-um) [pətæsiəm] 「プタァシウム」

金属元素 (K) である。ただし、日本語のカリウムはドイツ語 (Kalium) であり、英語では potassium となる。海外の学会で、日本人がカリウムと発音して、誰にも通じないという場面を見かけた。アクセントは-tas-にあり cat の母音と同じ発音である。よって「プタァシウム」となる。

カリキュラム

curriculum (cur-ric-u-lum) [kə'ɪkjələm] 「クリキュルム」

教科課程、履修課程のことであるが、日本語でもカリキュラムで通る。ただし、あいまい母音が3個も入っているので、発音には注意を要する。アクセントが-ric-にあるので「クリキュルム」となる。最後は-lum となって"l"の発音となるので、舌を歯茎の裏につけて「ル」と発音する。

履歴書のことを、英語では curriculum vitae [vɑi'ti:] と呼ぶが、長いので c. v. と略すこともある。

カリスマ

charisma (cha-ris-ma) [kə'ɪzmə] 「クリズム」

この言葉も日本語としてすっかり定着してしまった。日本語で

は平板に発音されるが、英語では-ris-にアクセントがある。しかも頭の cha-と最後の-ma は「あいまい母音」である。よって発音だけでは kurizm というスペルが正しい。[クリズムツ]。強く発音する-ris-は r なので本来は難しいが、その前が「ク」となって自然と「ウ」と発音する口のかたちになっているので、普通に発音すれば正しい「r」の音となる。

カルチャー

culture (cul-ture) [kʌltʃər] 「カルチュウ」

文化あるいは教養という意味である。日本でも、ワープロや音楽、習字、絵画などを教えるカルチャー・スクールがはやっている。ただし、これも和製英語である。異文化に接したときに受ける衝撃を culture shock というが、これは日本語でも同じ意味である。最近では年代の違いによるカルチャー・ショックが注目を集めている。アクセントは頭にあり、後ろがあいまい母音であるので、発音は「カルチュウ」となる。

カルシウム

calcium (cal-ci-um) [kælsiəm] 「キヤル・シウム」

人のからだに重要な元素 (Ca) である。これもアクセントの位置で通じにくい単語である。まず、冒頭にアクセントがあり、発音は cat と同じである。-um はあいまい母音である。よって「キヤル・シウム」cal-と-cium の間に一拍置くくらいの気持ちで発音するとうまくいく。

カレンダー

calendar (cal-en-dar) [kæləndər] 「キャリンドゥ」

これも日本語の暦 (こよみ) よりもよく使われる。英語ではアクセントは冒頭にあり、cat と同じ発音である。-dar はあいまい母音であり、「キャリンドゥ」となる。日本語につられて「レン」にア

クセントを置いたのでは、まず通じない。

カンパニー

company (com-pa-ny) [kʌmpəni] 「カムパニー」

日本語では会社として通っている。英語では仲間や友人という意味でもよく使われる。”I enjoyed their company.”と言えば、彼らと一緒にいて楽しかったという意味である。学生がよくやる「コンパ」は、この英語に由来する。アクセントは冒頭にあり、comeと同じ発音である。-pa-はあいまい母音であり、「カムパニー」となる。

キャタピラー

caterpillar (cat-ter-pil-lar) [kætəpɪlər] 「キャトッピラー」

戦車の軌道で有名であるが、最近ではこの駆動方式をとるトラクター (tractor) の商標 (trademark) ともなっている。

もともとは毛虫という意味で、毛虫が動く様子から、この名がついた。頭にアクセントがあり、発音は cat と同じ[æ]である。-ter-と最後の-lar はあいまい母音である。-pil-に第2アクセントがある。cat-ter-の後で一拍置くつもりで発音する。「キャトッピラー」となる。

キャッチボール(和)

catch と ball を組み合わせた和製英語である。「キャッチボールをする」を英語では play catch と言う。

キャパシティ

capacity (ca-pac-i-ty) [kəpæsəti] 「クパァスティ」

能力や才能という意味である。受容能力という意味もある。日本では、和製英語として、この語を勝手に略した「キャパ」が受容能力という意味で使われる。発音はあいまい母音があり、カタ

カナ表記をかなり違うので注意を要する。-ity の法則にしたがって、アクセントは-pac-にあり「クパァスティ」となる。

キャプテン

captain cap-tain [kæptən] 「キャプトゥン」

組織の長、船長、チームの主将などを言う。日本語として定着している。アクセントは頭にあり、-tain はあいまい母音である。よって発音は「キャプトゥン」となる。

キャベツ

cabbage cab-bage [kæbidʒ] 「キャベジ」

キャベツである。a cabbage butterfly はモンシロチョウのことである。a cabbage worm はその幼虫であり、キャベツの葉を食べる青虫である。発音は頭にアクセントがあり「キャベジ」となる。

キャメル

camel (cam-el) [kæməl] 「キャムウ」

らくだのことである。らくだマークのたばこや靴などで有名になった。アクセントは冒頭の cam-にあり、cat と同じ発音[æ]である。-el はあいまい母音である。よって「キャムウ」となる。言い終わった後、舌を歯茎の裏につければ、最後が”l”で終わる単語の発音は大抵うまくいく。

これと良く似た発音に camera がある。日本語のカメラであるが、この場合-er-も-a もあいまい母音であるので、「キャム(ウ)ル」となる。最後は r であるからであるから「ウ」という口のかたちで発音する。

キャラクター

character (char-ac-ter) [kærəktər] 「キャルクトゥ」

個性や特性という意味である。(劇、小説、漫画)の登場人物

や配役の意味もあるが、日本では、後者の意味で使われることが多い。文字という意味もある。例えば漢字は **Chinese characters** と言う。発音は、アクセントが頭にあり、あいまい母音がふたつあることに注意して「**キャルクトッ**」となる。

キャリア

career (ca-reer) [kə'riə] 「クリウ」

経歴という意味である。働く女性をキャリアウーマン (a career woman) と呼ぶが、日本式発音では通じない。**ca-reer** とふたつも「あいまい母音」がある。だから、「キャリア」は間違いで、「クリウ」となる。

ちなみに、お隣り韓国 : **Korea** と同じ発音である。こちらはカタカナ表記ではコリアである。

キャリア

carrier (ca-reer) [kæ'riə] 「キャリウ」

運搬人あるいは輸送車、輸送船という意味である。ただし、病原体を媒介するひと、あるいは保菌者という意味があり、日本式にキャリアと発音すると保菌者という意味にとられる。特に最近ではエイズの保菌者をこう呼ぶので、発音には注意する。こちらの発音は「**キャリウ**」となる。

キャンセル

cancel (can-cel) [kænsəl] 「キャンスル」

取り消すという意味の動詞である。日本語では「取り消し」という名詞で使われる。例えば「キャンセルする」というような使い方をする。英語でも **cancel** が名詞になるが、「取り消し」という意味では、名詞形の **cancellation** [kænsə'leɪʃən] が使われる。発音は「セル」と「e」を入れない。アクセントが頭にあり、「**キャンスル**」となる。

キャンペーン

campaign (cam-paign) [kæmpéin] 「キャムペイン」

組織運動や活動のことである。選挙運動のことも言う。a sales campaign は大売出し、a campaign against smoking は禁煙運動となる。発音は、アクセントが-paign と後ろにあり「キャムペイン」となる。

キューピット

Cupid (Cu-pid) [kjú:pid] 「キューピ(ト)」

恋愛の神。弓と矢を持った背に羽のある美少年で恋の橋渡し役である。英語でも "play Cupid for A" で「A のために恋の橋渡し役をする」という意味になる。ほぼ日本語に近いが最後の d は発音しないくらいがよい。よって「キューピ(ト)」となる。

キューピー人形のキューピーはキューピッドをまねをして作ったといわれている。ただし、こちらのスペルは Kewpie であり、商標登録されている。

キューボラ

cupola (cu-po-la) [kjú:pələ] 「キュープル」

日本では、鋳物工場で銑鉄を溶かす炉のことを言う。映画「キューボラのある町」が有名となったが、いまは鋳物工業が廃れて、日本では見るものがなくなった。ただし、英語の cupola は丸天井あるいは丸屋根という意味である。鋳物用の電気炉のかたちから、英語では a cupola furnace を溶銑炉という。これが転じて、日本ではキューボラが溶銑炉となった。-po-と-la があいまい母音であるので、発音は「キュープル」となる。

キリスト

Christ (Christ) [kráist] 「クライスト」

イエス・キリスト (Jesus Christ) [dʒiːzəs kráɪst] である。発音は「ジーズゥス クライスト」となる。キリスト(Christ)のミサ (Mass) にあたる Christmas (クリスマス) は世界的な行事となっている。

キリスト教は Christianity (Chris-ti-an-ity) [kristiæniti] となる。-ity が語尾にあるので、その直前の音節にアクセントがある。よって発音は「クリスティアヌティ」となる。

キルト

quilt (quilt) [kwɪlt] 「クイルト」

2枚の布の間に綿などを入れて、刺し子に縫った掛け布団のことであるが、日本語でキルトで通る。発音は「クイルト」となる。日本でもキルティング (quilting) という刺繍があるが、これは2枚の布の間に綿や毛糸を入れて、浮き模様が見えるようにした刺繍の一種である。

キログラム

kilogram (kil-o-gram) [kɪləgræm] 「キルグラム」

kg と表示する。体重の単位であるから重要な単語であるが、これも通じにくい。(ただし、米国ではポンド (pound: 発音はパウンド) で体重を言う。)

アクセントは頭にあり、-o- はあいまい母音である。-gram の a の発音は cat と同じもの。よって「キルグラム」となる。同じ仲間の kilometer (km) も同様に「キルミーツ」となる。-meter の -ter はあいまい母音である。発音記号では [kɪləmɪ:tər] となる。

ただし、km の方はひとによっては、-lo- を強く発音する場合もあり、その場合は「キラミタツ」となる。発音記号は [kɪlɑːmɪtər] となる。英語には規則性がないことが多いのでややこしい。これは英語に限らず、あらゆる言語の宿命である。

クォーター

quarter (quar-ter) [kwó:rtə] 「クォートゥ」

もともとは4分の1という意味である。Basketball や American football の試合では試合時間が4つの区間に分けられており、それぞれを quarter と呼んでいる。1 dollar の4分の1であることから、25 cent coin を quarter と呼ぶ。また、15分は1時間の4分の1、また25年は1世紀の4分の1であるから、これらも quarter と呼ばれる。アクセントは-ar-の位置にあり、最後の-ter はあいまい母音である。よって「クォートゥ」となる。

クーデター

coup d'état (coup d'e-tat) [kù: deitá] 「クー ディタ」

武力による政変のことである。日本語でもクーデターと言う。もともとはフランス語である。発音は「クー ディタ」となる。ただし、英語では coup と略して呼ぶことが多い。CNN のニュースでも coup と言う。ただし最後の p は発音せず[kú:] 「クー」となる。

クーポン

coupon (cou-pon) [kú:pan] 「クーポン」

優待券のことを言う。この言葉も、もとはフランス語である。日本語でもクーポンという。日本語につられて「ポン」と発音しないように注意する。発音は「クーポン」となる。

クーラー

cooler (cool-er) [kú:lə] 「クール」

冷却器という意味である。日本語の「クーラー」は英語では air conditioner である。日本語でもエアコンと呼ぶ。発音は「クール」となる。米国では冷蔵庫のことを cooler と呼ぶこともある。

クラブ

club (club) [klʌb] 「クラブ」

社交、スポーツ、研究のためのクラブである。日本でもクラブ活動という。日本でよく使われるサークルは、クラブである。もともとは先にこぶのついた太い棒（棍棒）という意味である。例えばゴルフクラブ (a golf club) と呼ぶ。また、トランプカードのクラブはこん棒をデザインしたものであるので club と呼ばれる。発音は「クラブ」となる。

クランク

crank (crank) [kræŋk] 「クランク」

L字型ハンドルのことである。機械では回転運動を往復運動に変える、あるいはその逆の操作をする仕組みのことを言う。発音は「クランク」となる。

クランクイン (和)

映画の撮影を始めることを「クランク イン」と言う。これは、撮影機のハンドルがクランクのかたちをしていたからである。ただし、これは和製英語である

グランプリ

grand prix (grand prix) [grɑːn pri] 「グラン プリ」

大賞あるいは最高の賞のことである。日本語でも「グランプリ」を受賞するという。もともとはフランス語であり、発音は「グラン プリ」となる。

クリーナー

cleaner (clean-er) [kliːnər] 「クリーナー」

(電気) 掃除機のことである。空気清浄機のこともこう言う。発音は「クリーナー」となる。

クリニック

clinic (clin-ic) [klínik] 「クリニク」

診療所のことである。日本でもクリニックと言う。発音は「クリニク」となる。

クリーニング

cleaning (clean-ing) [klí:niŋ] 「クリーニング」

日本では、クリーニング屋とって、洗濯屋を思い浮かべるが、英語でクリーニング店は laundry [lɔ:ndri] である。クリーニングには洗濯や掃除という意味はある。”do the house cleaning” で「家の掃除をする」という意味になる。発音は日本語とよく似ていて「クリーニング」となる。ただし、アクセントを置く「リ」の音は ”r” であるから、上の歯茎の裏に舌をつけて発音すれば完璧である。

クリーンアップ

cleanup (clean-up) [klí:nʌp] 「クリーナップ」

日本語では、クリーンアップ・トリオと言って野球の 3, 4, 5 番打者のことをいうが和製英語である。英語では cleanup trio とは言わない。cleanup は英語では（大）掃除や（政界の）浄化という意味となる。4 番打者のことを a cleanup hitter ということはある。発音は「クリーナップ」となる。

クレーム

claim (claim) [kléim] 「クレイム」

日本語では「クレームをつける」などと使って、不平や不満という意味になる。より具体的には、商品の品質や量が表示と違うときに弁償を求めることをクレームと言う。ただし、英語には、そういう意味はない。英語の claim は権利や主張という意味である。動詞に「主張する」という意味があるので、日本語の意味で使われるようになったと思われる。英語では、特許 (patent) の

審査請求項を **claim** と言う。日本語に使われるクレームに対応した英語は **complaint** [kəmpleɪnt] である。発音は「クレイム」となる。

クレジット

credit (cred-it) [krédit] 「クレディッ (ト)」

日本語では信用貸し、あるいは月賦という意味であるが、英語では「信用」あるいは「名声」という意味である。クレジットカードは英語でも **a credit card** と言う。発音は「クレディッ (ト)」となる。

クレヨン

crayon (cray-on) [kreiən] 「クレイウン」

子供が絵を描くときに使う絵の具。ろうに色を混ぜてかためたもの。-on があいまい母音である。発音は「クレイウン」となる。クレパスというのは **pastel crayon** のことでパステル (**pastel** [pæstél]) はクレヨンの一種である。クレパスというのは和製英語で、商標名である。

クレーン

crane (crane) [krein] 「クレイン」

起重機。重いものを持ち上げたり動かす機械である。しかし、英語では **crane** には鳥のツルという意味もある。クレーンの格好がツルを連想するので、この名がついた。発音は「クレイン」となる。

グロッキー

groggy (grog-gy) [] 「」

グローブ

glove (glove) [glʌv] 「グラブ」

手袋のことであるが、日本では野球のグローブが有名である。ただし、英語の発音は「グラブ」である。最後の[v]の発音は舌を嚙んで「ブ」と発音すればよい。同じ英語でありながら、ボクシング (Boxing) では日本語でもボクシング・グラブと呼ぶ。

グローブ

globe (globe) [glóub] 「グロウブ」

グローブにより近い発音の英語は globe 「グロウブ」であり、地球あるいは地球儀という意味がある。あるいは「地球の」という”terrestrial” [təréstriəl] 「ツレストリャル」という語をつけて、the terrestrial globe で地球、a terrestrial globe で地球儀という意味になる。ちなみに terrestrial には「地球に住むもの」という意味があり、頭に「範囲外の」という”extra-“という接頭語をつけた”extraterrestrial” は地球外生物となって、この略が有名な ET である。

クロール

crawl (crawl) [kró:l] 「クロール」

水泳の泳法のひとつであるが、英語では名詞ではない。crawl stroke をクロール泳法という。crawl は「這う」あるいは「這い回る」という意味である。水泳では「クロールで泳ぐ」という動詞となる。手の動きが「這う」かっこうに似ているので、この名がついたと思われる。水泳競技では自由形 (free style) と言えばクロールである。

ケーキ

cake (cake) [kéik] 「ケイク」

カステラ状の洋菓子。ただし、パイ (pie) はケーキといわない。

発音は「ケィク」である。単位として固まりという意味もあり、a cake of soap で石鹸1個という意味になる。石鹸でできたケーキと訳さないように注意する。

ケチャップ

ketchup (ketch-up) [kétʃəp] 「ケチュップ」

トマトベースのソース (sauce) のことである。発音は「ケチュップ」となる。

ゲッツー (和)

get two (get two) [get tú:]

野球でアウト (out) をふたつとるという意味でつくられたと思われる和製英語。英語では double play という。これは日本語でもダブルプレーと呼んでいる。

ケニア

Kenya (Ken-ya) [kí:njə] 「キーニョゥ」

アフリカ東部の国の名前。首都はナイロビ (Nairobi) である。いま ODA 疑惑で注目を集めている。-ya があいまい母音である。頭にアクセントがあり、発音は「キーニョゥ」となる。

ゲラ

galley (gal-ley) [gæli] 「ギャリ」

ゲラとは組版を入れる盆のことであり、ゲラ刷りとは、手書きの原稿を活字にした最初の印刷物をいう。ゲラ刷りを英語では galley proofs という。発音は「ギャリ」となる。

ゲリラ

guerrilla (guer-ril-la) [gərílə] 「グェリラ」

少ない人数で敵をかき乱す遊撃兵のことを呼ぶ。ゲリラ戦など

とも言う。もともとはスペイン語である。日本語ではゲリラと発音するが、英語の発音は動物のゴリラ (gorilla) とまったく同じ発音である。-ril-にアクセントがあり「グ^ッリラ」となる。

ゲルマニウム (独)

germanium (ger-ma-ni-um) [dʒəːméiniəm] 「ジユ^ッメイニウム」

一般のひとには温泉の鉱水の成分として有名である。昔は一斉を風靡したラジオの鉱石である。いまでも半導体では重要な元素 (Ge) である。この言語は German つまりドイツに由来しており、この発音もドイツ式である。英語ではジャーマンに基づく。アクセントは -ma- にあり、「メイ」と発音する。また、頭の ger- と最後の -um はともにあいまい母音である。よって「ジユ^ッメイニウム」となる。

ケンタッキー

Kentucky (Ken-tuck-y) [kəntʌki] 「クン^タッキイ」

米國中東部の州の名前であるが、日本ではケンタッキーフライドチキン (Kentucky fried chicken) で有名である。アクセントは -tuck- の位置にあり、発音は come と同じである。また、最初の ken- はあいまい母音となる。よって「クン^タッキイ」となる。

コアラ

koala (ko-a-la) [kouá:lə] 「コウ^アール^ッ」

オーストラリア (Australia) 原産の有袋類のくま。ただしコアラという名で通っている。発音は -a- にアクセントがあり、最後があいまい母音であるので「コウ^アール^ッ」となる。

ココア

cocoa (co-coa) [kókou] 「コウ^{コウ}」

もともとは熱帯のココアやしの木であるが、いまでは飲料の名

前として使われる。海外でも **cocoa** といえばココア飲料のことを指す。発音は「**コウコウ**」となる。

ココナッツ

coconut (co-co-nut) [kóukənʌt] 「**コウクッナツ(ツ)**」

椰子の実、あるいはココアの実。よって **cocoanut** とも書く。**coco-**は誤用といわれている。頭にアクセントがあり、**-co-**はあいまい母音である。よって発音は「**コウクッナツ(ツ)**」となる。

コバルト

cobalt (co-balt) [kóubɔ:lt] 「**コウポール(ト)**」

金属元素の一種で、元素記号は **Co** である。日本では鉄腕アトム (Astroboy) のお兄さんで有名。発音は「**コウポール(ト)**」となる。

コペルニクス

Copernicus (Co-per-ni-cus) [koupé:ɾnikəs] 「**コウプウーニクス**」

ポーランド (poland) の天文学者。地動説 (the heliocentric theory) を提唱した。発音は「**コウプウーニクス**」となる。

日本語ではコペ転と略すコペルニクスの転回は a Copernican revolution と言う。

コブラ

cobra (co-bra) [kóubrə] 「**コウブルッ**」

インド産の毒へび。有名な米国の戦闘用ヘリコプターの名前でもある。発音は「**コウブルッ**」となる。

コマーシャル

commercial (com-mer-cial) [kəmə:ɾʃəl] 「**クムウシユル**」

日本語では広告という意味で使われるが、英語は「商業の」あるいは「広告の」という形容詞である。広告は **commercial message**

という。日本では、これを略して **CM** と言うが、英語ではあまりこう言わない。あいまい母音が3個もはいつており、アクセントは-mer-にある。よって発音は「クムウシュル」となる。新聞、雑誌の広告は advertisement [ædvətáizmənt] となる。

コミック

comic (com-ic) [kámik] 「カミッ」

日本では漫画という意味で使われる。コミック小説などという。英語では「喜劇の」という意味の形容詞である。日本でも「こっけいな」という意味でコミカル (comical [kámikl]) という語を使う。発音は「カミッ」となる。a comic actor は喜劇俳優である。

名詞で漫画と使われることがある。新聞や雑誌の続き漫画を comic strip という。ただし、漫画は cartoon [ka:tú:n] の方が一般的である。

コミュニケ(仏 英)

communiqué (com-mu-ni-que) [kəmjù:nikéi] 「クミューニケイ」

公式発表や声明書のこ日本語でも「政府のコミュニケを発表する」などと使う。もともとはフランス語である。アクセントが最後にあり、発音は「クミューニケイ」となる。

コミュニケーション

communication (com-mi-ni-ca-tion) [kəmjù:nikéiʃən] 「クミューニケイション」

意思の疎通という意味である。通信や情報伝達という意味もある。communications satellite は通信衛星であるが、よく略して COMSAT と呼ぶ。年齢間の意思疎通のギャップを communications gap という。発音は-tion の規則にしたがって、前の音節の-ca-にアクセントを置く。com-はあいまい母音であるので、発音は「クミューニケイション」となる。

コミュニティ

community (com-mu-ni-ty) [kəmjuːnəti] 「クミューヌティ」

地域社会、共同体という意味である。the academic [ækədémik] community は学会である。the Japanese community in America はアメリカの日本人社会 となる。日本にもコミュニティセンター (community center) があるが、地域にある厚生施設である。a community college は地域にある短大のことである。いったん、このような短大に入った後で、取得した単位を持って四年制の大学に進むことができる。アクセントは ity の規則にしたがって -mu- にある。頭があいまい母音であるので、発音は「クミューヌティ」となる。

ゴム

gum (gum) [gʌm] 「ガム」

ゴムのことであるが、日本語のゴムという意味では、英語では rubber [rʌbər] 「(ウ)ラブゥ」を使う。例えば、ゴムタイヤは a rubber tire、ゴムホースは a rubber hose となる。実はチューイングガム (chewing gum) のガムがこの語と同じものである。発音は、こちらに近く「ガム」となる。

コメディ

comedy (com-e-dy) [kámədi] 「カムディ」

喜劇のことであるが、日本語でもコメディとして定着している。ただし、日本語のコメディ映画は、a comic film と呼んで、a comedy film とは言わない。発音は頭にアクセントがあり、「コ」ではなく「カ」となる。また、つぎがあいまい母音であることに注意して「カムディ」となる。

コメディアン

comedian (co-me-di-an) [kəmiːdiən] 「クミーディアン」

コメディ (comedy) の派生語で、喜劇俳優という意味である。日本語でもコメディアンで通る。ただし、発音に注意する。頭にアクセントが無くなるので、あいまい母音となる。アクセントは -me- の位置にあり「クミーディアン」となる。

コメント

comment (com-ment) [kámənt] 「カメント」

論評や解説のこと。日本語でも「コメントを求められる」という。コメントを求められて応えられないときは「ノーコメント」と言うが、英語でも同じ意味で **no comment** を使う。発音はコメントではなく「カメント」となる。頭にアクセントを置く。

コモン

common (com-mon) [kám(ɔ)mən] 「カムン」

これもよく使われる。「共通の」あるいは「公共の」という意味の形容詞である。Common sense は、日本語にもなっているコモンセンス、つまり常識や良識という意味である。Common welfare は公共福祉となる。また、Commonwealth で共和国となる。アクセントは頭にあり、-mon あいまい母音となる。よって「カムン」となる。あるいは「カームン」と伸ばすこともある。

コラム

column (col-umn) [káləm] 「カルム」

新聞や雑誌などの囲み記事のことであるが、日本語でも「スポーツコラム」のように使う。英語でも **a sports column** となる。社会問題について取り扱うコラムもある。頭にアクセントをおいてコではなくカと発音し「カルム」となる。

コラムニスト

columnist (col-umn-ist) [káləmnɪst] 「カ_{ルム}ニスト」

コラムを書く人という意味であるが、記者ではなく、新聞や雑誌の特別寄稿者のことを言う。発音は「カ_{ルム}ニスト」となる。

ゴリラ

gorilla (go-ril-la) [gə'ri:lə] 「グ_リラ」

動物のゴリラ。前出のゲリラとまったく同じ発音であり「グ_リラ」となる。

ゴールイン(和)

goal と in を組み合わせた和製英語。いろいろな意味に使われるが、それぞれに対応する英語が異なる。まず、「結婚する」という意味では get married となる。マラソンなどで「ゴールインする」ことは reach the finish line となる。サッカーなどで「得点する」ならば get a goal あるいは score a goal などと言う。

コルク

cork (cork) [kɔ:rk] 「コ_ォーク」

コルク櫛の木の皮の部分である。ワインの栓などに使う。コルク栓そのものも cork と言う。発音は「コ_ォーク」となる。

コルクの栓抜きを a cork screw というが、かたちが似ているので、ジェットコースターを英語ではこう呼んでいる。jet coaster という英語はない。coaster [kóustər] を使っては roller coaster と言う。

ゴールデンアワー(和)

golden hours という英語がある。ただし、この場合は、「素晴らしいとき」という意味になる。日本ではテレビの夜7時から9時程度の時間帯を言う。英語では prime time と言う。

ゴールデンウィーク（和）

もちろん、4月末から5月にかけて休日が続く週のことである。ただし、これら国民休日は日本だけであるので、これも和製英語である。

コレステロール

cholesterol (cho-les-te-rol) [kəléstəròul] 「クレスツッロウル」

医学用語であるが、いまは一般のひとでも通じる。これが血管にたまると、いろいろな病気を引き起こす。健康診断では必ず指摘される。コレステロールの高い値は **high cholesterol readings** となる。こうなると医者に注意される。発音は「クレスツッロウル」となる。

コレクション

collection (col-lec-tion) [kəlékʃən] 「クレクシュン」

収集あるいは収集物のことである。切手のコレクション (a collection of stamps) と言う。-tion の規則にしたがって、アクセントは、その前の音節の-lec-にある。頭はあいまい母音であるので、発音は「クレクシュン」となる。

コレラ

cholera (chol-er-a) [kálərə] 「カルル」

高熱を發する伝染病 (epidemic disease [epidémik dizí:z]) である。コレラ菌が原因である。発音は「カルル」となる。

ゴロ

grounder (ground-er) [gráundər] 「グラウンドウ」

野球やクリケットで、地面 (ground) を転がる打球のことを言う。日本語でゴロと言う。英語の発音は「グラウンドウ」となるが、最初の「グラ」だけが大きく響くので日本人にはゴロと聞こえた

のであろう。

コロンプス

Columbus (Co-lum-bus) [kəlʌmbəs] 「クラムプス」

アメリカ大陸を発見した有名人。ただし、Native American (Columbus はインドと思ったので Indian と呼んだが) が住んでいたのであるから、発見という言葉はおかしい。頭の Co-と後ろの -bus はともにあいまい母音である。アクセントは -lum- にあり、come と同じ発音である。よって「クラムプス」となるのが正しい。

コンコース

concourse (con-course) [kɒŋkɔ:rs] 「カンコース」

空港や駅の中央広場のことを言う。公園の散歩道のこととも言う。頭にアクセントがあり、カンと発音する。よって「カンコース」となる。

コンクリート

concrete (con-crete) [kɒŋkri:t] 「カンク(ウ)リート」

日本語でもコンクリートと言う。前出の abstract の反意語で、具体的なという意味もある。発音は「カンク(ウ)リート」。

コンクール(仏)

フランス語である。英語では competition という。

コングロマリット

conglomerate (con-glom-er-ate) [kɒŋgləmərət] 「クングラムルト」

複合企業体のことである。多国籍企業を a multinational conglomerate という。現在、世界はコングロマリットを形成する方向に進みつつある。ただし、図体が大きくなるとコントロールが利かなくなるのも確かで、企業運営は難しい。-ate の規則にし

たがって、アクセントは2音節前の-glom-に置かれる。また、頭はいまい母音であり「クングラムルト」となる。

コンサート

concert (con-cert) [kɑ́nsə:ɾt] 「カンス_ツャート」

音楽会のことであるが、日本語でもコンサートで通る。頭にアクセントがあり、-cert はいまい母音であり、発音は「カンス_ツャート」となる。

コンサルタント

consultant (con-sult-ant) [kə́nsʌ́ltənt] 「クンサルツ_ツント」

相談を受けるひとのことを言う。日本語でもコンサルタントという。頭がいまい母音で-sult-にアクセントがある。よって「クンサルツ_ツント」となる。consult [kə́nsʌ́lt] 「クンサル_ツト」「相談する」という動詞がもとになっている。

コンセンサス

consensus (con-sen-sus) [kə́nsə́nsəs] 「クンセ_ツンス_ツス」

(大多数の)一致した意見のことである。日本語でも「コンセンサスを得る」と言う。日本はまさに consensus politics (合意政治) であるが、これが政治腐敗を招く一因となっている。頭がいまい母音であり、発音「クンセ_ツンス_ツス」はとなる。

コンセント(和)

電気のプラグ(plug)の差込口を日本ではこう呼んでいるが明らかな誤用である。英語では outlet と言う。wall socket とも言う。アウトレット outlet [áutlət] 「アウト_ツルト」には販売代理店という意味があるが、日本ではブランド (brand) 品の半端ものを安く扱う店として定着している。

英語にもコンセントという単語はあるが、こちらは consent

(con-sent) [kənsɛnt] 「**クンセント**」で「同意」という意味である。

コンソメ

consommé (con-som-me) [kənsəmɛi] 「**カンスメイ**」

肉と骨でだしをとった透明のスープ (soup) である。日本人がレストランで注文して通じない場面を何度も見かけた。これは、もともとがフランス語であり、アクセントが後ろにある。また、コンではなくカンと発音する。よって「カンスメイ」となる。

コンタクト

contact (con-tact) [kəntækt] 「**カンタクト**」

接触という意味である。「未知の生物とのコンタクト」などと使う。コンタクトレンズ (contact lens) とも言う。頭にアクセントがあり、コンではなくカンと発音する。よって「カンタクト」となる。ただし、「接触する」という動詞にもなるが、この場合はアクセントが後ろに移動し、[kəntækt] 「**クンタクト**」となり、アクセントがなくなったので、頭はあいまい母音となる。

コンチェルト (伊 英)

concerto (con-cer-to) [kəntʃɛrtou] 「**クンチュウトウ**」

協奏曲のことで、コンツェルトとも言う。もともとはイタリア語 (italian) である。発音は「クンチュウトウ」となる。

コンディション

condition (con-di-tion) [kəndɪʃən] 「**クンディション**」

人間の健康状態や体調のこと、あるいは周囲の状況や条件のことを言う。-tion の規則にしたがって、アクセントは直前の音節の -di- に置かれる。また、頭はあいまい母音であるので、発音は「クンディション」となる。

コンテナ

container (con-tain-er) [kɒntéinər] 「クンテイヌッ」

英語の contain [kəntéin] 「含む」という単語に由来する。よって容器という意味であるが、日本語では貨物の運搬用の箱のことをコンテナと呼んでいる。頭があいまい母音であり、-tain-にアクセントがあるので、発音は「クンテイヌッ」となる。

コンテスト

contest (con-test) [kɒntest] 「カンテスト」

競技や競争という意味である。コンクール（フランス語）と同じ意味である。頭にアクセントがあり、コンではなくカンと発音する。よって「カンテスト」となる。

コンデンサ

condenser (con-dens-er) [kəndénsər] 「クンデンスッ」

電気を貯める装置である。日本語では、いまでも専門用語でこう呼んでいるが、英語ではコンデンサとは言わずに capacitor [kəpəésətər] 「クパァストッ」と呼ばれる。いまは、気体や液体の濃縮装置のことを condenser と言う。頭があいまい母音であるので、発音は「クンデンスッ」となる。

コンデンス

condense (con-dense) [kəndéns] 「クンデンス」

「濃縮する」という意味の動詞である。日本ではコンデンスミルクという商品がある。砂糖を入れて煮つめたミルクである。英語では、condensed milk となる。これは condense という動詞の過去分詞形 condensed で「濃縮された」という意味である。発音は「クンデンス」となる。

ゴンドラ

gondola (gon-do-la) [gándələ] 「ガンドゥル」

つりかごのことである。気球のゴンドラと言う。ベニス(Venice)の長い平底船のこともこう呼ぶ。発音は「ガンドゥル」となる。

コントラスト

contrast (con-trast) [kántræst] 「カントラェスト」

対照、対比という意味である。例えば、色の違いがはっきりしているときには「コントラストが強い」などと言う。頭にアクセントがありカンと発音する。よって「カントラェスト」となる。

コンパ(和)

company (com-pa-ny) [kámprəni] 「カムプニィ」

すでに既出の会社の意味のカンパニーと同じ単語である。日本ではパーティーの意味で使われる。合コンは、合同コンパの略で和英混合の合成語である。

コンバイン

combine (com-bine) [kəmbáin] 「クムバイン」

日本語では、刈り取りと脱穀が両方できる農業機械のことを言うが、combine はもともとは「結合させる」という動詞である。日本語の農業機械は combine harvester [hárvístər] と言う。これを略して、最初の語の combine だけが残ったものと思われる。発音は「クムバイン」となる。

コンパクト

compact (com-pact) [kámpækt] 「カムパクト」

携帯用のおしろい入れをコンパクトと言う。ただし、これは名詞で、形容詞では「ぎっしり詰まった」という意味がある。発音は「カムパクト」となる。コンピュータにおけるデータ保存用の CD は compact disc の略である。日本語でもコンパクトディスクと呼

ぶ。

また動詞では「圧縮する」という意味になる。ただし、動詞の場合には発音は [kəmpækt] 「クムパクト」のように、頭があいまい母音になり、アクセントの位置も変化する。

コンパートメント

compartment (com-part-ment) [kəmpɑ:rtmənt] 「クムパートメント」

鉄道の仕切り客室のことを言う。頭はあいまい母音で、-part-にアクセントがあるので、発音は「クムパートメント」となる。

コンパス

compass (com-pass) [kəmpəs] 「カムパス」

算数で円を描くときに使う道具である。両脚器とも言うが、コンパスのほうが一般的である。方位磁石のことをコンパスとも言う。発音は「カムパス」となる。

コンビニ(和)

コンビニエンス・ストアを略した和製英語である。

コンビニエンスストア

convenience store (con-ve-nience store) [kənvi:njəns stɔ:r] 「クンヴィーニュンス ストア」

多種類の品をそろえ、長時間営業している小規模のスーパーである。いまでは 24 時間営業が増え、競争が激化している。もともとは convenience は「便利」という意味の英語である。頭はあいまい母音で-ve-にアクセントがあるので少し一拍長く発音するのがコツである。「クンヴィーニュンス ストア」となる。

コンピューター

computer (com-put-er) [kəmpju:tə] 「クムピューター」

頭の **com-**と後ろの**-ter** はともにあいまい母音である。また、アクセントは**-put-**の位置にある。よって「カムピューターッ」となる。特に、あいまい母音であるから、頭を「コン」と強く発音しないようにする。

コンプレックス

complex (com-plex) [kampléks] 「カムプレクス」

日本語では劣等感という意味で使われることが多い。「日本人は知らず知らずのうちに欧米人にコンプレックスを感じる。」というような使い方をする。

ただし、**complex** に劣等感という意味はなく、固定観念という意味があり、**an inferiority** [infirió:rəti] **complex** で劣等感、**a superiority** [supirió:rəti] **complex** で優越感という意味になる。

complex はもともと「複雑な」という意味であり、精神的にも複雑な状態、あるいは「複雑なためにいらいらした状態」を指す。

コンペ(和)

ゴルフ(golf) 競技をゴルフコンペと言うが、コンペは日本語独特に勝手に英語を略してしまっただけである。正式にはコンペティション (**competition**) である。

コンペティション

competition (com-pe-ti-tion) [kàmpətiʃən] 「カムペティション」

競技という意味である。日本語のコンペのもととなった。**-tion** のルールに従って、アクセントは**-tion** の直前の音節に置かれる。ただし、頭にも第二アクセントがあり、「カムペティション」となる。

コンビ(和)

英語のコンビネーション (**combination**) を勝手に日本式に略したもの。組み合わせという意味である。日本語では、「〇〇とコ

ンビを組む」などと言うが、英語にはそういう意味はない。

コンビネーション

combination (com-bi-na-tion) [kàmbənéiʃən] 「カムブネイション」

組み合わせという意味である。アクセントは-tionの規則に従って、ひとつ前の音節の-na-にあり、-bi-があいまい母音であるので発音は「カムブネイション」となる。

コンフェクショナリー

confectionery (con-fec-tion-er-y) [kənfékʃənəri] 「クンフエクシュヌリィ」

しゃれたお菓子屋やケーキ屋の看板によく見られる。お菓子あるいはお菓子屋の意味である。ただし、あたまのcon-はあいまい母音であり、アクセントは-fec-の位置にある。また、-tio-も-ner-もあいまい母音である。よって、発音は「クンフエクシュヌリィ」となる。

コンマ

comma (com-ma) [kámə] 「カムマ」

英語で区切るときに使う「,」という記号である。発音は、頭にアクセントをおいてコではなくカとなり、-ma はあいまい母音であるから「カムマ」となる。

サ行

サイエンス

science (sci-ence) [sáíəns] 「サイウンス」

科学という意味である。ただし、サイエンスという発音では通じない。アクセントは頭にあり、いちばん注意することは **-ence** がエという発音ではなくあいまい母音となる点である。よって「サイウンス」となる。

サイクル

cycle (cy-cle) [sáikl] 「サイクル」

周期のことであるが、振動や周波数の単位ともなる。発音は日本語とほぼ同様に「サイクル」となる。

自転車という意味もあり、サイクル仲間などと言う。サイクリング(cycling)は英語でも日本語でも、自転車旅行という意味がある。

サイケデリック

psychedelic (psy-che-de-lic) [saikidélik] 「サイキデリック」

日本でも一度流行った文化芸術。もともとは、「恍惚の」あるいは「幻覚を生じる」という形容詞である。アクセントは **-de-** にあり、「サイキデリック」となる。

サイコ

psycho (psy-cho) [sáikou] 「サイコウ」

精神病者のことであるが、日本の小説では「超心理」あるいは「心霊」というイメージが強い。発音は「サイコウ」となって、最後のウはちゃんと発音するのがこつ。

サイコロジ

psychology (psy-chol-o-gy) [saiká:løgi] 「サイカ-ルジイ」

心理学である。アクセントは-chol-にあつて「ア」と発音する。よつて「サイカ-ルジイ」となる。

サイダー (和)

日本語ではソーダ (soda) のことをサイダーと言う。英語の cider はりんご酒のことである。

サイバネティックス

cybernetics (cy-ber-net-ics) [sàibərnétiks] 「サイブ-ネティクス」

人工頭脳学である。生体の働きと、機械の機能を比較する学問である。アクセントは-ics の法則に従つて、その前の音節にある。発音は「サイブ-ネティクス」となる。

サイボーグ

cyborg (cy-borg) [sáibò:rg] 「サイボーグ」

改造人間のことで、SF(science fiction)では欠かせない。実際には、存在しない。cybernetics organism の略である。発音は「サイボーグ」となる。

サイレン

siren (si-ren) [sáirən] 「サイッレン」

警報を鳴らすサイレンのことである。アクセントが頭にあり、あいまい母音がふたつあるので、発音は「サイッレン」となる。

サイロ

silo (si-lo) [sáilou] 「サイロウ」

家畜の牧草を蓄えておく石やれんがでできた塔のような倉庫のことである。日本語でもサイロと言う。アクセントは頭にあり、後ろを「オウ」と発音する。よって「サイロウ」となる。

サイン

signature (sig-na-ture) [sínætʃər] 「スィグナチュウ」

サインは日本語である。その原語は **sign** と思われるが、記号や標識という意味はあるが、名前を書くサインという意味はない。動詞として使われるときにサインするという意味がある。

日本語のサインに対応した英語は、**sign** の名詞形の **signature** である。アクセントは頭にあり、あいまい母音が 2 つ入っている。発音は「スィグナチュウ」となる。ただし、これは署名のことで、有名人のサインは **autograph** [ó:təgræf] という。

サインペン (和)

日本の商標である。英語では a felt(-tipped) pen である。

サウナ

sauna (sau-na) [só:nə] 「ソーヌ」

フィンランド発祥の蒸し風呂である。日本でもサウナと言って人気がある。発音は「ソーヌ」となる。

サキソホン

saxophone (sax-o-phone) [sæksəfoun] 「サァクスフOWN」

ベルギー人の **Sax** が発明した楽器なので、この名前がついた。ちなみに **-phone** は音という意味である。**tele-phone** は電話、**micro-phone** は拡声器である。英語でも日本語でも略して **sax** [sæks] と言う。アクセントは頭にあり、**-o-**があいまい母音であ

るので、発音は「**サ**ァク^ッス^フォウン」となる。

サクセス

success (suc-cess) [səksés] 「**ス**ク^セス」

成功である。日本語でも成功物語をサクセスストーリーなどと言う。アクセントが後ろにあり、最初があいまい母音であるので、発音は「**ス**ク^セス」となる。

サークル

circle (cir-cle) [sə:rkɪ] 「**ス**ッ^ークル」

円という意味であるが、日本語では仲間や団体という意味がよくサークルが使われる。頭の cir- にアクセントがあり、しかもあいまい母音である。よって発音は「**ス**ッ^ークル」となる。

サスペンス

suspense sus-pense [səspéns] 「**ス**ス^ペンス」

日本語でもスリルとサスペンス (thrill and suspense) と言う。はらはらどきどきの状態である。ただし、英語ではアクセントが後ろにあり、しかも頭の sus- はあいまい母音である。よって「**ス**ス^ペンス」となる。

サスペンダー

suspender sus-pend-er [səspéndər] 「**ス**ス^ペンド^ッ」

「ズボンつり」のことであるが、日本語としてサスペンダーがより定着している。ただし、この意味で使う時、英語では普通は複数形となる。つまり suspenders である。頭の sus- と後ろの -der がともにあいまい母音である。よって「**ス**ス^ペンド^ッ」となる。

この語のもととなる suspend は「つり下げる」という意味の動詞であり、発音も頭があいまい母音であるから「**ス**ス^ペン(ド)」となる。発音記号では[səspénd]となる。最後の d は発音しないぐら

いの気持ちで弱く発音する。

サタデイ

Saturday (Sat-ur-day) [sætədeɪ] 「サトッデイ」

もちろん土曜日のことであるが、この発音も難しい。日本でも大ヒットした映画「サタデー・ナイト・フィーバー」(Saturday night fever) は有名である。

まずアクセントは頭にあり、cat と同じ[æ]である。-ur-はあいまい母音となる。よって「サトッデイ」となる。少々大げさなくらい頭にアクセントを置いて、あとはいっきにいけばよい。

サバイバル

survival (sur-viv-al) [sərváivəl] 「スヴァイヴル」

生き残りという意味である。日本語でもサバイバルナイフや、サバイバルレースなどと言う。発音は「スヴァイヴル」となる。

サービス

service (serv-ice) [sə:vis] 「スヴァービス」

日本語として定着した。業務、公益事業、点検、あるいはテニスのサービスという意味がある。頭の serv-にアクセントがあるが、英語ではめずらしく、あいまい母音にアクセントがある。よって「スヴァービス」となる。

ただし、日本語の「値引き」という意味の英語はない。これに対応した英語は discount である。ただにするサービスは、free である。

サボタージュ

sabotage (sab-o-tage) [səbətɑ:ʒ] 「サァブタージュ」

日本では、仕事を怠けることを言う。日本語で「サボる」という動詞の語源である。

ただし、英語では、単に怠業という意味ではなく、労働争議などで故意に機械類を壊して妨害することを言う。また、敵スパイによる破壊工作のことも指す。発音は「**サァ**プタージ」となる。

サラダ

salad (sa-lad) [sæləd] 「**サァ**ルド」

サラダ記念日がベストセラー (best seller) になった。ただし、日本語発音で注文しても通じない。アクセントは頭にあり cat の a の音[æ]である。また、-lad はあいまい母音である。よって「**サァ**ルド」となる。

サラリー

salary (sal-a-ry) [sæləri] 「**サァ**ルゥリ」

給料のこと。サラリーマンは有名であるが、和製英語である。英語では a salaried worker となる。あるいは an office worker、a white-collar worker とも言う。アクセントは頭にあり、つぎがあいまい母音である。よって「**サァ**ルゥリ」となる。

サロン

salon (sa-lon) [sælɒn] 「**サァ**ラン」

大邸宅の大広間のことを指す。あるいは転じて、上流階級のことともこう言う。サロン音楽 (salon music) は、邸宅で演奏する器楽音楽のことである。発音は「**サァ**ラン」となる。

サロン

saloon (sa-loon) [səlu:n] 「**スル**ーン」

日本語でいうサロンには、ヘアサロンのように別の意味のサロンもある。こちらは、談話室、客室、客車といった意味である。

ヘアサロンは和製英語で、正しくは a hairdresser's saloon と言う。アクセントは後ろにあり、頭はあいまい母音である。よって

発音は「スルーン」となる。

サンノゼ

San Jose (San Jo-se) [sænəzɛi] 「サ_ァヌゼ_ィ」

サンフランシスコの東南部に位置する都市。シリコンバレー (silicon valley) として有名である。日本人には発音が難しい。「サ_ァヌゼ_ィ」となる。

サンフランシスコ

San Francisco (San Fran-cis-co) [sæn frənsískou] 「サ_ァン フルンシスコウ」

米国カリフォルニア州(California state)の有名な観光都市である。発音はサ_ァン フルンシスコウ」となる。

シアトル

Seattle (se-at-tle) [siætɫ] 「ス_ィア_トウ」

イチロウとササキの日本人選手ふたりが大活躍するマリナーズ (Mariners) の本拠地である。トルとカタカナ表記をすると、日本人は母音を入れて発音してしまう。発音は「ス_ィア_トウ」ぐらいの気持ちの方が原語に近い。

シガー

cigar (ci-gar) [sigá:r] 「ス_ィガ_ー」

葉巻のことである。昔は金持ちのシンボルであったが、最近ではにおいがきついで嫌煙されている。アクセントが後ろにあるのに注意して「ス_ィガ_ー」と発音する。

シガレット

cigarette (cig-a-rette) [sìgəret] 「ス_ィグレ_ト」

たばこのことである。発音は「ス_ィグレ_ト」となる。日本のたば

こはシガレットである。タバコ (tobacco) は刻みたばこのことである。

システム

system (sys-tem) [sɪstəm] 「スイストゥム」

組織や体系、体制のことであるが、日本語でもシステムで通じる。-tem はあいまい母音であるから、「スイストゥム」となる。

シーズン

season (sea-son) [si:zn] 「スィーゾン」

季節のことである。四季は the four seasons である。発音は「スィーゾン」となる。

シーズンオフ (和)

これも和製英語である。正しくは、off-season となる。

シナリオ

scenario (sce-nar-i-o) [sənæriəu] 「スナァリオウ」

台本、脚本という意味であるが、一般的に筋書きという意味で使われる。日本語として定着しているが、発音に注意する。最初が sce-があいまい母音であり、-nar-にアクセントがある。よって「スナァリオウ」となる。

シニア

senior (sen-ior) [si:njə] 「スイーニウ」

シニアというと日本では年配者のことを指すが、英語では年長という意味でもよく使われる。大学の 4 年生や高校の 3 年生は senior である。また、高校は senior high school と言う。アクセントは頭にあり、音を伸ばすのがコツ。また -ior はあいまい母音である。よって「スイーニウ」となる。

シミュレーション

simulation (sim-u-la-tion) [sɪmjʊleɪʃən] 「スィミュレイション」

模擬実験のことである。日本語でも、シミュレーションとして定着している。昔のクイズで、シュミレーションとシミュレーションのどちらが正しいかという問題があったが、いずれの日本語表記も正しくはない。-tion の法則に従って、アクセントは-laにある。発音は「スィミュレイション」となる。

シビア

severe (se-vere) [sɪvɪər] 「スィヴィアウ」

「厳しい」という意味で日本語でもよく使われる。発音は「スィヴィアウ」となる。

シベリア

Siberia (Si-be-ria) [saɪbɪəriə] 「サイビャリャ」

ロシアのシベリア半島である。はじめて、この英語を聞いた時には、シベリアとは分からなかった。アクセントは-beにあり、Siはシではなくサイと発音する。最後の-ria はあいまい母音である。よって「サイビャリャ」となる。

シャープペンシル(和)

シャープペンシルは、英語の商標名である Eversharp「いつでも尖っている」という英語の sharp と pencil を合成した和製英語である。正しくは、a mechanical pencil、あるいは an automatic pencil である。日本語では、さらに略してシャーペンとも言う。

シュークリーム(和)

シュークリームはフランス語の chou à la crème の a と la を省略した和製外来語である。英語では cream puff と言う。

ジュネーブ

Geneva Ge-ne-va [dʒəni:və] 「ジュニーヴ」

国際赤十字本部のあるスイスの有名な都市である。レマン湖も有名。ただし、日本人の発音のジュネーブはフランス読みであるため通じない。あいまい母音が Ge-と-va の 2 個あり、アクセントが-neにある。よって「ジュニーヴ」となる。-neに大きさにアクセントを置くのがコツである。

シラブル

syllable (syl-la-ble) [sɪləbl̩] 「スィルブル」

冒頭で紹介した音節のこと。発音するときの一つの単位である。アクセントは頭にあり、-la-はあいまい母音である。よって「スィルブル」となる。

シリコン

silicon (si-li-con) [sɪlɪkən] 「スィリクン」

日本名がけい素という元素 (Si) であるが、産業のコメである半導体材料として有名。シリコンバレー (Silicon Valley) は日本でもよく知られている。アクセントは頭にあり、-con はあいまい母音である。よって「スィリクン」となる。

シリーズ

series (se-ries) [sɪəri:z] 「スィウリーズ」

一連のという意味である。連続出版や連続試合のこともシリーズと言う。日本語でもシリーズと普通に使う。発音はあたまたにアクセントがあり、「スィウリーズ」となる。

シリンダー

cylinder (cyl-in-der) [sɪlɪndər] 「スィリンドゥ」

円筒のことである。米国の小学校では図形の円柱として習う。ただし、日本語の発音とは大きく異なる。アクセントが頭にあり、後ろの-der はあいまい母音である。よって「スィリンドゥ」となる。

シルバー

silver (sil-ver) [sɪlvər] 「スィルブゥ」

銀という意味であるが、日本ではシルバーシートのように年配者という意味でよく使う。頭にアクセントがあり、-ver はあいまい母音である。よって「スィルブゥ」となる。この単語も思いきって頭のアクセントを強く言うのがコツである。

シンガポール

Singapore (Sin-ga-pore) [sɪŋəpɔː] 「スィングポー」

アジアの国である。この発音も通じにくい。アクセントは頭にあり、-ga-はあいまい母音である。よって「スィングポー」となる。

シンクタンク

think tank (think tank) [θɪŋk tæŋk] 「スィンク タァンク」

頭脳集団のことである。現在では、政治、経済、科学技術などの幅広い分野を調査研究する総合研究所のことをこう呼ぶ。発音は「スィンク タァンク」となる。頭の発音は"θ"であるので、上の歯の下を舌でこするようにして「ス」と発音する。

シングル

single (sin-gle) [sɪŋɡl] 「スィングウ」

「ただひとつの」という意味である。独身のことを言う。また、日本では、ゴルフでハンディキャップが9以下のひとをこう呼ぶが、英語ではこう呼ばない。発音は「スィングウ」となる。

シンジケート

syndicate (syn-di-cate) [sɪndəkət] 「スィンドゥクト」

企業連合という意味であるが、マフィアなどの非合法集団のことをこう呼ぶことも多い。発音は-di-と-cate があいまい母音であるので「スィンドゥクト」となる。

シンデレラ

Cinderella (Cin-der-el-la) [sɪndərələ] 「スィンドゥレラ」

全世界で有名な童話の主人公である。ただし、はじめて英語の発音を聞いたときには卒倒した。まず、アクセントが-el-と後ろの方にあり、あいまい母音も入っている。よって「スィンドゥレラ」となる。タイプとしてはアンブレラの発音に似ている。

シンドローム

syndrome (syn-drome) [sɪndroum] 「スィンドロウム」

病的な現象のことである。日本語訳は「症候群」となる。エイズ(AIDS)は、Acquired Immune Deficiency Syndrome の略である。後天性(acquired)免疫(immune)不全(deficiency)症候群が和訳である。

シンパ(和)

政治的思想などを支持するひとたちを「〇×のシンパ」などと言うが、これは日本語ではなく、英語の sympathizer (sym-pa-thi-zer) をもとにしている。

シンポジウム

symposium (sym-po-si-um) [sɪmpoʊziəm] 「スィムポウジウム」

国際シンポジウム(International symposium)は日本でも頻繁に開催されるが、この語が海外のひとには通じない。まず、アクセントは-po-にあり「オウ」と発音しなければならない。-um はあいまい母音である。よって「スィムポウジウム」となる。

シンボル

symbol (sym-bol) [símbɒl] 「スィムブル」

象徴という意味である。日本語でもシンボルで通る。ただし、英語ではボルとは発音しない。発音は「スィムブル」となる。

スカンジナビア

Scandinavia (Scan-di-na-vi-a) [skændənɛivɪə] 「スキヤンドゥネイヴィウ」

スウェーデン (Sweden)、ノルウエー (Norway)、デンマーク (Denmark) の総称である。航空会社の名前にもなっている。発音は-di-があいまい母音であり、アクセントが-na-にあるの「スキヤンドゥネイヴィウ」でとなる。

スキムミルク

skim milk (skim milk) [skim milk] 「スキム ミルク」

脱脂粉乳のことである。商品名にもなった。英語では skimmed milk とも言う。skim は「上澄みをすくう」という意味の動詞である。発音は日本語に近く「スキム ミルク」となる。

スキャン

scan (scan) [skæn] 「スキャン」

日本語では「走査する」という意味で使う。英語では「精査する」という意味もある。パソコンにつけて画像を取り入れるスキャナー (scanner) が日本では有名である。発音は、日本語と同じで「スキャン」となる。

スキャンダル

scandal (scan-dal) [skændl] 「スキヤンドウ」

醜聞や悪評のことを言う。日本語でも「政界のスキャンダル」

や「芸能スキャンダル」と言う。発音は「スキヤンドウ」となる。

この形容詞形のスキャンダラス (scandalous) [skændələs] 「スキヤンドゥルス」もよく使われる。

スキン

skin (skin) [skin] 「スキン」

皮膚のことである。最近では、毛を剃った頭をスキンヘッド (skin head) と言うが、これは日米共通である。発音は日本語とほぼ同じで「スキン」となる。

日本でも流行っているスキンドイビング (skin diving) というレジャー兼スポーツがあるが、もともとは素もぐりという意味であったものが、今では潜水用具をつけてもぐることも、こう呼んでいる。

スキンシップ (和)

スキン (skin) と、状態を表す接尾語であるシップ (-ship) を勝手に組み合わせた和製英語である。肌と肌を合わせるという意味あいであろうが、あえて英語に訳せば **bodily contact** となる。

スクラップ

scrap (scrap) [skræp] 「スクラップ」

断片という意味であるが、新聞や雑誌の切り抜きのことも言う。くず鉄という意味もある。日本ではスクラップと言えば、切り抜きのことを指すが、英語では **clipping** や **cutting** と言う場合が多い。ただし、切り抜き帳は英語でもスクラップブック (scrapbook) と呼ぶ。発音は「スクラップ」となる。

スクラム

scrum (scrum) [skrʌm] 「スクラム」

ラグビー (rugby) のスクラムであるが、これから日本語では

腕を組んでかたまることをスクラムを組むと言う。英語にはそういう意味はない。発音は、「スクラム」となる。もともとは scrummage [skrʌmidʒ] という単語である。

スクランブル

scramble (scram-ble) [skræmbəl] 「スクラァムブル」

かき混ぜるという意味である。いり卵のことを scrambled egg と言うが、日本語でもスクランブルドエッグという。軍事用語で、緊急発進のことをスクランブルとも言う。発音は「スクラァムブル」である。

スクリュー

screw (screw) [skru:] 「スクルー」

船のスクリューであるが、英語ではらせん状のねじのこともこう呼ぶ。野球のシュートを screw ball と呼ぶ。shoot ball とは言わない。発音は「スクルー」のように後ろにアクセントを置く。

スクリュードライバー

screwdriver (screw-driv-er) [skru:draɪvər] 「スクルードゥライヴゥ」

ねじ回しのドライバーのことであるが、日本では有名なカクテル (cocktail) の名前である。発音は「スクルードゥライヴゥ」となる。

スケジュール

schedule (sched-ule) [skédʒu:l] 「スケジュゥ (ル)」

予定 (表) のことであるが、日本語でもスケジュールで通る。ただし、英語ではケを強く「スケジュゥ (ル)」と発音する。最後のルは発音しない方が無難である。

スコア

score (score) [skó:r] 「スコゥ」

得点のことである。得点するという動詞にもなる。発音はコを強く「スコウ」^ウと発音する。

スコップ

scoop (scoop) [skú:p] 「スクープ」

土をすくうちいさいシャベル(shovel)のことである。スコップはもともとはオランダ語であり、英語では scoop となる。発音は「スクープ」である。

新聞などの特ダネも scoop と言う。これも日本語となっている。

スタジアム

stadium (sta-di-um) [stéidiəm] 「ステイディウム」

競技場や野球場のことである。the National Stadium は国立競技場のことである。発音はタではなくティとなる。よって「ステイディウム」^ムとなる。

スタジオ

studio (stu-di-o) [stjú:diòu] 「ステューディオウ」

テレビや映画のスタジオである。ユニバーサル・スタジオ (universal studio) が大阪にできて人気を博している。ただし、日本式に発音してもまったく通じない。「ステューディオウ」となる。

スタミナ

stamina (stam-i-na) [stæmənə] 「スタムヌ」

疲労などに耐える気力や体力を言う。日本語では「スタミナ充分」などとよく使うが、英語ではあまり使わない。同じ意味の英語は a staying power となる。発音はあいまい母音があふたつもあり「スタムヌ」^ヌとなる。

スチール

steal (steal) [sti:l] 「スティール」

「盗む」という動詞であるが、日本語では野球の「盗塁」をスチールという。一方、鉄のことをスチールというが、こちらの英語は steel と異なる。発音は両者とも同じで「スティール」となる。

ストレート

straight (straight) [streit] 「ストレイト」

まっすぐなという意味である。ポーカー (poker) の役のひとつである。ウィスキー (whiskey) を水で割らずに飲むことをストレートというが、英語も同じである。

日本では野球の直球をストレートボールと言うが、これは和製英語である。英語では fast ball と言う。発音は、レートと伸ばさずにレイトとなる。よって「ストレイト」である。

ストロベリー

strawberry (straw-ber-ry) [stró:bəri] 「ストローベリー」

いちごのことであるが、日本語では「ベ」にアクセントを置く。英語では -raw- にアクセントがあり、-ber- はあいまい母音となる。よって「ストローベリー」となる。

スナック

snack (snack) [snæk] 「スナック」

軽食やおやつのことを言う。日本語ではカウンターのある飲み屋をスナックと呼んでいるが、英語では a snack bar となる。発音は「スナック」となる。

スーパーマン

superman (super-man) [sú:pərmæn] 「スーパーメン」

世界のヒーロー (Hero) である。日本式には「パ」にアクセントがあるが、英語では頭にある。また -per- はあいまい母音である。

よって「スープメン」となる。最初にアクセントをおけば、スープ麺と発音してもよい。

スパイダー

spider (spi-der) [spáidər] 「スパイド_ッ」

くものことである。漫画のヒーロー (hero) のスパイダーマン (spiderman) が有名である。発音は「スパイド_ッ」となる。

スパゲッティ

spaghetti (spa-ghet-ti) [spəgétɪ] 「スパゲ_ェティ」

有名なイタリア製のヌードル (noodle) である。ただ、発音は難しい。spa-はあいまい母音で、-ghet-にアクセントがある。よって「スパゲ_ェティ」となる。

スペクタクル

spectacle (spec-ta-cle) [spéktəkl̩] 「スペクト_ックル」

壮観あるいは壮観な光景を言う。大しがけの見世物やショーのこともこう呼ぶ。発音は「スペクト_ックル」となる。

スペシャル

special (spe-cial) [spéʃl̩] 「スペ_ィシャル」

「特別の」「特有の」という意味である。「専門の」という意味もある。日本語でも専門家をスペシャリスト (specialist) と呼ぶ。発音はシャルではなく「スペ_ィシャル」となる。

スワロー

swallow (swal-low) [swálow] 「スワ_ウロウ」

ツバメのことであるが、プロ野球ファンはヤクルトスワローズの方がなじみがあるかもしれない。日本語ではスを母音まじりで発音し、アクセントを置くが子音であるので、アクセントはない。

発音は「スワロウ」となる。ワに思い切ってアクセントを置くのがコツである。

ちなみに、「飲み込む」という動詞もスペルと発音がまったく同じである。

セカンド

second (sec-ond) [sékənd] 「セクン(ド)」

2番目という意味である。野球の二塁手(正式には a second base man) のことも指す。カタカナ表記は違うがボクシング (boxing) のセコンドも同じ単語である。時間の単位の秒にもなる。発音は頭にアクセントを置き、-ond はあいまい母音である。よって「セクン(ド)」となる。最後の "d" は発音しないくらい弱い。

セキュリティ

security (se-cu-ri-ty) [sikjūrəti] 「スイキュルティ」

安全、警備、保障という意味である。空港の保安点検をセキュリティチェック (security check) という。発音は「スイキュルティ」となる。

セコハン(和)

中古という意味であるが、これはセカンドハンド (second hand) という英語を日本式に勝手に略したものである。secondhand [sékəndhænd] 「セクンドハェンド」は中古のという意味の英語である。a secondhand bookstore は古本屋という意味である。the secondhand car market は中古車市場となる。古本のごとは a used book、中古車は a used car と言うこともある。

セーター

sweater (swea-ter) [swétər] 「スウェッツ」

完全な日本語である。ただし、英語は sweat (汗) に由来して

いる。アクセントは *swea-* にあり、*-ter* はあいまい母音である。よって「スウェツッ」となる。

セーフ

safe (safe) [seif] 「セイフ」

日本では野球用語となっている。英語では「安全な」という形容詞であり、野球用語でも「セーフの」という形容詞となる。

名詞としては、複数形 *safes* にすると金庫という意味になる。発音は日本語とほぼ同じで「セイフ」となる。

セーフティ

safety (safe-ty) [séifti] 「セーフティ」

安全という意味である。日本語でも同様の意味で使われる。a safety pin は安全ピンのことである。a safety razor は安全かみそりである。

野球用語に、自分が生きようとするバント (*bunt*) にセーフティバントというのがあるが、これは和製英語である。英語では a drag bunt と言う。発音は「セーフティ」となる。

セーフガード

safeguard (safe-guard) [séifgà:rd] 「セーフガード」

保護策という意味である。海外から安い製品が入ってくるのを防ぐことをセーフガードと言う。機械などの安全装置を *safeguard* と言う。発音は「セーフガード」となる。

ゼネコン

ゼネラルコントラクター (*general contractor*) を日本式に略したもの。総合建築請負業者のことであるが、最近ではあまりイメージはない。公共工事で政治家と癒着しているという評判がある。ただし、この語のもととなった英語の a *general contractor* には日

本のような意味はない。

ゼネラル

general (gen-er-al) [dʒénərəl] 「ジェヌラルル」

「全体的な」という意味の形容詞であるが、軍隊の「大将」という意味もある。発音は「ジェヌラルル」となる。

昔は、この名前のテレビメーカーがあったが、これは General Electric (GE) の子会社である。ゼネストというのは a general strike のことで全体ストライキという意味で、複数の企業の従業員がこぞって罷業することである。

セラピー

therapy (ther-a-py) [θérəpi] 「セルピイ」

治療法のことである。

セラミックス

ceramics (ce-ra-mics) [sərəémiks] 「スラァミクス」

窯業のことである。陶磁器製の製品のこともセラミックスと呼ぶ。ceramic [sərəémik] は、陶器の、あるいはセラミックスのという形容詞であるが、そのまま陶磁器という意味もある。発音は頭があいまい母音であることに注意する。-ics と -ic の法則に従って、アクセントは -ra- の位置にある。よって発音は「スラァミクス」となる。

セール

sale (sale) [seil] 「セイル」

販売という意味であるが、日本では特売という意味でよく使う。英語でも同様の意味があり、a big sale で大特売となる。発音は「セイル」である。

セールスマン

salesman (sales-man) [seilzmən] 「セイルズマン」

販売系の男性である。あるいは外交の販売員のこともこう呼ぶ。日本語にもなっているが、セールスではセールズとにごる。頭にアクセントを置いて「セイルズマン」となる。

セレブ(和)

英語の *celebrity* を日本語式に略した和製英語。ただし、意味は英語の *celebrity* と同じである。

ゼロ

zero (ze-ro) [ziərou] 「ジューロウ」

数字のゼロであるが、日本式にゼロと発音しても通じない。「ジューロウ」となる。

センター

center (cen-ter) [séntər] 「センツッ」

中心あるいは中心地という意味である。野球では中堅手（正式には a center fielder）のことを指す。アクセントは cen- にあり -ter はあいまい母音である。よって「センツッ」となる。はやく発音する場合には「セナッ」と聞こえる。

この単語の形容詞は *central* であるが、日本式にセントラルと発音してはいけない。-ral はあいまい母音であるので「セントゥルゥ」発音記号では [séntɾəl] となる。

センチ

センチメンタルを日本式に略したものである。英語ではない。センチメートル (centimeter) の略でもある。

センチメートル

centimeter (cen-ti-me-ter) [sɛntəmɪ:tər] 「セントゥミートゥ」

長さの単位である。cm という記号を使う。1m の 100 分の 1 の単位である。cent-あるいは centi-という接頭語には 100 分の 1 という意味がある。1 セント (cent) は 1 ドル (dollar) の 100 分の 1 という意味になる。発音は「セントゥミートゥ」である。

センチメンタル

sentimental (sen-ti-men-tal) [sɛntəməntl] 「セントゥメントゥ」

感傷的などという意味である。a sentimental novel は涙っぽい小説という意味である。センチメンタルジャーニーという題名の歌がヒットしたが、これで感傷旅行という意味になるのかどうかは分からない。発音は「セントゥメントゥ」となる。

ソサイアティ

society (so-ci-e-ty) [səʃiəti] 「スサイウティ」

日本でも上流社会をハイ・ソサイアティと呼んでいる。ただし、頭はあいまい母音である。またアクセントは-ciにある。よって「スサイウティ」となる。

ソーラー

solar (so-lar) [sólər] 「ソウルゥ」

「太陽の」という意味であるが、これも日本語として定着した。ソーラー電池、ソーラーカーなどである。会社の名前にも使われている。ただし発音は注意する必要がある。まずアクセントは頭にあり、「オウ」という発音である。また、-lar はあいまい母音である。よって「ソウルゥ」となる。

タ行

ダイジェスト

digest (di-gest) [daídʒest] 「**ダ**イジェスト」

要約のことで、ニュースのダイジェスト版などと言う。発音は日本語とほぼ同じで、頭にアクセントを置いて「**ダ**イジェスト」となる。ただ、英語では、この単語は動詞としてもよく使われる。意味は「消化する」という意味になる。ただし、動詞の場合は [daídʒést] 「**ダイ**ジェスト」となって、アクセントの位置が後ろに来る。

ダイナマイト

dynamite (dy-na-mite) [daínəməít] 「**ダ**イヌマイト」

爆薬の一種であるが、日本語でもダイナマイトで通じる。ノーベル賞 (Nobel prize) を創設したノーベルが発明した。英語でも比喩的に、大きな驚きを起こす人やもののことを賞賛してこう呼ぶことがある。発音は日本語に近いが、-na-があいまい母音であるので「**ダ**イヌマイト」となる。

ダイナミズム

dynamism (dy-na-mism) [daínəmizəm] 「**ダ**イヌミズム」

「力強さ」あるいは「活動力」という意味である。経済評論家は「日本の経済はダイナミズムが足りない」などと表現する。しかし、日本式にダイナミズムと発音しても通じない。アクセントが頭にあり、-na-はあいまい母音である。よって発音は「**ダ**イヌミズム」となる。アメリカ通の経済学者が日本ではもてはやされて

いるが、英語の発音はめちやくちやなひとが多い。

ダイナミック

dynamic (dy-nam-ic) [daɪnæmɪk] 「ダイナミック」

日本では、「躍動的な」あるいは「力強い」という意味で使われる。「ダイナミックな泳ぎ」などと使われる。英語でも同様の意味で使われるが、専門用語では「力学的な」という意味で使われる。dynamics は力学である。発音は「ダイナミック」となる。

ダイニング

dining (din-ing) [daɪnɪŋ] 「ダイニング」

dine (食事をする) という動詞の ing 形であるが、「食事」という名詞となっている。英語でも食堂のことを a dining room という。鉄道の食堂車は a dining car である。日本では 2DK などという部屋割りを使う。DK は dining kitchen のイニシャルであるが、英語では eat-in kitchen あるいは kitchen dining room という。発音はアクセントを頭に置いて「ダイニング」となる。

タイヤ

tire (tire) [taɪər] 「タイヤ」

車のゴム製の車輪である。日本ではタイヤでそのまま通る。発音は「タイヤ」となる。

ダイヤモンド

diamond (di-a-mond) [daɪəmənd] 「ダイヤモンド」

誰でも欲しい宝石である。ただし、ひし形のことと言い、トランプのダイヤや、野球場の内野がひし形であることから野球場をダイヤモンド (the diamond) と呼ぶこともある。アクセントは頭にあり、残りはあいまい母音である。よって「ダイヤモンド」となる。最後の d は発音しなくともよいくらい弱い。

ダイヤル

dial (di-al) [dáiəl] 「**ダイウル**」

電話やラジオの目盛りのついた文字盤を言う。日本語でも「ダイヤルを回す」などと言う。英語では dial はダイヤルを回すという意味の動詞にもなる。発音は「**ダイウル**」となる。

ダウン

down (down) [daun] 「**ダウン**」

「下へ」という意味の副詞であるが、動詞「下がる」や名詞「下降」にもなる。日本語でも「人気**が**ダウンする」などと使う。また、わて毛やうぶ毛のことを **down** という。ダウンコートは、この意に由来する。発音は「**ダウン**」で、日本語とほぼ同じである。

ダウンサイジング

down sizing

ターキー

turkey (tur-key) [túrki] 「**トゥーキィ**」

七面鳥のことである。感謝祭やクリスマス (Christmas) に食べる。発音は **tur** があいまい母音でしかもアクセントが置かれる。よって「**トゥーキィ**」となる。ちなみに、日本語ではまったく違う表記となる国名のトルコも同じ単語である。トルコ経由で輸入されたことから、この名前がついた。

ダークホース

dark horse (dark horse) [dárk hó:rs] 「**ダーク ホース**」

競馬の穴馬のことである。これから転じて、実力は分からないが有力と思われる人のことをこう呼ぶことがある。発音は、日本語とほぼ同じであり「**ダーク ホース**」となる。

ダース

dozen (doz-en) [dʌzn] 「ダズン」

12 個を 1 組として数える単位である。どうして日本語では「ダース」と発音するのか分からない。英語では「ダズン」となる。1 ダースが 12 個集まるとグロス (gross [gróus]) となる。

タックル

tackle (tack-le) [tækl] 「タックル」

ラグビーなどのタックルである。はじめてこの単語を聞いたときには「ターコ」と聞こえた。米国では American football がさかんであるが、タックルは危険であるので、そのかわり背中にタッチすればタックルしたものとみなすルールがある。そこで友達どうしがプレーするときに”touch or tackle?”と聞いてくる。発音は頭にアクセントがあり、cat の a と同じ発音である。よって「タックル」となる。

タバコ

tabacco (ta-bac-co) [təbækou] 「トッバコウ」

頭はあいまい母音で、アクセントは-bac-にある。よって「トッバコウ」となる。

タブー

taboo (ta-boo) [təbú:] 「トッブー」

禁句のことであるが、タブーはすでに日本語として定着している。ただし、アクセントは-boo と o がふたつ重なるので、この位置にあり、頭があいまい母音であるから「トッブー」となる。これによく似た tattoo はいれずみのことである。日本語でもタツと呼ぶ。ただし、発音は「タツ」で後ろにアクセントがつく。発音記号では[tætú:]となる。

ダミー

dummy (dum-my) [dʌmi] [ダミィ]

マネキン人形や飾り人形のことである。腹話術の人形もこう言う。日本語では「ダミーに使う」というように、模造品やおとりという意味でよく使う。発音は日本語とほぼ同じで[ダミィ]となる。マネキンは mannequin [mænikən] という英語もある。

ターミナル

terminal (ter-mi-nal) [tɜrmənl] 「ト_ャームヌル」

末端という意味で、終着駅のことを指す。乗り換えができる総合駅や空港のことを指す。コンピュータ (computer) の端末のことも言う。アクセントが頭にあるが、あいまい母音がたくさん入っており、日本人には苦手の発音である。「ト_ャームヌル」となる。

ターミネーター

terminator (ter-mi-na-tor) [tɜ:rmnɛitər] 「ト_ャームネイツッ」

アーノルドシュワルツェネッガー (Arnold Schwarzenegger) 扮するロボット (robot) が未来から現代に暗殺にやってくる有名な映画のタイトルである。もとの語は terminate で「終結させる」という意味である。アクセントが頭にあり、あいまい母音である。よって発音は「ト_ャームネイツッ」となる。

タングステン

tungsten (tung-sten) [tʌŋstən] 「タ_ッグスツン」

元素 (W) の名前で、電球のフィラメント (filament) の材料として有名である。昔は、よくタングステン電球 (tungsten lamp) を使ったものである。アクセントは頭にあり、-sten はあいまい母音となる。よって「タ_ッグスツン」となる。ちなみに、この語の tung- の発音は舌の英語である tongue とまったく一緒である。

チキン

chicken (chick-en) [tʃɪkən] 「チケン」

にわとり（あるいはひよこ）という意味と鶏肉という意味がある。ケンタッキーフライドチキン (Kentucky fried chicken) は鶏肉のから揚げの店である。”I ate a chicken.“ “というと、「にわとりを一羽食べた」という意味になってしまいます。とり肉をという場合には ”I ate a piece of chicken.” と言う。発音は「チケン」となる。

チケット

ticket (tick-et) [tɪkət] 「ティックット」

切符や入場券を指す。日本語でもチケットと言う。アクセントは頭にあり、-et はあいまい母音である。よって「ティックット」となる。

チタン

titanium (ti-ta-ni-um) [taɪtəniəm] 「タイティニウム」

有名な元素 (Ti) である。チタニウムとも言う。ただし、英語の発音はまったく異なる。アクセントは-ta-にあり、-um はあいまい母音である。よって「タイティニウム」となる。ただし、英語でも長いと思われるのか、(tai) 「タイ」と省略して発音することもある。

チップ

tip (tip) [tɪp] 「ティップ」

心づけのことである。日本人にはなじみがないので苦勞する。ただしスペルは chip ではなく、tip である。発音は「ティップ」となる。

chip [tʃɪp] はかけらの意味で、野菜の小片なども言う。日本でもポテトチップス (potato chips) が有名である。

チャンネル

channel (chan-nel) [tʃænl] 「チャネル」

日本語ではラジオテレビのチャンネルとして定着している。英語では海峡や経路という意味がある。ただし、この意味では日本語では時々「キャネル」あるいは「カナル」という語を使う。発音は「チャネル」となって、日本語式発音とはかなり異なる。

チョコレート

chocolate (choc-o-late) [tʃɒkələt] 「チョコルト」

これに対応した日本語がない。子供でもチョコレートで通じる。ただし、英語の発音はまったく異なる。頭に強くアクセントを置く。また、-o-も-late もあいまい母音である。よって発音は「チョコルト」となる。

チンパンジー

chimpanzee (chim-pan-zee) [tʃɪmpænzɪ:] 「チムパンジー」

黒猩猩というが、チンパンジーが日本語として定着している。ただし、アクセントは-ee の法則にしたがって、-zee の位置にある。よって「チムパンジー」となる。

ツアー

tour (tour) [tuə] 「トゥ」

旅行のことであるが、日本語でもツアーで定着している。a bus tour はバス旅行のことである。日本語でもバスツアーと呼ぶ。発音は「トゥ」となる。tourist [tuərist] 「トゥリスト」は旅行者のことである。

ツイスト

twist (twist) [twɪst] 「ツイスト」

日本では一世を風靡したダンス(dance)として知られている。もともとは「ひねり」とか「ねじり」という意味で、「ねじる」という動詞としても使われる。腰をひねるダンスであることから、この名がついた。日本語では「ツ」を発音する時「ウ」という母音を入れてしまうが、英語では子音であるのでツは軽く発音し「ッウィスト」となる。

ツイン

twin (twin) [twín] 「ッウイン」

双子のひとりと言う。双子は twins と複数形になる。ただし、日本語ではホテルの部屋のツインルーム (a twin room) の方がなじみがあるかもしれない。発音はツイストと同様にツは軽く発音し「ッウイン」となる。

ツートンカラー

two-tone (two-tone) [tù: tóun] 「ツウ トウン」

「2色(調)の」という意味である。日本語ではカラー (color) まで入れるが、英語では必要ない。発音は、日本語とほぼ同じであるが、「トウン」のようにウを入れる。よって「ツウ トウン」となる。

ツナ

tuna (tu-na) [tú:nə] 「ツーナッ」

まぐろのことである。日本でもツナ缶をよく食べる。アクセントは頭にあり、-na はあいまい母音であるから「ツーナッ」となる。アメリカに言って、「ツナーサンドイッチ」(tuna sandwich) と注文しても理解してもらえない。

ツベルクリン

tuberculin (tu-ber-cu-lin) [tjubórkjələn] 「テュブウクルン」

結核の検査をする注射液。この反応をツベルクリン反応と言う。陽性のひとは赤くなる。かつては小学生は、必ず、この注射検査を行った。発音は「テュブウクルゥン」となる。実は、結核のことを英語では tuberculosis [tʃubərkjələʊsəs] 「テュブウクロウスゥス」と言う。

ツモロー

tomorrow (to-mor-row) [təməˈrou] 「トウモロー」

明日の意味。アクセントは-mor-にあり、頭はあいまい母音である。よって「トウモロー」となる。

ツール

tool (tool) [tu:l] 「ツール」

道具という意味であるが、コンピュータなどで「日本語ツール」などのようにプログラムの付属品のことをこう呼ぶ。発音は日本語とほぼ同様であり「ツール」となる。最後のlは弱く発音する。

ツンドラ

tundra (tun-dra) [tʌndrə] 「タンドル」

ロシアにある永久凍土地帯のことで、小学校の地理で習う。ただし、英語の発音はまったく異なり「タンドル」となる。

ディナー

dinner (din-ner) [dɪnər] 「ディヌ」

正餐のことであるが、一日で主要な食事、一般には夕食のことを言う。晩餐会は a dinner party という。-ner はあいまい母音でありアクセントは頭にある。よって「ディヌ」となる。

ディンクス

dinks (dinks) [dɪŋks] 「ディンクス」

子供を持たない共稼ぎの夫婦のことである。double income no

kids の略である。日本でも、ディンクスが定着した。少子化問題の元凶とも言える。発音は「ディンクス」となる。

テキスト

text (text) [tékst] 「テクスト」

本文のことであるが、日本語では textbook に対応した教科書という意味で使われる。英語でも教材という意味で使われる。発音はキと発音しない。頭にアクセントがあり「テクスト」となる。

テクニシャン

technician (tech-ni-cian) [tekniʃən] 「テクニシユン」

技術の専門家である。大学や研究所などで研究者をサポートする専門家のことを呼ぶ。発音は「テクニシユン」となる。このもととなったテクニック (technique) は発音に注意が必要である。アクセントは後ろにあり、「テクニーク」となる。発音記号で書けば [tekni:k] となる。

デコレーション

decoration (dec-o-ra-tion) [dèkərəitʃən] 「デクレイシユン」

装飾、あるいは飾りつけという意味である。クリスマスの飾りつけを Christmas decorations と言う。筆者の世代は、クリスマスにデコレーションケーキを食べるのが楽しみであったが、これは和製英語である。-tion の規則にしたがって、アクセントは-raに置かれる。-o-はあいまい母音であるので、コと発音しない。発音は「デクレイシユン」となる。

デザイン

design (de-sign) [dizáin] 「ディザイン」

図案という意味であるが、デザインが日本語で一般に使われる。英語では「図案をつくる」という動詞にもなる。発音は「ディザイ

ン」となる。図案をつくるひとは、日本語でもデザイナーという
が英語でも designer [dizáinər] 「ディザイヌ」 と言う。

デザート

dessert (des-sert) [dizə:rt] [ディズウト]

この語に相当する日本語はないが、食後のデザートで意味は通
る。しかし、日本式発音ではまったく通じない。アクセントは-sert
にあり、あいまい母音である。よって、発音は[ディズウト]となる。
ちなみに、砂漠のことをデザートというが、こちらは desert と書いて、
発音は[dézərt]のようにアクセントは頭に来る。発音は「デザート」
となる。

デジタル

digital (dig-i-tal) [dídʒitl] 「ディジタル」

数字で表示する方法である。digit [dídʒit] はアラビア数字、つ
まり 0 から 9 までの数字である。つまりこれで表示する方式をデ
ジタルと言う。アナログの反意語となっている。発音は「ディジ
トル」となる。

デート

date (date) [deit] 「ディイト」

日本では、恋人と会うデートの意味で使われる。英語でも同様
の意味はあるが、普通は「日付」という意味になる。発音は「デ
イト」となる。

テトラポッド

tetrapod (tet-ra-pod) [tétrəpəd] 「テトルパド」

護岸用のコンクリート製ブロックのことである。tetra-は4つの
という意味をもった接頭語であり、正三角形が4つからなる立体
の形状をしている。商標名である。発音は「テトルパド」となる。

デパート

depart (depart) [dipá:rt] 「ディパート」

「出発する」という動詞である。発音は「ディパート」となる。日本語のデパートは a department store の意味の略である。

department (de-part-ment) [dipá:rtmənt] 「ディパートメント」は部門や課という意味である。

米国のエネルギー省は Department of Energy と言う。日本や英国の省は Ministry である。store がついてはじめて日本語のデパートの意味になる。

デビュー

debut (de-but) [debú:] 「デブー」

初舞台のことであるが、日本語ではデビューで通る。もともとはフランス語であり、発音に注意する。アクセントは後ろにあり「デブー」となる。

デフォルト

default (de-fault) [difó:lt] 「ディフォールト」

コンピュータなどのプログラムで、すでに設定されている状態を指す。a default value は初期値である。英語では、債務不履行のこともこう言う。発音は「ディフォールト」となる。

デフレーション

deflation (de-fla-tion) [difléiʃən] 「ディフレイション」

品物の値段が安くなることである。日本ではデフレと略して言う。もともと deflation には「空気を抜く」あるいは「収縮」という意味がある。-tion の規則にしたがって-fla-にアクセントがあり「ディフレイション」となる。

デベロッパー

developer (de-vel-op-er) [divɛləpər] 「ディヴェルプ^ㇿ」

宅地造成業者のことをこう呼ぶ。英語では、写真の現像液の意味もある。develop [divɛləp] は「発達する」「開発する」という意味がある。developing country は開発途上国という意味である。underdeveloped country と呼ぶ場合もある。

develop には「現像する」という意味もあり、日本では D. P. E という看板を立てて、development, printing, enlargement つまり「現像、焼付け、拡大」という意味で使っているが、これは和製英語である。

developer の発音は「ディヴェルプ^ㇿ」となる。アクセントの位置に注意する必要がある。develop は「ディヴェルプ」である。

テーマ (独)

theme (theme) [θi:m] 「スイーム」

主題という意味であるが、テーマが日本語として定着している。ただし、これはドイツ語読みであり、英語では「スイーム」となる。th 音なので、歯で舌をこするようにしてスと発音する。

デモ

demo (de-mo) [di:mou] 「ディーモウ」

デモンストレーション (demonstration) を略したもので、実演販売用の新製品である。デモ製品のデモである。また、デモ行進、のデモという意味でも使う。米国の民主党員 (democrat) のこともこう言う。

デモンストレーション

demonstration (dem-on-stra-tion) [demənstreɪʃən] 「デムンスト^(ㇿ)レイ
シュン」

論証という意味もあるが、実演説明という意味で使う場合が多

い。また、デモ行進やデモ隊のデモは、この略であり、この場合は示威行動という意味になる。-tion の規則にしたがって、アクセントはこの前の音節になる。-on- はあいまい母音であるので発音は「デムンスト^(ウ)レイション」となる。

デリカシー

delicacy (del-i-ca-cy) [délíkəsi] 「デリクゥスィ」

日本語でも「デリカシーに欠ける」などと言う。繊細さあるいは優美さという意味である。発音は頭にアクセントがあり、-ca- はあいまい母音である。よって「デリクゥスィ」となる。

デリケート

delicate (del-i-cate) [délíkət] 「デリクト」

「繊細な」あるいは「敏感な」という意味の形容詞で、日本語でも同様の意味で使われるが、日本語ではデリケートな人というように名詞として使う。英語の発音はかなり異なる。アクセントは頭にあり、-cate はあいまい母音である。よって「デリクト」となる。

テレビ

television (tel-e-vi-sion) [téləvɪzən] 「テルビジョン」

日本語でもテレビジョンとも言う。アクセントは頭にあり、あいまい母音も入っている。発音は「テルビジョン」となる。

テレフォン

telephone (tel-e-phone) [téləfoun] 「テルフォン」

電話である。この語もアクセントは頭にあり、「テルフォン」となる。

テロ(和)

テロリズム (terrorism) を略したもので、和製英語である。テロ行為やテロ犯罪などと言う。

テロリスト

terrorist (ter-ror-ist) [térərist] 「テルリスト」

テロ行為を行うひとのことであり、日本語でテロリストと普通に言う。発音は「テルリスト」となる。

ドキュメント

document (doc-u-ment) [dákjument] 「ダキュメン(ト)」

記録や証拠、あるいは公式文書のことを言う。アクセントは頭にあり-ment はあいまい母音である。よって「ダキュメン(ト)」と発音する。類語の**ドキュメンタリー** (documentary)は記録映画のことである。発音は「ダキュメントゥリ」とアクセントの位置が-ment-に移る。発音記号では[dàkjumentəri]となる。

ドッジボール

dodge ball (dodge ball) [dádʒ bò:l] 「ダッジ ボール」

日本の小学生がよくプレーするが、アメリカではあまり見たことがない。dodge は「素早く身をかかわす」という意味である。発音は「ダッジ ボール」となる。

トースト

toast (toast) [tóust] 「トウスト」

パンを焼いたもの。パンやベーコンを焼くという動詞にもなる。また、乾杯のときに "Toast!" と発声する。発音は「トウスト」となる。パンを焼くトースターは toaster [tóustər] 「トウスツ」である。

ドーナツ

doughnut (dough-nut) [dóunàt] 「ドゥナト」

小麦粉からつくるお菓子の一種。リング状のものだけではないが、リング状のことをドーナツ状という。環状のものや、自動車のタイヤをこう言うこともある。発音は「ドゥナ_ト」となる。

トーナメント

tournament (tour-na-ment) [tə:rnəmənt] 「トウヌムント」

勝ち抜き試合のことであるが、日本語でもトーナメントと言う。発音は「トウヌムント」となる。リーグ戦は a league game と言う。

ドライ

dry (dry) [drai] 「ド_(ウ)ライ」

「乾いた」という形容詞であるが、日本語では「冷淡な」あるいは「さっぱりした」という意味で使われる。酒の辛口という意味もある。洗濯屋をクリーニング店というのは和製英語であるが、ドライクリーニング(dry cleaning)は英語である。発音は、r の音であるので「ド_(ウ)ライ」となる。

トライアングル

triangle (tri-an-gle) [traɪæŋgl] 「_トライアングル」

三角形のかたちをした楽器である。しかし、もともと triangle は三角形のことを指す。発音は「_トライアングル」となる。

トラディション

tradition (tra-di-tion) [trədiʃən] 「トル_ッデ_ィション」

伝統あるいは慣習という意味である。日本では、traditional を略したトラッドを使い、衣服に対して、この名称を与える。例えば、横浜の伝統的な衣装を「ハマトラ」と略して呼んでいるが、これは Yokohama traditional の略である。発音は「トル_ッデ_ィション」となる。

ドラマチック

dramatic (dra-mat-ic) [drəmætɪk] 「ドルマティック」

日本語では、ドラマ・チックと分ける傾向にあるが、英語では -ma- にアクセントがある。また、最初の dra- はあいまい母音である。よって、dra- で弱く切って、-matic の最初を強く発音する。「ドルマティック」となる。

トラブル

trouble (trou-ble) [trʌbl] 「ト(ウ)ラブル」

「厄介事」あるいは「厄介者」という意味である。揉め事を起こす人をトラブルメーカーというが、これは英語で a troublemaker となる。発音は「ト(ウ)ラブル」となる。

トラベル

travel (trav-el) [trævl] 「ト(ウ)ラァヴル」

旅行という意味である。旅行代理店は travel agency という。旅行者小切手をトラベラーズチェックというが、traveler's check という英語である。発音は「ト(ウ)ラァヴル」となる。

トランス

transformer (trans-form-er) [trænsfɔːrmər] 「トラァンスフォーム」

変圧器のことであるが、日本語独特の英単語の略である。正式には transformer となる。発音は「トラァンスフォーム」となる。

トランプ

trump (trump) [trʌmp] 「トラムプ」

日本ではカードゲームのことであるが、英語では card となる。trump は切り札という意味である。発音は「トラムプ」となる。

トランペット

trumpet (trump-et) [trʌmpət] 「ト_ラム_プト」

楽器のらっぱである。発音は-etがあいまい母音であるから「ト_ラム_プト」となる。

トルコ

Turkey (Tur-key) [tʉ:rkɪ] 「ト_ウキ」

中近東に位置する国である。発音は「ト_ウキ」となる。七面鳥がトルコ経由で輸入されたことから、英語では七面鳥のことをturkeyと呼ぶ。

トレードマーク

trademark (trade-mark) [treɪdmɑ:k] 「ト_ウレイドマ_アク」

商標のことである。trade [treɪd] は商業や商売という意味である。発音は「ト_ウレイドマ_アク」となる。

トレンドイ

trendy (trend-y) [trɛndɪ] 「ト_ウレン_デイ」

「最新流行の」という意味である。日本では、トレンドイドラマなどと言う。発音は「ト_ウレン_デイ」となる。

ちなみに、trendは傾向という意味の英語である。「金利が上昇するトレンドにある」などと日本語でも使う。

トラック

truck (truck) [trʌk] 「ト_ラク」

小さい運搬車のことであるが、これに対応した英語のtruckにはトラックという意味もある。発音は「ト_ラク」となる。

トンネル

tunnel (tun-nel) [tʉnəl] 「タ_ヌル」

日本語では坑道というが、トンネルで通用する。アクセントは

頭にあり、-nel はあいまい母音であるので、発音は「タヌル」となる。

ナ行

ナイロン

nylon (ny-lon) [náilɒn] 「**ナイ**ルン」

米国で発明された合成繊維で、絹のように軽く丈夫な繊維である。ナイロンで通じる。発音は「**ナイ**ルン」となる。

ナース

nurse (nurse) [nɜːrs] 「**ヌ**ース」

看護婦も最近ではナースと呼ぶことが多い。看護婦詰所はナースステーション (nurse station) と呼ばれる。この単語はあいまい母音を強く読む。違和感があろうが「**ヌ**ース」という発音が正しい。託児所のナーサリーは nursery で発音記号は [nɜːrsəri] であり、「**ヌ**ースリ」となる。

ナチス

Nazi (Na-zi) [ná:tsi] 「**ナー**ツィ」

悪名高きナチス。ドイツの国家主義者である。ヒトラー (Hitler) が指導した。発音は「**ナー**ツィ」となる。

ナチュラル

natural (nat-ur-al) [nætʃərl] 「**ナ**チュラル」

「自然の」あるいは「天性の」という意味である。この題名の野球映画がある。小学校の音楽では、半音上げたり下げたりした音をもとにもどす記号 (♮) である。発音は「**ナ**チュラル」となる。

ナトリウム (独)

sodium (so-di-um) [s'ɔ:diəm] 「ソウディウム」

金属元素 (Na) である。ナトリウムはドイツ語 (Natrium) である。英語では sodium である。アクセントは頭にあり、「ソウディウム」となる。

ナノ

nano (nano) [nænə] 「ナ_ァヌ」

10 億分の 1 に対応した接頭語。理系では 10^9 と書いたほうがなじみがある。nanometer [nænəmi:tə] は 10^9 m (10 億分の 1 メートル) という単位である。原子の大きさの 10 倍程度。この程度の大きさで機能を制御しようというのが、いまはやりのナノテクノロジー (nanotechnology) である。21 世紀のキーテクノロジー (key technology) と言われているが、正直何をねらっているかが不明である。米国が言い出したので、日本が真似たという昔から変わらない構図である。

ナビゲーション

navigation (nav-i-ga-tion) [nævigeiʃən] 「ナ_ァヴィゲイション」

もともとは航海という意味である。いまはカーナビが全盛の時代であり、行路補助システムという意味で使われる。発音は「ナ_ァヴィゲイション」となる。

ナプキン

napkin (nap-kin) [næpkin] 「ナ_ァプキン」

小さなテーブル用のタオルである。いまは紙製が多い。発音は「ナ_ァプキン」となる。

ナレーション

narration (nar-ra-tion) [nəreɪʃən] 「ヌ_レイション」

語りのことである。テレビドラマなどでの語りをナレーションと言う。**-tion** の規則にしたがって、**-ra**にアクセントがある。発音は「ヌレイション」となる。

ナレーター

narrator (nar-ra-tor) [nə'reɪtər] 「ヌレイター」

ナレーションを話す人のことである。日本語でも番組のナレーターという。発音は「ヌレイター」となる。

ナンセンス

nonsense (non-sense) [nɑnsəns] 「ナンスンズ」

「無意味」あるいは「ばかげたこと」という意味であり、同じ意味で日本語でも使われる。発音は「ナンスンズ」となる。

ナンバー

number (num-ber) [nʌmbər] 「ナムブアー」

数や番号のことである。アクセントは頭にあり、**-ber** はあいまい母音となる。よって「ナムブアー」となる。

ニアミス

near miss (near miss) [niə mɪs] 「ニウァ ミス」

航空機が異常接近することである。英語でも **near miss** と言う。発音は「ニウァ ミス」となる。

ニクロム

Nichrome (Ni-chrome) [naɪkrəʊm] 「ナイクロウム」

ニッケル (nickel) とクロム(chrome)の合金である。電熱器などの発熱用電線に使われる。クロムは正式には **chromium** [krəʊmiəm]となる。発音は「ナイクロウム」となる。

ニコチン

nicotine (nic-o-tine) [níkətì:n] 「ニクティーン」

たばこの中に含まれる化学物質で、禁断症状を引き起こす。発音は「ニクティーン」となる。

ニックネーム

nickname (nick-name) [níknèim] 「ニクネイム」

愛称のことで、日本語でもニックネームで通る。発音はニック・ネームと切らずに「ニクネイム」となる。

ニッケル

nickle (nick-el) [níkəl] 「ニクル」

金属元素 (Ni) である。米国では、5セント硬貨 (5 cent coin) がニッケルでできているので、nickel の愛称で呼ばれている。アクセントは頭にあり、-el はあいまい母音である。よって、「ニクル」となる。

ニヒリズム

nihilism (ni-hil-ism) [náiəlizm] 「ナイウリズム」

虚無主義のことで、日本でもニヒリズムと言う。発音は日本語と大きく異なり「ナイウリズム」となる。日本では「ニヒルなひと」をニヒリストと言うが、こちらは nihilist [náiəlist] 「ナイウリスト」となる。ニヒルという英単語はない。あえて言えば nihilistic [náiəlístik] 「ナイウリストティック」で「ニヒルな」という意味となる。

ニュアンス

nuance (nu-ance) [nú:ɑ:ns] 「ヌーアーンズ」

微妙な違いのことで、日本語でも「ニュアンスの違い」などと言う。もともとはフランス語である。アクセントは頭にあり、「ヌーアーンズ」となる。

ニューズペーパー

newspaper (news-pa-per) [nú:zpeipər] 「ヌーズペイプァ」

新聞のことであるが、ニュース (news) もペーパー (paper) も日本語となっている。News は「ヌーズ」と発音する。頭にアクセントがあり、最後の -per があいまい母音であるから、通して読むと「ヌーズペイプァ」となる。

ニュートン

Newton (New-ton) [nú:tən] 「ヌーツァン」

科学界の巨人である。科学雑誌の名前にもなっている。頭にアクセントがあり、-ton はあいまい母音であるから「ヌーツァン」となる。

ニュートラル

neutral (neu-tral) [nú:trɪ] 「ヌートルル」

日本語では、自動車のギヤ (gear) のニュートラルを思い浮かべるが、もともとの英語では「中立の」という意味となる。発音は「ヌートルル」となる。

ネオン

neon (ne-on) [ní:ən] 「ニーウン」

もともとは不活性ガスの元素 (Ne) の名前であるが、日本ではネオンサイン (neon sign) で有名である。これはガラス管の中にネオンガスと電離物質が入っていて、電流を流すと光がでるようになっている。

ネーチャー

nature (na-ture) [néitʃər] 「ネイチュァ」

自然という意味である。もともと権威ある科学ジャーナルの名

前でもある。頭にアクセントがあり、-ture はあいまい母音である。よって、「ネイチュゥ」となる。

ネットワーク

network (net-work) [nétwə:rk] 「ネットウゥク」

ネット（網）状組織のことであるが、現在では「放送網」の意味でよく使われる。ネットワークというテレビ局を舞台にしたが映画が日本でもヒットした。

アメリカの三大放送網は the three big American networks と言う。ABC, CBS, NBC の3つであるが、今では有線放送(cable TV)のCNNが優勢を誇っている。発音は「ネットウゥク」となる。

ネガティブ

negative (neg-a-tive) [négətiv] 「ネグティヴ」

「否定的な」という意味であるが、反意語はポジティブ(positive)である。消極的という意味もある。写真のネガ（つまり陰画）も、この単語である。頭にアクセントにあり、-a-はあいまい母音である。よって「ネグティヴ」となる。「ガ」と強く発音しない。

ネクタイ

necktie (neck-tie) [néktai] 「ネクタイ」

日本でも普通にネクタイと言う。首(neck)に結ぶもの(tie)がもともとの意味である。英語の発音も、ほぼ日本式に近く「ネクタイ」となる。ただし、海外では a necktie とは言わずに、a tie と言う。蝶ネクタイは a bow [bóu] tie と言う。

ネゴシエーター

negotiator (ne-go-ti-a-tor) [nigòufiéitə] 「ニゴウシエイツ」

映画のタイトルにもなった。交渉人という意味であるが、米国

では人質 (hostage) をとった犯人と交渉する警官のことを指す。このもとの語は *negotiate* は交渉するという意味である。アクセントは *-a-* にあり、*-tor* はあいまい母音となる。よって「ニゴウシエィツ」となる。

ネックレス

necklace neck-lace [nékləs] 「ネクルス」

首飾りのことである。首(neck)にかけるレースの紐(lace)という意味である。ただし、*-lace* はあいまい母音であるので、発音は「ネクルス」となる。

ネービー

navy (na-vy) [néivi] 「ネィヴィ」

海軍のことである。濃紺のことをネービーブルー (navy blue) というが、これは英国海軍の制服の色に由来している。発音は「ネィヴィ」となる。

ノー

no (no) [nú] 「ノウ」

もちろん「いいえ」という否定の意味の名詞、形容詞、副詞である。日本語では、ノーという接頭語をつけて英語をつくる傾向にあるが、和製英語が多い。例を挙げると

ノーアイロン wash-and-wear

ノーアウト with no outs

ノーカウント invalid

ノーカット uncut

ノースリーブ sleeveless

ノータッチ cf. ノータッチエース clean ace

ノーネクタイ without a tie

ノウハウ

know-how (know-how) [nóu hàu] 「ノウハウ」

専門的な技能であるが、文章では簡単に伝えられない技術のことを言う。how(どうすればよいか)を know(知っている)という意味あいであろう。発音は日本語とほぼ同様に「ノウハウ」となる。

ノスタルジア

nostalgia (nos-tal-gi-a) [nastældzə] 「ナスタールジュ」

「郷愁」や「追憶」という意味である。歌や小説のタイトルに使われる。発音は「ナスタールジュ」となる。

ノック

knock (knock) [nák] 「ナック」

「戸をたたく」という意味であるが、日本語でも「ドアをノックする」と普通に言う。この場合は自動詞で“ He knocked at the front door.”のように使う。「強打する」という意味でも使われるが、この場合は他動詞となる。よって“The rock knocked my head.”のように使う。発音は「ナック」となる。

ノックアウト

knockout (knock-out) [nákaut] 「ナカウト」

ボクシングで相手をたたきのめすことを言う。これを略してKOとも言う。発音は「ナカウト」となる。

ノベル

novel (nov-el) [návl] 「ナブル」

小説という意味である。日本でも「青春ノベルシリーズ」などと使われる。しかし、発音はローマ字読みのノベルではなく「ナブル」となる。また英語では、novel は「新奇的」という形容詞でよく使われる。

ノーベル

Nobel (No-bel) [noubél] 「ノウベル」

ダイナマイトの発明者で、ノーベル賞 (Nobel prize) を創設したことで有名である。「オウ」と発音することと、アクセントが後ろにあることに注意する。よって発音は「ノウベル」となる。

ノーマル

normal (nor-mal) [nó:rməl] 「ノーマル」

「正常の」あるいは「普通の」という意味である。反意語のアブノーマル (abnormal) も日本語である。アクセントは頭にあり、-mal はあいまい母音である。よって「ノーマル」となる。abnormal は、最初の ab-が[æb]となって、「アェブノーマル」となる。

ノミネート

nominate (nom-i-nate) [námənèit] 「ナムネイト」

「推薦する」「指名する」という動詞であるが、日本では賞などの候補として推薦されることを言う。発音は「ナムネイト」となる。

ノンフィクション

nonfiction (non-fic-tion) [nənfikʃən] 「ノンフィクション」

実話のことである。作り話 (fiction) ではないという意味で、伝記、歴史、随筆などがこれにあたる。発音は「ノンフィクション」となる。

八行

バイオ

いまはやりの科学分野であるが、bio-は「生命の」あるいは「生物の」という接頭語で使われる。生物学 (biology) の略として使うこともあるが、一般的ではない。日本では biotechnology (生物工学) を略して、こう呼ぶようになったと思われる。

バイオテクノロジー

biotechnology (bio-tech-nol-o-gy) [bàiəteknólədzj] 「バイウテクナルジィ」

生物工学である。生物的功能を科学的に解明し、医療、化学産業や環境に役立てる学問の総称であるが、現在では、意味はさらに広がっており、生体に関する学問の総称となっている。21世紀の重要な科学のテーマとされている。ただし、倫理面からの非難もある。発音は「バイウテクナルジィ」となる。

バイオリズム

biorhythm (bio-rhythm) [bàiəriðəm] 「バイウリズム」

人体の感情、知性、体力の周期のことを言う。それぞれの一定のリズムがあり、その高低で体調が測られるということで、一時人気を集めた。今でもゲームセンターにはバイオリズムを測る機械が置いてある。発音は「バイウリズム」となる。アクセントを置く「リ」が「r」の音であるが、うまい具合に、その前があいまい母音で「ウ」という発音なので、カタカナ表記のように読めば正しい発音となる。ただし、-rhythm は “ð” という音であるので、

舌で上の歯の下をこするように発音する。

バイオリン

violin (vi-o-lin) [vàiəlín] 「ヴァイオリン」

誰でもが知っている楽器の名前であるが、発音には注意を要する。アクセントは -lin にあり、-o- はあいまい母音である。よって「ヴァイオリン」となる。

バイキング

Viking (Vi-king) [váiking] 「ヴァイキング」

日本では、食べ放題方式の立食をバイキング料理というが、アメリカでは buffet [bʌfɛi] 「ブフェイ」と言う。smorgasbord という場合もあるが、buffet で通る。ただし buffet は日本式に発音するとビュッフエとなって、列車食堂という意味になる。Viking は海賊のことであり、発音は日本語に近く「ヴァイキング」となる。

ハイジャック

hijack (hi-jack) [háidzæk] 「ハイジャック」

飛行機などの乗り物に乗っ取ることを言う。犯人をハイジャッカー (hijacker) という。発音は「ハイジャック」となる。

ハイジャンプ

high jump

ハイセンス (和)

センス (sense: 感覚、良識) が良いという意味であるが、和製英語である。あえて訳せば a good taste となる。

ハイソ (和)

ハイソサイアティ (high society) を日本語式に勝手に略した和

製英語。実は、high society という英語はない。society 自体で社交界という意味があり、high をつける必要はないのである。

バイタリティ

vitality (vi-tal-i-ty) [vaitælɔti] 「ヴァイタルティ」

活力や生命力のことである。日本語でもバイタリティにあふれているなどと言う。-ity の法則にしたがって、アクセントは-tal- にあり、発音は「ヴァイタルティ」となる。

ハイテク

high tech

パイナップル

pineapple (pine-ap-ple) [paɪnæpl] 「パイナップル」

パイナップルである。pine は松、apple はりんごで、松かさのかたちをしたりんごというのがもととなっている。ただし、日本式に「ナ」にアクセントを置くと通じない。また「ナップ」のように撥音にしないことも重要である。頭にアクセントを置いて「パイナップル」となる。

バイパス

bypass (by-pass) [baɪpæs] 「バイパス」

迂回路のことである。日本語でも普通にバイパスと言う。ただし、アクセントは頭にあり「バイパス」となる。

ハイビジョン(和)

高品位テレビ方式のことを言うが、これは和製英語である。英語では high-definition television system とする。この頭文字をとって

HDTV と呼ぶ場合もある。

ハイビスカス

hibiscus (hi-bis-cus) [haibískəs] 「ハイビスクス」

有名な米国ハワイ州の花である。発音は「ハイビスクス」となる。

ハイピッチ (和)

ピッチ (pitch) とハイ (high) を勝手に合成した和製英語。日本語で早歩きのことを「ピッチが速い」などというが、この連想でつくったものと思われる。あえて英語で言えば *at a fast pace* が正しい。

ハイヒール

high heels () [] 「」

ハイブリッド

hybrid (hy-brid) [háibrəd] 「ハイブルド」

異種混合のという意味である。ハイブリッド米とは、異種の混合を人工的に行い、寒さや害虫への耐性を強くした米のことである。発音は「ハイブルド」となる。

バイプレーヤー (和)

プレーヤー (player) (俳優や選手) とバイ (bye) (二の次のという意味) の単語を勝手にくっつけた和製英語である。英語にあえて訳せば *a supporting actor* となる。

バイブル

Bible (Bi-ble) [baíbl] 「バイブウ」

the Bible で聖書となる。大事な本のことを比喩的にバイブルということもある。発音は「バイブウ」となる。

ハイライト

highlight (high-light) [háilàit] 「ハイライト」

もっとも明るい場所のことを言うが、比喩的に顕著なできごとや圧巻のことをこう言う。今週のハイライトなどと使う。父が昔愛飲したタバコの銘柄である。発音は「ハイライト」となる。

バイリンガル

bilingual

ハイレグ

high-leg-cut

パイロット

pilot

ハウス

house

パウダー

powder

バウンド

bounce cf. bound

バクテリア

bacteria [bæktíəriə]

バザー (ル)

bazaar [bəzá:r]

慈善事業の販売

パジャマ

pajama (pa-ja-ma) [pədʒá:mə] 「**パジャーム**」

西洋寝巻きのことであるが、普通にパジャマと言う。アメリカの子供番組で **Bananas in Pajamas** というパジャマと来たバナナの子の双子の話があるが、この両者の発音とも日本人には難しい。

パジャマという意味で使うときは **pajamas** [pədʒá:məz] と複数形になる。あたまの **pa-**があいまい母音で、アクセントは **-ja-**にあり、少し伸ばしぎみで発音する。よって「**パジャーム**」となる。

バスケット

basket

バスケットボール

basketball

パスタ

pasta (pas-ta) [pá:stə] 「**パーストゥ**」

イタリア料理でマカロニやスパゲッティの総称である。発音は頭を「パー」と伸ばして「**パーストゥ**」となる。

パステル

pastel

パスポート

passport

パスボール

passed ball

パズル
puzzle

パーソナル

personal (per-son-al) [pə:rsənəl] 「プ^ァースヌル」

パソコンはパーソナル・コンピュータ (personal computer) の略である。個人用のコンピュータという意味である。アクセントは頭にあり、あいまい母音である。よって、発音は「プ^ァースヌル」となる。このもとになる英語は person で「人」という意味である。発音記号は[pə:rsən]であり、「プ^ァースン」となる。

バタフライ

butterfly butterfly stroke

パターン

pattern (pat-tern) [pætərn] 「パ^ツゥン」

模範や図柄という意味で、日本語となっている。アクセントは頭にあり、-tern はあいまい母音である。よって発音は「パ^ツゥン」となる。

バチカン

Vatican
the Vatican City

ハッカー

hacker (hack-er) [hækər] 「ハ^ァクウ^ッ」

他人のコンピュータシステムへの不法侵入者。

バックギア (和)

車のギアを後退にすることを「バックギアに入れる」というが

和製英語である。英語では reverse (gear) と言う。その証拠に車のギアではちゃんと R となっている。

バックミラー (和)

自動車の後方確認用ミラーのことであるが、これは和製英語である。正しくは、rearview mirror と言う。

パッケージ

package (pack-age) [pækɪdʒ] 「パ^ァキジ

包みや包装紙のことである。ひとまとまりの単位のこともパッケージと言う。例えば、パック旅行とは package tour のことである。

パッシングショット

passing shot

ハッスル

hustle (hus-tle) [hʌsl] 「ハスル」

元気はつらつという意味であるが、英語では動詞として「ぐいぐい押す」という意味でも使われる。発音は「ハスル」となる。「ハッス」のように撥音とならないように注意する。

ハッブル

Hubble

パテント

patent (pa-tent) [pætnt] 「パ^ァッ^ァ」

特許のことである。アクセントは頭にあり、cat と同じ音である。よって発音は「パ^ァッ^ァ」である。

パート (和)

臨時雇いのことを言う。パート従業員募集などという張り紙が出されている。a part-timer の頭の部分だけ取り出したもの。

英語の part には部分という意味があり、日本語でもその意味で使われる。

ハードボイルド

hard-boiled (hard-boiled) [hɑ:rd bɔild]

硬くゆでたという意味である。しかし、ハードボイルドといえは「非情な」あるいは「タフな」という意味で日米両方で使われる。ハードボイルド小説は硬派でタフな主人公が活躍する小説である。発音は「ハーウドボイルド」となる。

パトロール

patrol (pat-rol) [pətrɔul] 「プトロウル」

巡回という意味である。警察のパトロールという。パトカーはパトロールカー (patrol car) の略であるが、これは和製英語である。英語では a police car と言う。A patrol car は高速道路などの巡回車のことである。Pat-はあいまい母音であり、アクセントは後ろにあるので発音は「プトロウル」となる。

バナナ

banana (banana) [bənænə] 「ブネェーヌ」

日本語では平板に発音されるが、英語では真ん中の-nan-にアクセントを置く。また、頭と最後の a は「あいまい母音」であるので「ブネェーヌ」となる。日本人には少し発音が難しい。

パピルス

papyrus (pa-py-rus) [pəpaɪrəs] 「フパイルゥス」

もともとはナイル川に生育する葦のことであるが、これを原料にして得られる古代エジプトの紙が有名である。Paper の語源であ

る。しかし発音は日本語とはまったく違う。頭があいまい母音でアクセントは-py-にある。さらに-rus もあいまい母音である。よって「**パイル_ッス**」となる。

パラグラフ

paragraph (par-a-graph) [pærəgræf] 「**パ_ルグラ_フ**」

文章の段落や節のことで、日本語でもパラグラフと言う。アクセントは頭にあり、-a-があいまい母音となる。よって「**パ_ルグラ_フ**」となる。

パラソル

parasol (par-a-sol) [pærəsɔ:l] 「**パ_ァル_ッソー (ル)**」

かさのことであるが、umbrellaが雨傘に対して、parasolは日傘である。ただし、ビーチパラソルはbeach umbrellaという。アクセントが頭にあり、-a-があいまい母音である。よって「**パ_ァル_ッソー (ル)**」となる。

パラドックス

paradox (par-a-dox) [pærədɒks] 「**パ_ァル_ダクス**」

逆説という意味である。アキレスと亀のパラドックスは有名である。発音は、頭にアクセントがあり、-a-はあいまい母音である。よって「**パ_ァル_ダクス**」となる。「うそつきのパラドックス」という本がある。

パラレル

parallel (par-al-lel) [pærələl] 「**パ_ァル_レル**」

平行という意味である。体操競技で有名な平行棒はthe parallel barsと言う。頭にアクセントがあり、-al-はあいまい母音である。よって「**パ_ァル_レル**」となる。欲を言えば、-lelの前で舌を歯茎の裏につけてレルと発音すればよい。

バルセロナ

Barcelona (Bar-ce-lo-na) [bà:rsəlóunə] 「バースロウヌ」

スペインの有名な都市で、オリンピック (Olympic) も開催された。日本語の発音ではまず通じない。アクセントは-lo-にあり、-ce-と-na はあいまい母音である。頭に第2アクセントを置くのもポイントである。よって「バースロウヌ」となる。

ハンカチ

handkerchief (hand-ker-chief) [hæŋkərtʃif] 「ハァンクチフ」

アクセントは頭にあり、hand-の母音はcatのaと同じ[æ]である。また、-ker-はあいまい母音である。よって「ハァンクチフ」となる。

ハンスト (和)

英語の hunger strike を日本式に略したものである。

パンスト (和)

和製英語のパンティストッキングを、さらに日本式に略したもので、ダブルで和製英語である。

パンティストッキング (和)

英語の panty と stocking を勝手に合成した和製英語である。英語では panty hose という。足にはくものは、socks, stockings, shoes, pants のように通常は複数となるが、panty hose はこのままで複数あつかいとなっている。

ビアガーデン

beer garden

ビアス (和)

耳に穴を開けて飾るイヤリングのことであるが、和製英語である。ピアスは穴を開けると意味になる。英語では *pierced earrings* となる。

ビアホール(和)

beer と *hall* を合成した和製英語である。英語では *beer house* となる。

ビークル

vehicle (ve-hi-cle) [vi:əkl] 「ヴィークル」

乗り物のことである。a *motor vehicle* は自動車となる。アクセントは頭にあり、-hi-はあいまい母音である。よって、発音は「ヴィークル」となる。

ビジネスマン

businessman (busi-ness-man) [bɪznɪsmən] 「ビズネスマン」

もちろん、この言葉のもとには *business* であるが、この発音ができない。アメリカでは発音にそって *biz* と書くこともある。CNNのアジア版に *Biz Asia* がある。辞書に載っていないと意味を聞かれたことがある。発音はアクセントを頭において「ビズニス」となる。*Businessman* では -man があいまい母音となるので、「ビズネスマン」となる。あるテレビ・コマーシャル(TV commercial)のように「ビジネスマーン」と言ったのではまったく通じない。

また、一般的には *businessman* というとは一般の事務職よりは、管理職を指す傾向にある。

ピタゴラス

Pythagoras (Py-thag-o-ras) [pəθægərəs] 「プサアグルス」

ピタゴラスの定理で有名なギリシャの数学者である。-thag-にアクセントがあり、他の母音はすべてあいまい母音である。よって

「**サ**ァグルス」となる。th 音であるから、舌を歯の舌でこするように「サ」と発音する。

ビタミン

vitamin (vi-ta-min) [váiṭəmin] 「**ヴァイト**ッミン」

食物の含まれる人間のからだに重要な成分である。A, B, C, D, E, K などがある。みかんにはビタミン C が含まれる。英語の発音頭にアクセントがあり、-ta- はあいまい母音である。よって発音は「**ヴァイト**ッミン」となる。

ビデオ

video (vid-e-o) [vídíou] 「**ヴィ**ディオウ」

テレビ映像のことである。短い単語であるが、音節が3つもある。アクセントは頭にあり、発音は「**ヴィ**ディオウ」となる。ビデオテープは videotape、ビデオテープレコーダーは a videotape recorder となる。略して VTR となるが、日本語でビデオというと VTR のことを指す。英語でも VTR を単に video と呼ぶこともある。

ビニール

vinyl (vi-nyl) [vái nil] 「**ヴァイ**ニル」

日本語では、やわらかい透明な合成樹脂の総称としてビニールを使うが、英語では、プラスチック (plastic) が一般的である。ビニール袋は a plastic bag となる。

ビフテキ

beefsteak (beef-steak) [bí:f stèik] 「**ビー**フテキ」

牛肉のステーキである。かつては、ビフテキと呼んでご馳走であった。たぶん発音がビフテキと聞こえたのであろう。発音は「**ビー**フテキ」となる。確かにスの音はほとんど聞こえない。

ピーマン (仏)

フランス語で英語ではない。英語では a green pepper と言う。

ビール

beer (beer) [bíər] 「ビウッ」

ビールと注文しても通じない。最近は海外に出かける日本人が増えて、みんなビアと注文するようになった。ただし、あいまい母音であるので正しくは「ビウッ」となる。面白いことに、ビアガーデンやビアホールというときは、「ビール」ではなく、原語に近い「ビア」を使う。

ビールス

virus (vi-rus) [váirəs] 「ヴァイルス」

ウイルスとも言う。感冒や天然痘などの病原体である。最近ではコンピューターウイルスが有名である。発音は「ヴァイルス」となる。

ヒーロー

hero (he-ro) [híərou] 「ヒウロウ」

英雄である。小説の主人公のことをこう呼ぶこともある。発音は「ヒウロウ」となる。

ヒヤシンス

hyacinth (hy-a-cinth) [háĩəsinθ] 「ハイッシンス」

有名な花である。ただし英語の発音は違う。アクセントは頭にあり、真ん中の-aはあいまい母音である。よって発音は「ハイッシンス」となる。

ヒューズ

fuse (fuse) [fju:z] 「フューズ」

電気回路を保護する機器である。過電流が流れると融けて切れる合金である。通常は鉛とすずの合金でできている。もともと fuse には「金属を融かす」という意味がある。「ヒューズを飛ばす」ということを英語では **blow a fuse** と言う。発音は、日本語とほぼ同じで、頭にアクセントを置けばよい。よって「フューズ」となる。

ヒューマン

human (hu-man) [hju:mən] 「ヒューマン」

人間という意味である。化粧品の CM でビューティフル・ヒューマン・ライフという名文句があったが、これも和製英語で **native** には意味が分からない。頭にアクセントがあり、-man があいまい母音であるから、「ヒューマン」となる。

ヒロイン

heroine (her-o-ine) [hérouən] 「ヘロウゥン」

女性の主人公のことを言う。ただし、英語の発音はまったく違うので注意を要する。アクセントが頭にあり、「へ」と発音する。よって「ヘロウゥン」となる。麻薬のヘロインは **heroin** と書くが、発音はまったく同じである。

ファイバー

fiber (fi-ber) [fáibər] 「ファイブゥ」

繊維と意味である。商品名にファイバーミニというドリンクがある。発音は「ファイブゥ」となる。

ファクシミリ

facsimile (fac-sim-i-le) [fæksíməli] 「ファクスイムリ」

日本語では平板に発音されるが、英語ではなんと -sim- の位置にア

クセントがある。さらに-iは「あいまい母音」である。日本語につられて、つよく「ミ」と発音してしまうが、何度も言っているように、これが悪名高き日本式発音の根源である。よって「ファックスムリ」となる。fax[fæks]とも言う。

ファーニチャー

furniture (fur-ni-*ture*) [fɜːrnɪʃər] 「フ^ャーニチュ^ャ」

家具のことであり、店の名前にもなっている。アクセントが頭にあり、あいまい母音であり、後ろの-*ture* もあいまい母音である。よって「フ^ャーニチュ^ャ」となる。

フィラメント

filament (fil-a-*ment*) [fɪləmənt] 「フィルムン(ト)」

電球のフィラメントで有名であるが、本来は細い糸のことである。アクセントは頭にあり、残りはずべてあいまい母音である。よって「フィルムン(ト)」となる。

フィルター

filter (fil-*ter*) [fɪltər] 「フィルツ^ャ」

濾過器のことであるが、フィルターの方がより広く使われる。エアコン、掃除機、乾燥機すべてにフィルターがついている。タバコの吸い口についてもフィルターである。アクセントは頭にあり、-*ter* はあいまい母音である。よって「フィルツ^ャ」となる。

プライバシー

privacy (pri-va-*cy*) [praɪvəsi] 「プ^ァライヴシ^ィ」

日本でもプライバシーの侵害ということがよく言われるようになった。私的自由のことである。アクセントは頭の母音にあり、-*va-*はあいまい母音である。よって「プ^ァライヴシ^ィ」となる。

プライベート

private (pri-vate) [praɪvət] [プライベート]

私的のという意味である。private school と言えば私立学校のことである。私企業を private company と言う。Private detective は私立探偵である。日本語では -vate のスペルにつられて「ベート」と発音してしまうが、あいまい母音である。よって[プライベート]となる。

フライング(和)

陸上競技や水泳競技において、所定の時間よりもはやく出てしまう行為をこう呼んでいるが、英語ではない。英語では a breakaway と言う。「フライングする」という動詞は break away となる。

プラスチック

plastic (plas-tic) [plæstɪk] 「プラスチック」

もともとの英語は、「塑性の」という意味であるが、「どんなかたちにも加工できる」という意味から、現在の製品名としてのプラスチックにつながった。日本では、プラモデルの材料や、簡易食器などに使われる比較的硬い合成樹脂をプラスチックと呼ぶが、英語ではビニールのこともプラスチックを使う。発音は「プラスチック」となる。

プラズマ

plasma (pla-sma) [plæzmə] 「プラズマ」

普通の物質は、固体、液体、気体の3態をとるが、さらに高温になると、分子が電離して正と負のイオンに分離する。この状態をプラズマと呼び、物質の第4の状態と呼ばれる。一般には正負のイオンに電離した状態をプラズマと呼んでいる。発音は「プラズマ」となる。「l」の音であるので舌を歯茎の裏につけてラと発音する。

プラモデル (和)

英語の *plastic* と *model* を合成したあとで、さらに日本式に略した和製英語である。英語では *a plastic toy model kit* と言う。

フラワー

flower (*flow-er*) [fláʊər] 「フラウ」

これもすでに日本語として定着している。ただし、英語の発音には注意する。日本式発音はなかなか通じにくい。アクセントは最初の母音にあり「アウ」と発音する。後ろの *-er* はあいまい母音である。よって「フラウ」となり、最後にウを弱く2回続けて発音するぐらいの気持ちで発音する。小麦粉（メリケン粉）の *flour* とまったく同じ発音である。

プレイガイド (和)

play と *guide* を一緒にした和製英語である。誰が、このようないいかげんな用語を発明したのかは知らないが、今では、一般に普及してしまっている。あえて英語で言うならば、*ticket agency* となる。

プレゼント

present (*pres-ent*) [prézent] 「プレゼンツ」

誕生日の贈り物は *a birthday present* となる。ギフト (*gift*) も贈り物である。発音は「プレゼンツ」となる。

プロ

pro (*pro*) [próu] 「プロウ」

玄人のことである。もともとは *professional* を略したものであるが、日英双方でプロ (*pro*) と略す。発音は少し違って「プロウ」となる。

ブローカー

broker (bro-ker) [bróukər] 「ブロウクゥ」

仲買人業者や周旋屋のことである。ただし、ブローカーと言うと黒幕というイメージが付きまとう。発音は「ブロウクゥ」となる。

プログラム

program (pro-gram) [próugræm] 「プロウグラァム」

計画や予定表のことである。テレビの予定表を番組プログラムなどと言う。コンピュータでは計算過程が組まれたものをプログラムと言う。発音は「プロウグラァム」となる。

プロジェクト

project (pro-ject) [prádʒekt] 「ブラジェクト」

計画や企画、事業という意味である。日本では、特命を帯びた事業をこう呼ぶ場合が多い。プロジェクト X は人気番組である。発音は「ブラジェクト」となる。

project には、突出するという意味の動詞もある。この場合、アクセントの位置が後ろになり [prədʒékt] 「プルジェクト」となる。出ベソのことを projecting navel という。

プロセス

process (pro-cess) [práses] 「ブラセス」

進行過程のことである。方法や手順もこともこう言う。手順を踏んでしっかり行うことを「プロセスを踏む」などと言う。pro-にアクセントがあり、ロではなくラと発音する。よって「ブラセス」となる。[próuses] 「プロウセス」と発音することもある。

プロセスチーズ

process cheese [tʃí:z] 「チーズ」

人工的な処理を施したチーズである。processed cheese とも言う。

プロセスバター (process butter) は、溶融精製したバターのことを言う。

プロダクション

production (pro-duc-tion) [prədʌkʃən] 「ブルダクシュン」

生産あるいは著作などという意味であるが、日本語では主に映画やテレビ番組の制作会社のことを言う。あるいは、俳優や歌手などを抱えている会社もこう呼んでいる。英語には、こういう意味はない。発音は pro-があいまい母音で、-tion の規則に従って、その前の音節の-duc-にアクセントがある。よって、「ブルダクシュン」となる。

フロッピーディスク
floppy disk

プロデューサー

producer (pro-duc-er) [prədjuːsər] 「ブルデュースッ」

映画、テレビなどの製作者あるいは、その責任者のことを言う。生産者という意味もある。発音は pro-と-er があいまい母音であり「ブルデュースッ」となる。

プロトタイプ

prototype (pro-to-type) [próutətaip] 「プロウトッタイプ」

原型や試作品という意味である。発音は「プロウトッタイプ」となる。

プロフィール

profile (pro-file) [próufàil]

横顔という意味である。輪郭や概観図のこともこう呼ぶ。日本語ではスターのプロフィールなどと言うが、英語の発音はまった

く異なる。ロではなくロウと発音し、フィールもファイルとなる。よって「プロウファイル」と発音する。

プロフェッショナル

professional (pro-fes-sion-al) [prəfɛʃənəl] 「プルフェッシュヨナル」

「職業の」あるいは「玄人の」という意味の形容詞である。a professional golfer はプロゴルファーのことである。発音は「プルフェッシュヨナル」となる。

プロポーズ

propose (pro-pose) [prəpóuz] 「プルポウズ」

日本語では「結婚申し込み」をプロポーズと言うが、その英語は、propose の名詞形の proposal [prəpóuzəl] 「プルポウズル」となる。propose は動詞で、「結婚を申し込む」という意味もあるが、むしろ一般的に「提案する」「申し込む」という意味で使われる。発音は「プルポウズ」となる。

プロレス(和)

professional wrestling を日本式に略した和製英語である。

フロント

ブロンド

フロンガス

フロントグラス(和)

自動車の前面のガラスのことであるが、和製英語である。英語では windshield という。

ベクトル

vector (vec-tor) [véktor] 「ベクトル」

ベクトルと聞いただけで数学の嫌な思い出がよみがえってくるひとも多かろう。ただし、発音は「ベクトル」である。生物では病原菌を運ぶ媒体の意味で使われるが、そちらの日本語はベクターとなる。

ベジタリアン

vegetarian (veg-e-tar-i-an) [védzətéarion] 「ヴェジューテウリオン」

菜食主義者のことである。最近の国際会議ではベジタリアン用の食事が必ず用意されている。日本で開催される会議では、これを忘れることが多いので評判が悪い。もちろん、vegetable (野菜)[védzətəbl] から派生した語である。発音は「ヴェジューテウリオン」となる。

ベースアップ

日本語では給料を上げるという意味で使うが、完全な和製英語である。英語では pay rise あるいは wage increase と言う。和製英語をさらに略してベアとも言う。

ペットボトル

これも完全な和製英語である。まずペットは英語の PET から来ているが、英語ではペットと読まずに、ピーイーティー[pi:i:ti:]と読む。これは、polyethylene terephthalate の略である。ただし、PET と言っても普通のひとは分らない。英語では plastic bottle と言うのが普通である。

ヘッドライン

ベテラン

veteran (ve-te-ran) [vétrən] 「ヴェト_(ウ)レン」

日本では、熟練者をこう呼ぶが、英語では、退役軍人という意味で使われるのが一般的である。日本語の意味のベテランは an expertの方がふさわしい。

ベトナム

Vietnam (Viet-nam)

ペナルティ

ペナント

ベランダ

ヘリウム

ヘルシー

healthy (heal-thy)

ベルギー

Belgium (Bel-gium) [béldʒəm] 「ベルジウム」

この国名も日本人がうまく発音できない。アクセントは頭にあり、-giumにあいまい母音がある。よって「ベルジウム」となる。

ヘルメット

helmet (hel-met)

ペンキ(蘭)

オランダ語 (pek)である。英語では paint と言う。

ペンギン

penguin (pen-guin)

ペンシル

pencil (pen-cil)

ペンタゴン

pentagon (pen-ta-gon)

もともとは六角形という意味であるが、米国国防省のビルが六角形であることから、ペンタゴンという通称で呼ばれるようになった。

ベンチャー

venture (ven-ture)

ボイコット

boycott

ボイジャー

voyager

ボイス

voice

ボーイング

Boeing

ホエール

whale

ボーカル

vocal

ホーク

hawk

ポーク

pork

ポケット

pocket (pock-et) [pákət] 「パ^ッケット」

ポケットである。しかし、英語の発音はまったく異なる。アクセントが頭にあり、-et はあいまい母音である。よって発音は「パ^ッケット」となる。ズボンの後ろのポケットは a rear pocket と言う。夫のポケットマネーは英語では pocket money と言わずに beer money という。ビールを飲むお金という意味である。

ポジション

position (po-si-tion) [pəzɪʃən] 「^ッポジション」

位置という意味であるが、身分や地位という意味にもなる。アクセントは-si-にあるが、po-があいまい母音であることに注意する。発音は「^ッポジション」となる。

ポジティブ

positive (pos-i-tive) [pázətiv] 「パ^ッズティブ」

前出のネガティブの反意語。日本語では積極的という意味で使われることが多い。アクセントは頭にあり、つぎがあいまい母音である、「パ^ッズティブ」となる。最初を思い切って「パ」と大きく

発音するのがこつである。

ポスト

post (post) [póust] 「ポウスト」

日本語では郵便ポストが思い浮かぶが、英語では a mail box (米) あるいは a postbox (英) となる。英語では郵便という意味のほか、地位という意味にもよく使われる。はがきは a postcard である。郵便局は a post office となる。発音は「オウ」とはつきり言い、「ポウスト」となる。

ポータブル

portable (port-able)

ポテト

potato (po-ta-to) [pətéitou] 「プテイトウ」

じゃがいもであるが、日本ではポテトチップス (potato chips) が有名。アクセントは-ta-にあり「テイ」と発音する。また、po- はあいまい母音である。よって「プテイトウ」となる。日本語のポテトの発音とはまったく違う。

ポテンシャル

potential (po-ten-tial) [pəténʃəl] 「プテンシユル」

秘めたる可能性や潜在能力のことを指す。科学では電位や位置エネルギーのことである。そのままポテンシャルと呼ぶが、英語の発音は違う。アクセントは-ten-にあり、頭はあいまい母音である。よって「プテンシユル」となる。

ポピュラー

popular (pop-u-lar) [pápjulər] 「パピユル」

日本語では「人気のある」という意味で使われるが、英語では

「大衆の」という意味でも使われる。例えば **popular science** という雑誌があるが、これは「人気のある科学」という意味ではなく「大衆のための科学」という意味である。また、**a popular magazine** は通俗雑誌となる。アクセントは頭にあり、**-lar** があいまい母音である。よって「パピュル^ラ」となる。

ホーム

ボランティア

volunteer (vol-un-teer) [vələntiər] 「バルンティ^ーウ」

学校の単位にもボランティア活動を取り入れようとする動きがある。志願者あるいは有志の意味である。アクセントは **-teer** にあり、**-un-**はあいまい母音である。よって発音は「バルンティ^ーウ」となる。

ホリデー

holiday (hol-i-day) [hələdeɪ] 「ハル^ッディ」

休日である。日本にもホリデーインというホテルチェーンが進出している。ただし、ホリデーでは通じない。アクセントは頭にあり、**-i-**があいまい母音である。よって「ハル^ッディ」となる。

マ行

マイク

mike (mike) [máik] 「マイク」

拡声器、マイクロホンの略である。英語でもマイクと略して言う場合がある。ただし、マイクに通じないこともある。また、Michaelの愛称としてMikeと呼ぶ。発音は日本語とほぼ同じで「マイク」となる。

マイクロホン

microphone (micro-phone) [máikrəfòun] 「マイクルフォン」

拡声器のことで、日本語でもマイクロホンと言う。ただし、英語ではホンではなく、フォンとなる。発音は「マイクルフォン」である。

マガジン

magazine (mag-a-zine) [mægəzi:n] 「マァグジーン」

雑誌のことである。アクセントは頭にあり、母音は cat の a と同じ音である。つぎの-a-はあいまい母音であり、最後の-zine は「ジーン」と伸ばす。よって「マァグジーン」となる。後ろにアクセントを置く場合もある。

マーガリン

margarine (mar-ga-rine) [má:rgørən] 「マーグルン」

人造バターと訳すよりは、そのままマーガリンで通じる。ただし、-ga-と-rine はあいまい母音であるので、「ガ」ではなく、発音

は「マーグルン」となる。

マグネット

magnet (mag-net) [mæɡnit] 「マ_ァグニト」

磁石のことである。日本語でもマグネットと言う。発音は「マ_ァグニト」となる。

マグレブ

Maglev (Mag-lev) [mæɡlev] 「マ_ァグレヴ」

磁気浮上列車のことである。英語 a magnetically levitated train の略である。発音は「マ_ァグレヴ」となる。

マサチューセッツ

Massachusetts (Mas-sa-chu-setts) [mæsətʃú:səts] 「マ_ァスチュースツ」

有名な米国の州。MIT として知られるマサチューセッツ工科大学は Massachusetts Institute of Technology の略である。あいまい母音があることに注意すると、「マ_ァスチュースツ」となる。

マスコミ (和)

大衆伝道という英語 mass communication を日本式に勝手に略したものである。

マスメディア

mass media [mæs mi:diə] 「マ_ァス ミーディウ」

マスコミと同じ意味であるが、これは英語である。media は medium の複数形である。medium は衣服のサイズの M のもとなった語で中間という意味もあるが、媒体や平均という意味もある。発音は「マ_ァス ミーディウ」となる。

マテリアル

material (ma-te-ri-al) [mə'tiəriəl] 「ムティウリウ (ル)」

材料の意味で、会社の名前にもなっている。Materials で道具という意味もある。ただし、日本式にマテリアルと発音したのでは通じない。あいまい母音が数多く入っているのに注意すると「ムティウリウ (ル)」となる。

マネキン

mannequin (man-ne-quin) [mænəkin] 「マァヌキン」

マネキン人形のことである。この名の映画がヒットしたことがある。日本では、ファッション衣料の販売員をハウスマヌカンと言うが、このマヌカンはマネキンと同じ単語である。マヌカンはフランス語の発音に近い。英語では、頭にアクセントを置いて「マァヌキン」となる。

マフラー

muffler (muf-fler) [mʌflər] 「マフルゥ」

日本ではえり巻きとして通っているが、英語では muffler とはあまり言わない。スカーフ(scarf) がより一般的である。発音は「マフルゥ」となる。

銃やエンジンの消音装置を muffler と言う。車のマフラーと日本でも呼んでいる。muffle [mʌfl] は包む、くるむという意味である。理系では箱型炉のことを a muffle furnace (マッフル炉)と呼んでいる。

マラソン

Marathon (Mar-a-thon) [mæ'rəθən] 「マァルスン」

日本では、42.195km を走るレースのことを言うが、英語では Marathon race という。Marathon はアテネ近郊の地名で、マラトンの戦いで有名である。発音は「マァルスン」となる。

マリン

marine (ma-rine) [məˈriːn] 「ムリーン」

「海の」という形容詞であるが、「海兵隊の」という意味もある。名詞では艦船、海兵隊員という意味にもなる。頭があいまい母音であり、アクセントは-ri-の位置にあるので、発音は「ムリーン」となる。

マリンスポーツ(和)

日本では、海洋スポーツのことをマリンスポーツと言うが、これは、「海の」という意味の marine とスポーツ (sports) を勝手に合成したもので、英語ではない。

マルチ(和)

英語の multi-という接頭語が日本語にそのまま使われるようになった。英語にも、この接頭語のつく語は多いが、日本語には英語のないものがある。例えば、**マルチ商法**は違法であるが、これは完全な和製英語用法である。英語では pyramid selling という。ピラミッド式販売という意味である。また、いろいろなことに才能があるひとを**マルチ人間**というが、これも和製英語である。

マンション(和)

英語の mansion [məˈnʃən] に由来したものであるが、英語では「大邸宅」という意味であり、日本語のマンションはコンドミニウム (a condominium) か、アパートである。ただしアパートも和製英語で an apartment house が正しい。

ちなみに、ウィークリーマンションも完全な和製英語である。weekly には、「1 週間の」という意味はある。

マンツーマン

man-to-man (man-to-man) [məntəmæn] 「マァントゥマァン」

男同士のという意味である。バスケットボールでは、1対1のディフェンス (defense) を **man-to-man defense** と言う。この意味が広く解釈され、日本ではマンツーマンを英語よりも広い意味で使われる。発音は-to-があいまい母音であるので「マァントッマァン」となる。英語では **one-on-one** とも言う。

マンネリ (和)

いつも同じことの繰り返しをマンネリと日本語では言う。このもとの英語は **mannerism** [mæ'nərɪzəm] 「マァヌリズム」であるが、この意味はない。芸術で奇をてらうことを言う。あるいは、個人の変な癖のことを言う。

マンハッタン

Manhattan (Man-hat-tan) [mænhætən] 「マァンハァッタン」

ニューヨーク市の商業、金融の中心地である。日本式に「マン・ハッタン」と発音しても通じない。アクセントは-hat-に置き「マァンハァッタン」と発音する。

ウィスキーベースのカクテルにも、この名前がつけられている。

マンモス

mammoth (mam-moth) [mæməθ] 「マァムス」

古代の洪積世に生息した巨大な象のことである。マンモスで一般に通じる。日本語では「巨大な」という意味で使われる。例えば「マンモス企業」「マンモス大学」「マンモス都市」などと使う。ただし、英語では、これらの意味で **mammoth** を使うことはあまりない。発音も、日本のマンモスでは通じない。頭にアクセントを置いて「マァムス」となる。

ミクロ (和)

昔「ミクロの決死圏」という映画がヒットした。ミクロは英語

の micro- という接頭語を日本式に「微小」という意味で転用したものである。さらに発音は[máikrou] 「マイクロウ」となる。

ミクロン

micron (mi-cron) [máikran] 「マイクロラン」

100 万分の 1 メートルのことである。1mm の 1000 分の 1 という単位となる。英語では「ミ」ではなく「マイ」となる。発音は「マイクロラン」となる。

ミシシッピ

Mississippi (Miss-sis-sip-pi) [misisipi] 「ミスィスィピ」

米国南部の州の名前ではあるが、世界最長の川の名前も有名である。発音は「ミスィスィピ」となる。

ミシン

machine (ma-chine) [məʃí:n] 「ムシン」

ミシンは日本語である。もともとは a sewing machine であるが、最後の machine だけが残った。もちろん、machine は機械という意味である。この日本語は、マシンであるが。Ma- はあいまい母音であり、アクセントは後ろにあるので、発音は「ムシン」となる。日本人には「ミシン」と聞こえたのかもしれない。

ミステリー

mystery (mys-ter-y) [místəri] 「ミストゥリィ」

神秘、不可思議、あるいは怪奇小説のことを言う。日本語でも同様の意味で使われる。ミステリー小説や、ミステリー劇場などと使う。発音は「ミストゥリィ」となる。

ミステリアス

mysterious (mys-te-ri-ous) [místəriəs] 「ミスティウリウス」

mystery の形容詞であり、「神秘的な」「不思議な」という意味である。これも、日本語で同じ意味でよく使われる。発音は「ミスティウリウス」となる。

メディアム

medium (med-i-um) [mí:diəm] 「ミーディウム」

中ぐらいのという意味であり、medium size は M サイズのことである。米国でステーキ (steak) を注文するが、その時 rare, medium, well-done から選ぶので有名。発音は「ミーディウム」となる。情報伝達の媒介という意味もあり、複数形の media [mí:diə] を使って mass media (マスメディア)、つまり大衆報道機関のことを言う。ただし発音は「ミーディゥ」でる。

ミュージカル

musical (mu-si-cal) [mjú:zəkəl] 「ミュージカル」

音楽英語である。Sound of Music は不朽のミュージカルである。ただし、発音に注意する。「ミュージカル」となる。

ミリメートル

millimeter (mil-li-me-ter) [míləmə:tər] 「ミルミーツァ」

mm と書く単位である。アクセントを頭につけ、-li-があいまい母音であることに注意する。よって「ミルミーツァ」となる。

ミンク

mink (mink) [mɪŋk] 「ミンク」

いまは、あまり見なくなりましたが、ミンクの毛皮のコートは最高級品であった。ミンクはリス科の動物である。発音は「ミンク」となる。

ミント

mint (mint) [mint] 「ミント」

日本ではハッカのことを言う。「ミントの香り」などと言う。英語では、造幣局という意味もある。発音は「ミント」となる。

メ(イ)ンテナンス

maintenance (main-te-nance) [meɪntənəns] 「メインツ_ツヌ_ツンス」

保守という意味である。日本語でも「装置のメンテナンス」などと言う。アクセントは頭にあり、あいまい母音がふたつ続く。よって発音は「メインツ_ツヌ_ツンス」となる。

メガトン

megaton (meg-a-ton) [megətʌn] 「メ_ツタン」

メガは100万という単位である。よってメガトンは100万トンという重さの単位にある。これが転じて、メガトン級という、非常に重量のあるという意味になる。-a-はあいまい母音であり、アクセントは頭にある。よって発音は「メ_ツタン」となる。

メガホン

megaphone (meg-a-phone) [megəfəʊn] 「メ_ツフォ_ン」

拡声器である。日本語でも普通にメガホンという。-a-があいまい母音であり、アクセントは頭にある。よって発音は「メ_ツフォ_ン」となる。

メーキャップ

makeup (make-up) [meɪkʌp] 「メ_ツイク_ツップ」

日本では「化粧」という意味で使われるが、英語では、その他にも「作り事」や「構造」という意味でも使われる。make up と分けると動詞になる。発音は「メ_ツイク_ツップ」となる。

メーク(和)

日本語では「化粧」という意味で **make** を使う。化粧しない状態をノーメイクとも言う。いずれも、**makeup** の **up** を略してしまったものである。

メモランダム

memorandum (mem-o-ran-dum) [mémərəéndəm]

この語を略したメモ (memo) も会話ではよく使われる。発音は「メモラァンドゥム」となる。

メモリー

memory (mem-o-ry) [méməri]

記憶という意味であるが、今ではコンピュータの記憶装置というイメージが強い。発音は「メモリ」となる。

モーター

motor (mo-tor) [móutər]

電動機というよりは、モーターの方が一般的となっている。発音は「モウツァ」となる。「モウラァ」と発音してもよい。

モニター

monitor (mon-i-tor) [mánətər]

忠告者あるいは監視者という意味である。モニターテレビは、犯罪防止のための監視テレビのことである。消費者モニターも有名。アクセントは頭にあり、あいまい母音がふたつ続く。よって「マヌツァ」となる。

モーメント

moment (mo-ment) [móumənt]

瞬間という意味もあるが、物理ではモーメントとそのまま使う。

発音は「モウムンツ」となる。

モラトリアム

moratorium (mor-a-to-ri-um) [mò:rətó:riəm] 「モールトールウム」

もともとは「支払い猶予」や「猶予期間」という法律用語であったが、一般的な一時猶予期間という意味で使われている。例えば、大学時代は一種のモラトリアムである。発音は「モールトールウム」となる。

モラル

moral (mo-ral) [mó:rəl] 「モールウ」

道德という意味である。最近モラルハザード (moral hazard) という用語がよく使われる。もともとは、被保険者が不信をいだくために保険会社が危険にさらされるという意味であったが、いまは、銀行などにも使われる。より一般的に道徳的危機という意味で使われる。発音は「モールウ」となる。

モラル

morale (mo-rale) [mərəél] 「ムラァル」

士気や勤労意欲という意味である。日本語でも「モラル低下」という場合は、こちらのモラルの意味である。アクセントは後ろにあり、mo-はあいまい母音である。よって発音は「ムラァル」となる。

モリブデン

ヤ行

ヤード

yard (yard) [jɑ:rd] 「ヤード」

長さの単位である。0.914m である。庭のこともヤード (yard) と言う。かつてゴルフの距離表示がメートル (meter) になったことがあったが、いつのまにかヤードに戻ってしまった。発音は日本語に近く「ヤード」となる。

裏庭のことを、日本語でもバックヤード (backyard) と呼ぶ。英語でも同様である。

ヤンキー

Yankee (Yan-kee) [jæŋki] 「ヤンキ」

米国人の俗称である。南北戦争の時代に、南部の人間が、北部の人間を軽蔑してこう呼んだのがはじまりである。

沖縄問題で反米デモが盛んなころは、「Yankee, go home.」という叫び声を挙げていた。発音は「ヤンキ」となる。

ヤング

young (young) [jʌŋ] 「ヤング」

若いという意味である。ヤングマン (young man) という歌がはやったことがある。発音は日本語に近く「ヤング」となる。

ユーザー

user (us-er) [ju:zər] 「ユーザ」

使用者のこと。マッキントッシュ (Macintosh) を使うひとをマックユーザなどと言う。発音は「ユーザ」となる。

ユース

youth (youth) [jú:θ] 「ユース」

若さと言う意味である。ユースホステル (youth hostel [hástl]) は若者むけの安い宿泊所である。発音は「ユース」となるが、最後のスは th であるので、舌で上前歯の下をこするように発音する。

ユートピア

Utopia (U-to-pi-a) [ju:tóupiə]

理想郷のこと。英国の Thomas More の小説に由来する。アクセントは -to- の位置にあり、「ユートウピア」となる。

ユニオン

union (un-ion) [jú:njən] 「ユニオン」

労働組合という意味である。labor union ということもある。団結という意味もある。発音は「ユニオン」となる。

イギリスの国旗を the Union Jack (ユニオンジャック) と言う。3つの国 (スコットランド、アイルランド、イングランド) の国旗 (Jack) が一緒になったという意味である。いまでも、サッカーイングランド代表はユニオンジャックではなく、昔の国旗を使っている。

ユニーク

unique (u-nique) [ju:ní:k] 「ユニーク」

「唯一の」あるいは「類のない」という意味である。日本語でもユニークなキャラクターなどという。発音は、「ユー」と伸ばして「ユニーク」となる。

ユニット

unit (u-nit) [jú:nit] 「ユニット」

単位、単元、あるいはひとかたまりという意味である。発音は「**ユ**-ニト」となる。

ユニットバス(和)

浴槽と床や壁が一体になっている風呂をユニットバスというのが和製英語である。

ユニバーサル

universal (u-ni-ver-sal) [ju:nəvɜ:rsəl] 「**ユ**-ヌ**ヴ**ウースル」

「全世界の」という意味である。ただし、最近では、大阪にユニバーサルスタジオ (Universal Studio) が誕生して、そちらが有名である。発音は「**ユ**-ヌ**ヴ**ウースル」となる。

ユニバーサルタイム (universal time) は万国標準時であり、ユニバーサルジョイント (universal joint) は万能継ぎ手のことである。

ユニバース

universe (u-ni-verse) [ju:nəvɜ:rs] 「**ユ**-ヌ**ヴ**ウース」

宇宙という意味である。この意味では、the universe と the をつける。アクセントが頭にあり、「**ユ**-ヌ**ヴ**ウース」となる。

ユニホーム

uniform uni-form [ju:nəfɔ:m] 「**ユ**-ヌ**フ**ォーム」

制服のことである。日本語でもユニホームで通る。ただし、発音は少し異なる。uni-があいまい母音であり、最初を少し伸ばす。よって「**ユ**-ヌ**フ**ォーム」となる。

ユネスコ

UNESCO (UNESCO) [ju:néskou] 「**ユ**-ネ**ス**コウ」

国際連合の機関である。正式名は、the United Nations Educational,

Scientific, and Cultural Organization (国際連合教育科学文化機構)の頭文字をとったものである。発音は「ユーネスコウ」となる。

ユビキタス

ubiquitous (ubiq-*ui*-tous) [jubík-wətəs] 「ユビクウツトス」

語源はラテン語で、「どこからでも」という意味である。コンピュータネットワーク (computer network) の発達した社会では、いつでも、どこからでも情報が得られるという意味合いで使われる。21世紀はユビキタス社会になると言われている。発音は「ユビクウツトス」となる。

ユーモア

humor (humor) [hjú:mər] 「ヒュームツ」

あえて日本語に訳せば「可笑しさ」ぐらいの意味であろうが、ユーモアで十分通じる。ただし、英語の発音は日本語とまったく異なる。スペル (spelling) の試験でもよく出てくる。発音は「ヒュームツ」となる。

ユーロ

Euro (Euro) [júərou] 「ユウロウ」

「ヨーロッパの」という意味であるが、いまではヨーロッパの統一通貨の単位として有名となっている。発音は「ユウロウ」となる。

ヨーグルト

yogurt (yo-gurt) [júəgərt] 「ヨウグウト」

牛乳やヤギの乳を乳酸菌のはたらきで固めたものである。日本語訳はないが、健康食品として注目を集めている。ただし、ブルガリア人 (Bulgarian [bAlgɛəriən]) に聞いたら、そんなものは無いと言われた。発音は「ヨウグウト」となる。

ヨット

yacht (yacht) [jat] 「ヤト」

競争用帆船のことである。発音は「ヤト」となる。

ヨード(独)

ドイツ語である。英語ではまったく通じない。**ヨードチンキ** (Jodtinktur)も英語ではない。

ヨード (Jod) はヨウ素から来ているが、ヨウ素に対応した英語は iodine [áioudàin]である。

ヨルダン

Jordan (Jordan) [dʒɔ:dn] 「ジョーダン」

アラビア半島北西部の王国。ヨルダン川が流れている。ただし、英語の発音はまったく異なり「ジョーダン」となる。バスケットボール (basket ball) のスーパースター (superstar) であるマイケルジョーダン (Michael Jordan) と同じ発音である。

ヨーロッパ

Europe (Eu-rope) [júrəp]

これもはじめて英語を聞くと、違った地名に聞こえる。逆の視点に立てば、日本式発音が通じないということになる。よって発音は「ユウロッパ」となる。

ラ行

ライオン

lion (li-on) [láɪən] 「ライウン」

百獣の王 (king of beasts) である。発音は、-on があいまい母音であるので、「ライウン」となる。

雌ライオンはライオネス (lioness) と言う。ライオネス飛鳥という女子プロレスラーがいた。発音は[láɪənɪs] 「ライウニス」となる。

ライセンス

license (li-cense) [láɪsəns] 「ライسنズ」

免許のことであり、自動車免許は a driver's license となる。日本語でもドライバーズライセンスと言う。発音は頭にあり、あいまい母音を含んでいるので「ライسنズ」となる。

ライター

writer (writ-er) [ráɪtər] 「_(ウ)ライトッ」

作家のことである。日本語でもノンフィクションライターなどと言う。頭が r の音であるので、ウという口のかたちで「_(ウ)ライトッ」と発音する。

ライター

lighter (light-er) [láɪtər] 「ライトッ」

点火器のことであるが、日本語でも普通にライターで通る。ただし、頭が l の音であるので、上歯茎の裏に舌をつけてラと発音

する。よって「ライト^ッ」となる。

ライナー

liner (liner) [láinər] 「ライヌ^ッ」

定期船や定期列車のことである。湘南ライナーという列車がある。野球で、まっすぐに、するどく飛ぶ打球をライナーと言う。英語でも liner というが、line drive ということもある。

ラクーン

raccoon (rac-coon) [rækú:n] 「ラ^ックーン」

あらいぐまのことであるが、日本のたぬきもこう呼ぶ。ただし、日本のたぬきは正式には、a raccoon dog とする。発音は「ラ^ックーン」となる。

ラケット

racket (racket) [rækit] 「ラ^ッケット」

テニスや卓球のラケットである。日本語ではケにアクセントを置くが、英語では頭に来る。発音は「ラ^ッケット」となる。

ラジオ

radio (ra-di-o) [réidiòu] 「レ^ィディオウ」

無線放送受信装置と日本語に訳してもむなしい。ラジオで通る。ただし、発音はまったく異なる。発音は「レ^ィディオウ」となる。

ラスト

last (last) [læst] 「ラ^ッスト」

「最後の」という意味である。これを頭につけた英語も日本ではよく使われる。発音は「ラ^ッスト」となる。[la:st] 「ラ^ースト」とも発音される。

ラストシーン

last scene (last scene) [læst si:n] 「ラァスト スィーン」

劇などの最終場面を言う。the last scene と the がつく。発音は「ラァスト スィーン」となる。

ラストスパート

last spurt (last spurt) [læst spɜ:rt] 「ラァスト スプート」

競技の最終場面でひと踏ん張りすることである。spurt には噴出という意味があり、これだけでラストスパートという意味がある。発音は「ラァスト スプート」となる。

ラップ

lap (lap) [læp] 「ラァプ」

ひざのことである。ラップトップ (laptop) コンピュータはひざの上に載せて操作できるということから、この名前がついた。スポーツでは1周のことをラップと言う。この時間をラップタイム (lap time) と言う。発音は「ラァプ」となる。

ラベル

label (label) [léibl] 「レイブル」

荷札、表号、商標などのことであるが、日本語でもラベルが一般的である。ただし、英語の発音は「レイブル」である。日本人が「ラベル」と発音して通じない場面をよく見かける。

ラムネ

lemonade (lem-on-ade) [lemənéid] 「レムネイド」

いまの日本語では、レモネードである。レモン汁に水と砂糖を入れた飲料である。ただし、昔のひとには英語の発音はラムネと聞こえたのであろう。このため、ラムネと呼ばれるようになった。最初の音が l であるので、舌を上あごの歯茎の裏につけて「レ」

という音を出す。英語の発音は「レムネイド」である。確かに口に出して言うと、ラムネと聞こえないこともない。

ランク

rank (rank) [ræŋk] 「_(ウ) ラェンク」

階級のことであるが、日本語では順位付けのランキング (ranking) がよく使われる。頭が r の音なので、ウという口のかたちにしてラと発音する。発音は「_(ウ) ラェンク」となる。

ランダム

random (ran-dom) [rændəm] 「_(ウ) ラェンドゥム」

「でたらめ」のという意味である。ランダムアクセスメモリー (random access memory) は、任意に呼び出せるメモリーのことで、頭文字をとって RAM となる。これは、コンピュータ用語として普及している。発音は「_(ウ) ラェンドゥム」となる。

ランドリー

laundry (laun-dry) [lɔ:ndri] 「ロ-ンドゥリ」

洗濯屋のことである。日本語ではクリーニング屋というが、これは和製英語である。cleaning には洗濯という意味はある。日本でもコインランドリー (coin laundry) と呼んでいる。これは英語である。動詞の launder [lɔ:ndər] は、洗濯すると意味もあるが、money laundering のように不正な金を裏の手を使って、合法的な資金に変えるという意味でよく使われる。

ランナー

runner (run-ner) [rʌnər] 「_(ウ) ラヌァ」

走者である。発音は「_(ウ) ラヌァ」となる。r 音であるので、「ウ」と言うつもりでラの発音をする。

リアル

real (real) [ri:əl] 「_(ウ) リーウル」

「本物の」あるいは「真実の」という意味であるが、日本では「真に迫った」という意味でよく使われる。日本語では、あまりにも生々しいことを「リアル過ぎる」などと言う。ただし、英語の発音はかなり違う。頭にアクセントがあり、あいまい母音もある。発音は「_(ウ) リーウル」となる。

日本でもリアルタイム (real time) と言うが同時あるいは即時と言う意味である。「リアルタイムで放送する」というと生放送のことである。

リクエスト

request (re-quest) [rikwést] 「_(ウ) リクウエスト」

要求あるいは依頼という意味である。「要求する」という動詞にもなる。日本では、音楽番組などで曲を選択することを言う。「涙のリクエスト」というヒット曲がある。発音は「_(ウ) リクウエスト」となる。

リクライニング

reclining (re-clin-ing) [rikláiniŋ] 「_(ウ) リクライニング」

列車や飛行機で、シートの背を倒せることをリクライニングと言う。もともと recline [rikláin]は、「もたせかける」という意味の動詞である。日本ではリクライニングシートというが、英語では a reclining chair と言う。発音は「_(ウ) リクライニング」となる。

リクルート

recruit (re-cruit) [rikrú:t] 「_(ウ) リクルート」

(新人や会員を) 募集する、あるいは採用するという意味である。日本でも会社の名前にもなったが、その後政界スキャンダルで社長が失脚した。発音は cruit にアクセントがあり「_(ウ) リクルー

ト」となる。

リサイクル

recycle (re-cy-cle) [ri:sáikəl] 「_(ウ)リーサイクル」

再循環させるという意味である。あるいは廃棄物や排水を再利用するという意味もある。環境問題への関心から、リサイクル運動がさかんである。発音は「_(ウ)リーサイクル」となる。

リサイタル

recital (re-cit-al) [risáitl] 「_(ウ)リサイタル」

独唱会や独奏会のことである。a piano recital はピアノの独奏会で、日本語でもピアノリサイタルと言う。発音は「_(ウ)リサイタル」となる。

リストラ(和)

これも、日本語独特の英語の短縮化である。正しい英語はリストラクチャリング (re-structuring) である。数年前に、りすとトラの絵を描いた年賀状を貰った。責任を負うべき役に立たない年寄りの経営者が居座り、次世代をになう 40代から 50代の人材の首を切るのがリストラである。情けない。

リストラクチャリング

restructuring (re-struc-tur-ing) [ristrÁktʃerɪŋ] 「_(ウ)リストラクチュリング」

日本語ではリストラである。英語では本来、再構築と言う意味であるが、馬鹿な日本の経営者は人減らしと思っているのであろう。アメリカが人減らしの先進国であるが、従業員を粗末にした会社は、一時は業績を回復するが、長い目でみれば、すべて凋落している。よって知るべしであらう。発音は、頭が r の音なので、ウという口のかたちにしてリと発音する。よって「_(ウ)リストラクテ

ユリング」となる。

リズム

rhythm (rhythm) [rɪðm] 「_(ウ)リズム」

律動という意味である。日本語で普通にリズムと言う。絵や文章などの調子のことを言うこともある。発音はðの音であるのでズは、舌を上歯の下をこするように発音して「_(ウ)リズム」とする。

リズムカル (rhythmical) [rɪðmɪkəl] は「律動的な」「調子がよい」という意味であるが、日本語でもそのまま使う。ただし、英語では頭にアクセントがあり、「_(ウ)リズムカル」となる。

リゾート

resort (re-sort) [rɪzɔ:t] 「_(ウ)リゾート」

行楽地という意味である。日本でもリゾートホテルなどと使う。避暑地は英語で a summer resort とする。発音は「_(ウ)リゾート」となる。

リターン

return (re-turn) [rɪtɜ:n] 「_(ウ)リターン」

帰るという意味である。ボクシングのリターンマッチ (a return match) つまり雪辱戦は有名。投資に対する利益もリターンと言う。ただし、ハイリスク・ハイリターン (high risk high return) というのは和製英語である。英語では return ではなく、yield を使う。発音は「_(ウ)リターン」。r 音であるので、「ウ」と言うつもりで「リ」の発音をする。

リタイヤ

retire (re-tire) [rɪtaɪə] 「_(ウ)リタイヤ」

「退職する」という意味である。けがなどでスポーツ選手が退

場することもリタイヤと呼ぶ。退職は **retirement** [ritáíəmənt] である。発音は「_(ウ) リタイヰ」となる。退職の方は「_(ウ) リタイウメント」となる。

リハーサル

rehearsal (re-hears-al) [rihə:rsəl] 「_(ウ) リフースル」

劇や音楽の下げいこのことである。日本でも普通にリハーサルと呼ぶ。発音は hears-があいまい母音であるので「_(ウ) リフースル」となる。

リフレッシュ

refresh (re-fresh) [rifréʃ] 「_(ウ) リフレシュ」

「さわやかにする」あるいは「元気づける」という意味の動詞である。日本語でもリフレッシュ休暇などと言うが、動詞ではなく、名詞として使っている。英語で名詞として使うときは、**refreshment** [rifréʃmənt] となる。発音は「_(ウ) リフレシュ」となる。

リュックサック

rucksack (ruck-sack) [rʌksæk] 「_(ウ) ラクサック」

昔は背負い袋をこう呼んだが、いまではバックパック (**back pack**) の方が一般的である。頭が r の音なので、ウという口のかたちにしてラと発音する。アクセントは頭にあるので、発音は「_(ウ) ラクサック」となる。

リレー

relay (re-lay) [ri:lei] 「_(ウ) リーレイ」

日本語ではリレー競技 (**relay race**) がすぐに思い浮かぶ。電気の中継器もリレーと呼ぶ。英語では仕事の交替という意味もある。発音は頭にアクセントがあり「_(ウ) リーレイ」となる。

ルビー

ruby (ru-by) [rú:bi] 「_(ウ)ルービ

宝石である。赤い色をしているので紅玉と呼ぶ。「ルビーの指輪」という歌が大ヒットした。振り仮名を振ることを「ルビを振る」と呼ぶが、同じ単語である。これは、印刷で5.5point活字のことを、こう呼んだことに由来する。頭がrの音なので、ウという口のかたちにしてルと発音する。アクセントは頭にあるので、発音は「_(ウ)ルービ」となる。日本式にルビーと発音したのでは全く通じない。

ルネッサンス

renaissance (re-nais-sance) [rènəsá:nz] 「_(ウ)レヌサーンズ

文芸復興のことであるが、ルネッサンスでそのまま通る。英語の発音はかなり異なる。アクセントは後ろにあり、「_(ウ)レヌサーンズ」となる。

レクリエーション

recreation (re-cre-a-tion) [rèkriéiʃən] 「_(ウ)レクリエイション

休養、保養、気晴らしといった意味であるが、日本語でも、同じ意味でレクリエーションと言う。発音は「_(ウ)レクリエイション」となる。

レシート

receipt (re-ceipt) [risí:t] 「_(ウ)リスィート

受け取りという意味であるが、日本では領収書という意味で使われる。「レシートを受け取る」というように使う。発音は「_(ウ)リスィート」となる。

レシーブ

receive (re-ceive) [risí:v] 「_(ウ)リスィーヴ

日本では、テニスやバレーボールのサーブを打ち返すことをレシーブというが、そういう名詞はない。英語では「レシーブする」という動詞になる。一般には、「受け取る」という意味として使われる。レシート (receipt) は receive の名詞形である。発音は「_(ウ)リスィーヴ」となる。

レシピ

recipe (rec-i-pe) [résəpi] 「_(ウ)レスピ」

薬などの処方箋であるが、日本では料理の調理法という意味でよく使われる。発音は「_(ウ)レスピ」となる。

レース

race (race) [reis] 「_(ウ)レイス」

競走のことである。日本でもボートレース (a boat race) などと言う。ただしカーレースという言わずに、an automobile car と言う。競走車は日本語と同様にレーシングカー (a racing car) という。発音は「_(ウ)レイス」となる。

レース

lace (lace) [leis] 「レイス」

組みひものことである。レースのカーテンなどと言う。日本語では race と同じ発音であるが、英語では l であるので、上あごの歯茎の裏に舌をつけて「レイス」と発音する。

レストラン

restaurant (res-tau-rant) [résɔrənt] 「_(ウ)レストゥルン (ト)」

日本語となっている。発音は頭にアクセントがあり、「_(ウ)レストゥルン (ト)」となる。日本語でレストランのように大きな「ト」をつけないのは賢明である。

レーザー

laser (la-ser) [léizər] 「レイズウ」

レーザー光線と言えど誰もが知っている。波長のそろった光で、遠くまで届く。今ではレーザーポインター (a laser pointer) と呼ばれる電子の指し棒が有名である。実は、light amplification by stimulated emission of radiation の頭文字である。-ser はあいまい母音であり、発音は「レイズウ」となる。

レトルト

retort (re-tort) [ritó:rt] 「(ウ) リトート」

蒸留器のことである。精錬容器のこともこう呼ぶ。ただし、日本語では、レトルト食品の意味で使う。ただし、これに対応した英語は retort pouched food となる。pouch [paʊtʃ] は「袋に入れる」という意味である。日本語のポーチは、この単語である。発音は「(ウ) リトート」である。

レフリー

referee (ref-er-ee) [rɛfəri:] 「(ウ) レフリー」

審判員のことである。日本ではスポーツの審判のことを言うが、学術論文の審査員のことにも指す。-ee の法則にしたがって、この位置にアクセントがある。発音は「(ウ) レフリー」となる。

レポート

report (re-port) [ripó:rt] 「(ウ) リポート」

報告(書)のことである。日本語につられて「レ」と発音しないように注意する。発音は「(ウ) リポート」となる。

日本では、「学生がレポートを提出する」などというが、この意味は英語にはない。英語では a term paper という。

レモン

lemon (le-mon) [lémən] 「レムン」

頭にアクセントがあり、-mon はあいまい母音である。発音は「レムン」となる。最初の音が l であるので、舌を上あごの歯茎の裏につけて「レ」という音を出す。

ローカル

local (local) [lókəl] 「ロウクウ」

地元のという意味である。ローカル番組やローカル放送局などと言う。発音は「ロウクウ」となる。最後は”l”であるがウという発音に近い。

ロケ（和）

野外撮影という意味であるが、ロケーションを日本式に略したものである。

ロケーション

location (lo-ca-tion) [loukéiʃən] 「ロウケイシュン」

場所や位置という意味である。ただし、日本語では野外撮影という意味で使われる。発音は「ロウケイシュン」となる。

ロケット

rocket (rock-et) [rákət] 「_(ウ)ラクト」

垂直に推進する機構をもった飛行物体であるが、ロケットで通る。発音は「_(ウ)ラクト」となる。

ロジスティックス

logistics (lo-gis-tics) [lodzístiks] 「ロジスティクス」

兵站術という意味であるが、いまでは後方支援という意味になる。外務省でロジスティックス（後方支援）担当の課長補佐がつかまった事件がある。発音は「ロジスティクス」となる。

ロード

road (road) [róud] 「_(ウ) ロウド」

道路あるいは道という意味である。日本語ではロードショー (road show) を略してロードと呼ぶことがある。これは地方巡業である。また、野球のロードゲーム (road game) つまり遠征試合のこともロードと呼ぶ。例えば「ロードに出る」などと言う。発音は「_(ウ) ロウド」となる。

ロビンフッド

Robin Hood (Rob-in Hood) [rábin fúð] 「_(ウ) ラビン フド」

中世イギリスの伝説的な英雄である。シャーウッドの森に住み、悪代官や悪徳貴族から金を奪って、貧しい人々に配ったとされる。発音は「_(ウ) ラビン フド」となる。

ロビンソンクルーソー

Robinson Crusoe (Rob-in-son Cru-soe) [rábinsn krú:sou] 「_(ウ) ラ
ビンスン クルーソウ」

英国の小説家デフォーの小説の主人公。船が難破して漂着した無人島で工夫をこらしながら 28 年間の生活した。発音は「_(ウ) ラ
ビンスン クルーソウ」となる。

ロブスター

lobster (lob-ster) [lábstər] 「ラブストゥ」

海ザリガニであるが、ロブスターで十分通る。シーフードレストラン (Seafood restaurant) の最高級食材のひとつである。メインロブスターというのは、米国のメイン州 (Maine state) で獲れたロブスターのことである。発音は「ラブストゥ」となる。

ロボット

robot (ro-bot) [r^oubat] 「^(ウ) ロウバト」

人造人間のことであるが、普通にロボットで通じる。発音は「^(ウ) ロウバト」となる。

ローン

loan (loan) [l^oun] 「ローン」

貸付や融資のことである。国債のことを a national loan と呼ぶ。a government loan は政府債であるが、同様の意味で扱う。以前殻指摘されているが、日本の国債は能力以上に発行しすぎ、暴落の危機にある。ただし、一般のサラリーマンには自宅のローンの方が深刻であろう。発音は「ローン」となる。

ロンドン

London (Lon-don) [l^ondən] 「ランドン」

英国の首都である。アクセントが頭にあり、-don はあいまい母音である。よって、発音は「ランドン」となる。

ロンリー

lonely (lone-ly) [l^ounli] 「ローンリ」

「孤独の」あるいは「寂しい」という形容詞である。feel lonely で孤独を感じるという意味になる。日本語でも、ロンリーをまったく同様の意味で使う。"Lonely I'm Mr. Lonely."で始まる歌がヒットした。発音は頭が”l”の音であることに注意し、ローンとウを入れる。よって「ローンリ」となる。

ワ行

ワイキキ

Waikiki (Wai-ki-ki) [wáikiki:] 「ワイキキー」

ハワイのオアフ島にある有名なビーチである。アクセントは、最後の-ki にあり、「ワイキキー」となる。

ワイヤレス

wireless (wire-less) [wáíarləs] 「ワイウルス」

無線という意味である。発音は「ワイウルス」となる。

ワーク

work (work) [wǝr:k] 「ワーク」

あいまい母音である。w と一緒にあいまい母音を発音するのは結構難しい。口をつきだすようにして「ワーク」と発音するのがより原語に近いが、できればワとウの中間音を目指す。word も同じで、発音記号では[wǝr:d]となり、「ワード」となる。

ワクチン

vaccine (vac-cine) [væksí:n] 「ヴァクスイーン」

予防接種用の薬液のことである。ワクチンで一般に通じるが、英語の発音は大きく異なる。アクセントが-cine にあり、「ヴァクスイーン」となる。

ワースト

worst (worst) [wǝrst] 「ワースト」

これもよく使われる日本語であるが、w とあいまい母音である。よって「ウースト」となる。

ワースト記録は the worst record である。ワーストテンは the worst ten と言う。この逆はベストテンであり、the best ten である。レコードや本の売上げなどの場合は、トップテン (the top ten) とも言う。

ワープ

warp (warp) [wɔ:p]

SF(science fiction)小説で、空間のひずみを利用して普通では移動できない距離を移動することをワープと呼んでいる。もともとは、「ゆがみ」や「ひずみ」という意味である。日本語ではスペルにつられてワープと発音するが、英語では「ョォ-フ」となる。

ワープロ (和)

英語のワードプロセッサ (word processor) を勝手に日本式に略したもの。

ワード・プロセッサ

word processor (word proc-ess-or) [wɔ:rd prásesɔ:]

日本人は英語が長い時には、このように略してしまうのが得意であるが、ワープロでは全く意味が通じない。本来はワード・プロセッサであるが、これも問題がある。発音は「ウ-ド プ-ラ-セ-スッ」となる。

ワールド

world (world) [wɔ:rlɔd]

まったく同様に、「ウワールド」となる。

ワンマン (和)

日本語では、「独裁者」あるいは「独占的な」「わがままな」という意味でワンマンという用語を使うが、英語にこの意味はなく、完全な和製英語である。

ただし、ワンマンショー (a one-man show) という英語はある。日本と同じように独演会あるいは個展という意味である。社員が一人しかいない会社を a one-man company という。個人事務所は a one-man office となる。つまり、独裁的なという意味はないが、一人のという意味はあるのである。